

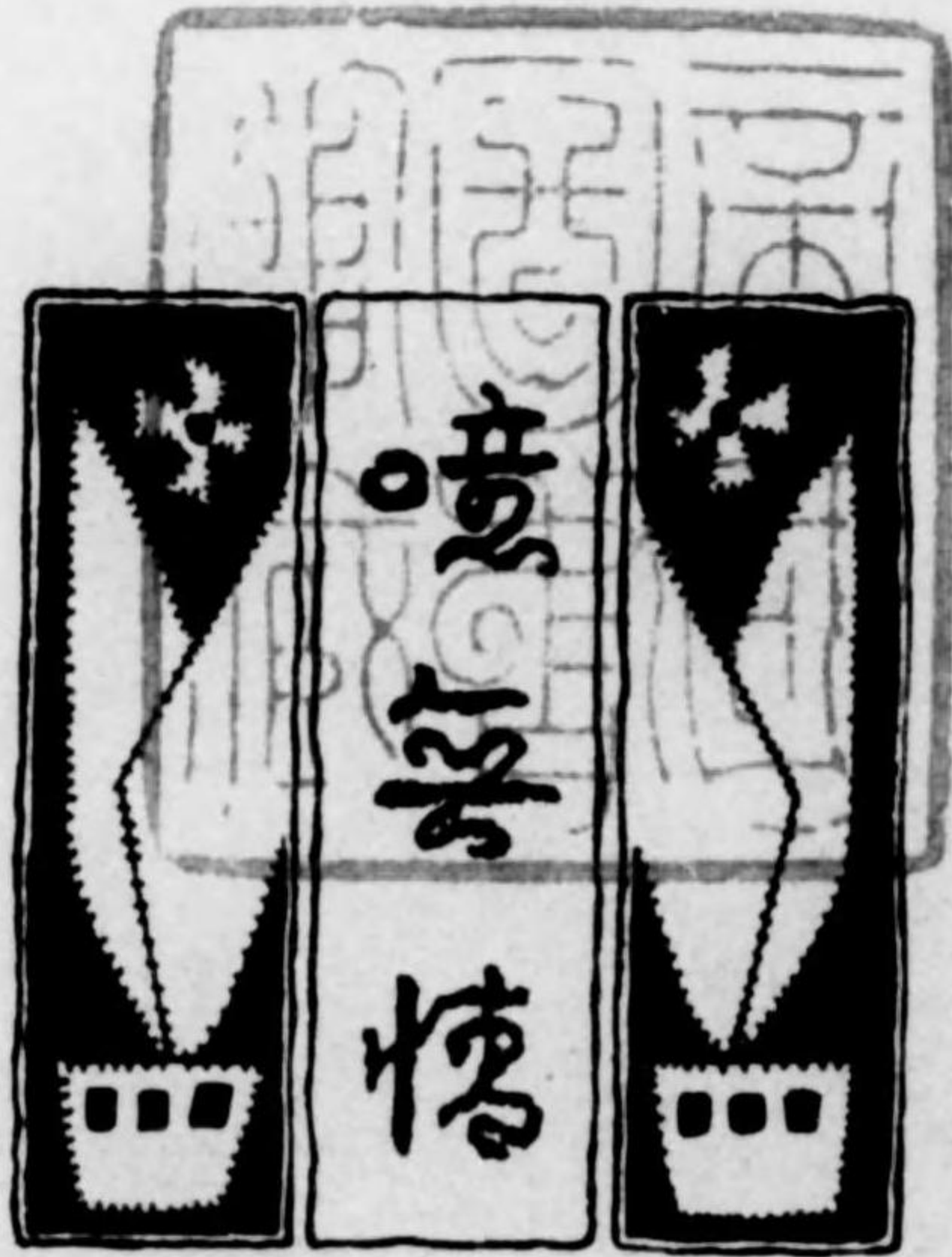
特275
405



始



特 275
405



星岩溪香





小引

「噫無情」と題し茲に譯出する小説は、キギクトル、マリイ、ユーゴー先生の傑作「レ、ミゼラブル」なり

著者ユーゴー先生は多くの人の知れる如く、佛國の多恨多涙の文學者にして又慷慨なる政治家なり、詩、小説、戯曲、論文等に世界的の傑作多し、先生千八百二年に生れ八十四歳の壽を以て千八十五年(明治十八年)に死せり。

「レ、ミゼラブル」は先生が國王ルキ、ナボレオンの千八百五十年の非常政策の爲に外國に放逐せられ白耳義に流竄せる時に成りしと云へば、即ち五十歳以上の時の作なり、最も成熟せし著作と云ふ可し(先生が初めて文學者として世に著はれしは其十四歳の時に在り)

「レ、ミゼラブル」とは英國にては視るに忍びざる不幸の状態を指すの語なり、佛語にては多く『身の置所も無き人』と云ふ意味に用ゐらる、即ち社會より窘寄せられて喪家の犬の如くなる状態に恰當する者の如し、我國の文學者が一般に『哀史』と云ふは執れの意に取りたるやを知らずと雖も、先生が之を作りたる頃の境遇より察すれば、前の意よりも後の意に用ひたる者なるが如くに察せらる。

余、先頃、チユマのモント、クリストを巖窟王と題せしに或人は巖窟王の音が原音に似たりとて甚く嘆稱せられたり、余は爾まで深く考へたるに非ざりしを、勿怪の幸ひと云ふ可し。今「レ、ミゼラブル」を「噫無情」と題し、又音の似通ひたりと云ふ人あり、然れども之も爾うまで考へしには非ず、唯だ社會の無情より、一個人が如何に苦めらるゝやを知らしめんとするが原著者の意なりと信じたれば、他に適當なる文字の得難さ

に斯くは命名したるなり。

原書はユーゴ先生の生存中に幾版をも重ねたれば先生親から幾度も訂せし者と見ゆ、英譯にも數種あり、余の有せる分のみにても四種に及ぶ、猶ほ耳に聞きて未だ手にせざる分も無きに非ず、是等を比較するに、或者は高僧ミリエルの傳を初に置き、或る者はチャン、ヴルチャンを初めに置きたるが如き最も著るしき相違なり、思ふにミリエルは先生が理想とせし人なる可ければ卷首に之を掲ぐるが當然なる可きも、晩年に及び讀者に與ふる感興の如何に従ひて次章に移したるならんか、余は（新聞紙に掲ぐるには）後者の順序が面白かるべきを信じ、其れに従ふ事としたり。

譯述の體裁は余が今まで譯したる諸書と同く、余が原書を讀て余の自ら感じ得たるが儘を、余の意に従ひて述べ行く者なれば、翻譯と云はんよりも人に聞きたる話をば我が知れる話

として人に話すが如き者なり、若し此を讀みて原書に引合せ
以て原書を解讀する力を得んと欲する人あらば失望す可し、
斯かる人に對しては、余は切に社友山縣五十雄君の英文研究
録を推薦す(内外出版會社の出版にて一冊定價二十錢、英米の
有名なる作者の詩歌及び短話を親切に翻譯し註解したる者な
り)

若し原書を句毎に譯述すれば五百回にも達す可し、少くとも
三百回より以下なる能はず、然れども余は成る可く一般の讀
者が初めの部分を記憶に存し得る程度を限りとし百五十回乃
至二百回以内に譯し終らんことを期す。

ユイゴ一先生が此書に如何の意を寓したるやは余不肖にして
能く知らざるなり、之を學友諸氏に質すに、社會組織の不完
全にして一個人が心ならざる境遇に擠陥するを慨したるな
りと云ふ人多し、多分は然るなる可し、先生の自ら附記した

る小序左の如し

▲法律と習慣とを名として、社會の呵責が此文明の眞中に人
工の地獄を作り、人の天賦の宿命をば人爲の不運を以て妨
ぐることの有る限りは

▲現世の三大問題、即ち労働世界の組織不完全なるに因する
男子の墮落、饑餓に因する女子の滅倫、養育の不足の爲の
兒童の衰殘、を救ふの方法未だ解釋せられざる限りは

▲心の饑餓の爲に衰死する者社會の或部分に存する限りは
▲以上を約言して廣き見解に従ひ、世界が貧苦と無學とを作
り出す限りは

則ち此種の書は必要無きこと能はざる也

蓋しルイ、ナポレオンが非常政策を發する前、佛國には社會
主義の勃興あり、暗に政府及び朝廷を驚かしめたり、先生は
是れより先き、文勳を以て貴族に列せられたるも深かく社會

黨の運動に同情を寄せ、王黨を脱して共和黨に入り大に畫策する所ありたれば、社會下層の無智と貧困とを制度習慣の罪と爲し、其の如何に凄慘なるやを示さんと欲したる者ならんか、先生が流竄の禍を買ひたるも畢竟は斯る政治上の意見の爲なり、若し我が日本に『レ、ミゼラブル』の一書を翻譯する必要ありとせば、必ずや人力を以て社會に地獄を作り、男子は労働の爲に健康を損し、女子は饑渴の爲に徳操を失し、到處に無智と貧苦との災害を存する今の時にこそ在るなれ、唯だ余がユーゴー其人に非ざるを悲しむ可しとす。

譯者識

噫 無情

一人の旅人

ヴキクトル・ユーゴー著
黒岩涙香譯

佛國の東南端プロボンと云ふ一州に、ダイン(Digne)と稱する小都會がある。

別に名高い土地では無いが、千八百十五年三月一日、彼の怪雄拿翁がエルベの孤島を脱け出してカンの(Canon)港に上陸し、巴里の都を指して上つたとき、二日自に一泊した所である、彼れが檄文を印刷したのも茲、彼れの忠臣ベルトラン將軍が彼より先に幾度か忍び來て、國情を偵察したのも茲である。

此外に此小都會の多少人に知られてゐるのは、徳望限り無き高僧爾里耳先生が過ぐる十年來土地の教會を管して居る一事である。

今は其より七ヶ月の後、同じ年の十月の初め、或日の夕方、重い足を引摺って漸く此地に歩み着いた一人の旅人は、日に焦けた黒い顔を、古びた破帽子に半隠し、確には分らぬが年頃四十六七と察せられる、靴も着物も其筒袴も、ポロ／＼に破れて居るは云ふに及ばず、埃に塗れた其の風體の怪しさに、見る人は憐みよりも恐れを催し、路を避ける程で有つたが、彼れは全く疲れ果て居ると見え、町の入口で、汗を拭き／＼井戸の水を汲上げて呑み、又一二丁行きて町中の井戸で水を呑んだ、折も彼れは何處から来た、何處へ行く、何者である、来たのは多分、七ヶ月前に翁の来た南海の道から有らう、行くのは市廳の方である、頓て彼れは市廳に着いた、爾して最う役人の退けて了つた其の中に歩み入つたが、當直の人にで逢つたのか凡そ半時間ほどにして又出て来た。是れで分つた、彼れは何處かの牢で苦役を勤め、出獄して他の土地へ行く刑餘の人である途々神妙に役所へ立寄り、黄色い鑑札に認めを印して貰はねば再び牢屋へ引戻されるのだ、法律の上から「油斷のならぬ人間」と認められて居る奴である。

市廳を出てから、彼れは又町を徘徊ふた、時々人の家を覗き込む様にするは、最早空腹に堪へ兼ねて、食と宿りとを求め度いのであらう、其うちに土地で名高いコルバスと云ふ旅店の前に行つた、入口から直に見通した料理場に、燃揚がるほど炭の火が起つて、其上に掛けた平鍋には鬼

の丸焼や雉の揚げが轉がツて、脂のたぎる音が甘さうに聞え、得ならぬ匂ひが腸まで浸透るほどに薫つて居る、勿論彼れは此前を通り切れぬ、油揚げに釣られる狐の様で踉々として中に入つた。

中には主人自ら忙しく料理の庖丁を操て居たが、客の来た物音と知り、顔も揚げずに「好く入らツしやい、御用向は」と問ふた、疲れた空腹の、埃だらけの旅人は答へた「夕飯と寢床とを、主人「其れはお易い御用です」と云ひつゝ初めて顔を上げ、客の風體を見て案外に感じたか、忽ち澁々の聲と變つて「エー、お拂ひさへ戴けば」と云ひ足した、客は財布を出し掛けて「金は持つて居るよ」主人「それなら宜しい」と無愛想よりも稍や當惑げである。

客はがっかりと安心した體で、背に負つてゐた行李と懐中の財布と、手に持った杖とを傍に置いた、其間に主人は帳場に在つた新聞紙の白い欄外を裂き取つて、鉛筆で走り書に何か書認め、目配せを以て傍に居た小僧を呼び、二言三言其の耳に囁いて今の紙切を手渡すと、小僧は心得た風で戸外の方へ走り去つた。

十月の初めだから夜に入ると聊か寒い、殊に茲はアルプス山の西の裾野に當り、四時絶間無き頂邊の雪から冷切た風が吹下すので、外の土地とは違ふ、先刻まで汗を絞つて居た旅人も早や火の氣が戀しく成つたと見え、火鉢の方に手を延べて、少しも主人の仕た事に氣が附かず、唯だ空

腹に攻られて「何うか食ふ物だけは急いで貰ひ度い」主人「少々お待ち下さい、唯今」と云ふ所へ小僧は又急いで歸り、返辭と見える紙切を主人に渡した、主人は之を讀んで眉を顰め、暫し思案に餘る體で、其紙切と客の横姿とを彼是れ見較べる様にして居たが、爾とも知らぬ客の方は、空腹の上に猶だ氣に掛る事でも有るのか、少しも心の引立たぬ景状で、首を垂れて考へ込んで居る遂に主人は決心が着いたと見え、突々と客の傍に寄り「何うも貴方をお泊め申す譯に行きません」全く打つて變つたと云ふ者だ、客は半分顔を揚げ「エ、何だと、騙られるとも思ふのか、では先拂に仕やう、金は持つて居ると斷つたのに」主人「イ、エ、室の空た所が有りませぬゆえ」客は未だ失望せぬ、最と靜かに「室が無ければ馬屋で好い」主人「馬屋は馬が一ぱいです」客「では何の様な隅ツこでも構はぬ、薬さへあれば敷て寝るから、先ア兎も角も食事を濟ませてからの相談にしやう」主人「食事もお相憎様です」客は初めて驚いた「其様な事は無い、私は日の出ぬ前から歩き通して、腹が空で死にさうだ、十二里も歩いて來たのだ、代を拂ふから食はせて貰はねば」主人「喰べる物が無いのです」客は聲を立て「笑ツた、全く當の外れた笑ひである、爾して料理場に向き「喰べる物が無いとな、彼の澤山あるのは何だ」主人「あれは總てお誂へです」客「誰の」主人「先客の」客「先客は何人ある」主人「ハイ、アノ、十一二人客「十二人

フム、二十人だツて食ひ切れぬ」云ひつゝ客は坐り直して更めて腰を据え「茲は宿屋だらう、此方は腹の空いた旅人だから、食事をするのだ」主人は店口で高聲などを好まぬ、客の耳に口を寄せ「今の中に立去つて下さい」全くの拒絶である放逐である、客は振向いて何事をか言返さんとしたが、主人が其の暇を與へぬ、猶も其耳に細語いて「無言でお去り成さい、貴方の名も知つて居ます、云ひませうか、貴方は我、瓦我」我、瓦我と云ふ奇妙な名に、客はギクリと驚いた。

二 其家を窺き初めた

宿屋の主人は、猶も彼の紙切を客の目の前に差附けて言葉を繼ぎ「我、瓦我が何者かと云ふ事も分つて居る、茲で聲を立て、云ひませうか、サア云はぬ中に立去り成さい、私は一目見た時に怪しいと思つたから直に小僧を警察へ走らせたら、此通りの返事です、讀めるなら自分で讀んで見るが好い」旅客は纔に眼を揚げて其紙切を見た、主人は最後の一言を下した「私はお客様に丁寧だから……サアお去り成さい」最う去らぬ譯に行かぬ、客は首を垂れたまゝ荷物を取上げて悄然と立去つた、眞に喪家の犬よりも哀れむ可しである。

立去つて彼れは人の家の軒下を潜る様にし、何處と目指す頼りも無く歩んだ、首は依然と垂れて背後をも向かぬ、若向いたらいまの宿屋の門口に主人を初め多勢の人が立ち、自分の背後影に指さして喋々と噂して居る状を見、従つて我、瓦我と云ふ危険な男が此土地に入込んだといふ噂が半時間と経ぬ中に、此狭い町中に廣がる事に氣の附く所であつた。

彼れは少しも是等の状を見ぬ、彼れの様な難儀の重荷を背負つて居る者は振向きなどせぬ、振向かずとも自分の後へ不仕合のみ附いて來ることを、知り過ぎるほど知つて居るのだ。

唯だ失望の餘りに彼れは幾時か夢中の狀で歩んだが、忽ち空腹の苦しさが冴へ返つたので氣が附いた。何處かで食と宿とを得ねば成らぬ、何うせ宿屋らしい宿屋では泊て呉れぬのだから、今度は何の様な所でも好いと首を擧げて見廻る目先に、シヤフラー街と記した安宿の看板が見えたア、助かるのは茲である、直に彼れは歩み寄つたが、中には矢張り甘さうな食物の匂がして幾人かの客が飲み且食ひつゝ談話に興じて居る、入口の町の方へ開いてゐるのに彼れは氣が退けて、其處からは得入らず、横手の潜りを開くと、喜んで迎へた主人「サア、丁度最一人お客が欲しいと思つて居た所です、夕飯と寢床、分りました、肴も澤山に出來て居るし、サア先づ火の傍へ來てお燗り成さい」全く助かつた思ひがして旅客は又も荷物を卸した。

動揺めいて居た客の一同は何の様な仲間が殖えたかと此方を見たが、其中の一人は丁度先刻、彼のコルバスの宿屋へ馬を預け、此旅客の斷られる所を見、又其の悄々と立去る背影をも眺めて色々の噂を吐いた一人である、彼れは今しも打寛がんとして居る新客の姿を篤と透かし見て、此家の主人を手招き其耳に囁き告げた「此奴だよ、此奴だよ、我、瓦我と云ふ監視者は、何でも非常に危険な悪人だと云ふのだから」斯う語つて居る中に新客は少し、間眼を上げて此方を見た確に其顔には天然に刻み附けた深い悲しみの中に、今ヤツと少しの安心が浮み掛て居る、頬の角張つた邊りから眉骨の高い所、決心も有り、元氣もある、一寸見れば打挫けて意氣地無くも見えるけれど、随分殿しい相も有つて殊に深い眼が、蹙んだ眉の底に光つて居る状は、草叢の暗の奥から火の光の見える様で何と無く物凄けれど、彼は自分の事を囁かれて居るとも思はぬか、頓て又俯向いた。

今の囁きを聞終つた主人は直に新客の許へ來て、無遠慮に其肩へ手を掛け「茲に居ては可ません、立去つて貰ひませう」客は最う抵抗する氣力も無い、殆ど饑に死に掛けて居る様な者だ、低い聲で「エ、知つて居るの」主人「知つて居ます」客「彼方の宿屋でも斷られ」主人「だから此方の宿屋でも斷るのだ」客「では何處へ行けと云ふのだ」主人「何處へでも勝手に憐此客は又

荷物を取上げて、力無く外に出た、外には先刻の宿屋の邊からゾロ／＼と後に附いて来た児供が待つて居て、彼れの去る背後から、泥棒猫をでも追ふ様に石を投げた、彼れは初めて振向いて、持つて居る杖を振上げた、児供は群鳥の様に散つた。

彼れは此土地の監獄の前に出た、最う茲より外に彼の宿とす可き所は無い、其まゝ門の戸に垂れて居る案内の鎖に手を掛けて鈴を鳴らした、番人が窓の戸を開けた、彼れは破れ帽子を脱いで一禮し「お番人様、何うか戸を開いて私を牢の中へ、今夜だけお留守下さい」窮状も茲に至つては極度である、直に答への聲が聞えた「茲は宿屋では無いワイ、捕縛せられて来い、爾うすれば留めて遣る」聲と共に窓は閉ぢた。

此上は何處へ行く、行く所は無けれど行かねば成らぬ、彼れは但有る細道に入つた、茲には多く庭の廣い屋敷が有つて、中には低い生垣に圍まれて、飛び越れば入ることの出来さうな庭も有る。彼れは此家彼の家と見廻る中に、一軒、窓から燈光の差して居るが有つた、彼れは先刻安宿を窺いた様に、身體を傾けて、其の家を窺き初めた。

三 高僧と前科者

窺いて見ると、確に幸福な家庭らしい、主人と見ゆる四十恰好の莞爾な男が膝に兒を抱き、前面には妻と見ゆる若い女が之も兒を抱て乳を呑まして居る、此の一同の機嫌の好い状を見ると、定めし愛想の有る家族らしい、茲ならばと旅人は近寄つて戸を叩いた、二度叩いて三度目に主人が窓まで立つて来て「何方」と問ふた旅人「御免下さい、行暮れて難儀する旅の者ですが、何うかお情に一夜の宿を、庭の隅でも何處でも宜しいのですから 主人「大通へ行けばコルバスと云ふ宿屋が有るのに」旅人「ハイ其處へ行つたけれど断られました」主人「ではシャフラー街に安宿が有る」旅人「イエ、其安宿でも断られて来たのです」此返事に主人は何か心附いた様に、急に旅人の風體を見直した、勿論怪しげな身姿だから驚いて「ヤ、ヤ、此人が先刻聞いた彼の人だよ」と、叫んだ、扱は油断の成らぬ前科者と云ふ噂が、早くも此静かな家に迄傳はつて居るのだ主人の叫びに妻も合點が行つたと見え、遽て子供を確と抱め「早く追拂つて下さいよ」と恐ろしげな聲を立てた「去れ、去れ、野猫奴」と主人は言ひ捨てた。

旅人「では後生ですから水を一ぱいお飲ませ下さい」主人は床の間に在る獵銃を見返りつゝ「水よりは彈丸を振舞つて遣らう」とて戸を閉ぢた、何處へ頼つても同じ事である、泊て呉れる家は到底無い、又も旅人は茲を去つたが、寒さと空腹と交る／＼身を賣る、切ては一方だけでも逃

れ度いと、猶も見廻し見廻して少し行くと或家の庭に、低い假小屋の様な者が有る、多分は土方か何か道具でも入れて置く爲に作つて有るのだらう、此中で一夜を明せば風と霜の寒さ丈は凌がれると、直に生垣を飛び越えて中に入った、小屋の入口は意外に小さい、けれど彼は入り込んだが、背の袋が邪魔に成るから、向き直して卸さうとすると、入口の外で唸る様な聲が聞えた、顔を上ると巨い番犬の頭が我が頭の邊へ乗し掛けて居る、ア、此小屋は犬小屋なんだ、グズグズすれば何の様な目に遭はうも知れぬ、直に彼は杖を正面に構へて犬を防ぎ眞に這々の體で逃出した。

愈々最う行く所が無い、ア、犬でさへ小屋が有るのに「己は犬にも劣るのだ」と呟いたが此上は野か山で木蔭を頼む一方だ、又も踉蹌いて足を引摺り、今度は町の外へ出た、此時、日は既に暮果て、空も薄曇り、唯月の出やうとする山の端のみ幾分か明るいかと思はれる、眞の夜半より却て心細く物凄しい時刻である、町を外れて少し行くと横手に丘が有り、丘には樹も茂つて居る如く暗く見える、彼は其の方を望んだが見震ひした、眞逆に暗闇を恐ろしと思ふ様な境涯では無からうけれど、景色が總て恐ろしく感ぜられる場合が有る、斯うなると人のみで無く天然までも情ないのだ。

彼れは最う氣力が無い、又引つ返して町に戻つた、爾して又も彷徨ひ歩むうち、教會堂の前に出た、此様な身に取つては神も佛も有つた者か、教會堂など、斯様の者の立て居るさへ忌まはしい、彼は拳を固め、其の屋根の方を睨み、叩き附ける様な身眞似をした、實に無理も無い仕打である。

其れから又歩まうとしたけれど足が利かぬ、少し離れた空地の様な所に、腰を掛けころの石が有つた、彼れは其上に腰を卸した、胴から上を横にした、全く疲れ盡した状である。

丁度此の所へ、教會堂から一の老婦人が出て来た、暗い所に彼れの横たはつて居る姿を見留め怪しんで傍に寄り「オヤ、此人は先ア、何をして居るの」と問ふた、彼れ「見られる通りです、寝るのです」婦人は流石に教會から出るほど有つて憐みの心が深いと見え「エ、石の床に」彼れは自分の身を嘲つて「ハイ十九年の間、冷たい木の床に寝て来ました、今夜は石の床に有附きました」何と云ふ無様な言葉だらう、婦人「では兵隊で有つたの」彼れは其口に隨つて「ハイ兵隊でした」婦人「宿屋を尋ねれば好いのに」彼れは最う、宿屋で追拂はれた白状はせぬ、單に「錢が有りません」婦人は財布を探り「オヤ、何うしたら好からう、唯た四錢しか持つて居無いが」彼れ「四錢でも好い、下さい」と受取つた、世間が最う、皆我に情れないと思へば此様な心にも

成るのだ 婦人「だつて是れ許りでは何うする事も出来ぬ、定めしお腹も空て居やう、寒くも有らう、何處か一夜の宿を恵んで呉れる家が有さうなもの」 彼れ「有りません」 婦人「乞ふて見たの」 彼れ「ハイ泊て呉れやうと思ふ家は一軒残らず、爾して皆断られて了ひました」 婦人は暫し思案の體で四邊を見廻し、頓て思ひ浮んだ様に、此を空地の隅に當る屋根の低い家を見遣つて「彼の家へも願つて見たの」 彼れ「彼の家ですか、イ、エ未だ」 婦人「では願つてお見な」 「では願つてお見な」との短い一語が、後から思ふと眞に不思議な因縁を爲した、彼れは其の言葉に従つて、指された家の戸を叩いた、中から直に「お入り成さい」との心好き返辭が聞えた。

此家は爾も誰の家、篤行双び無しと稱せらるゝ彌里耳僧正の邸である、ア、高僧と此の前科者何の様な對照だらう。

四 銀の皿、銀の燭臺

僧正とは僧侶の中で極高い身分である、當時此國の官制では陸軍大將の直次に位する格式と爲つて居た。

今旅人が戸を開けて入つた此家の主人が其の僧正なんだ、十年前に此地の寺領を預つて以來、彌里耳先生と云ふ名が殆ど慈善の神の様に思はれて居る。

齡は本年七十五歳、家族としては、其身より十歳ほど年下なる妹御と、老女一人である、初めて此土地へ赴任して來た時、直に貧民病院を見廻り、其の建物の狭く穢くろしいのを見て、廣い立派な自分の官宅と取替た、何も三人の家族に廣い住居は要ぬから、其れよりは多勢の貧しい病者に裕りを與へるが好いとの見に出たのだ、此一事でも大方其の人柄は察せられる、年々政府から得る俸給が一萬五千法（一法は今の相場にて凡そ日本の四十錢）其内一萬四千法までを、年々悉く慈善事業に寄附し、其身は單に一千法妹御の身に附いた所得五百法とで、極めて質素に暮して居る、是では餘り酷いからとの老女の苦情で、別に地方政廳から馬車代として年三千法を受くる事に運んだが、此三千法も直に此の慈善事業へ一切寄附することに取極めた。

是からと云ふ者は土地の人が徳に感じ、總て恵み金の類をば此僧正の手に托する事になつた、之が爲め、年々僧正の手を経る金額は實に夥しい高である、けれど授ける豊かな人よりは何うしても受くる貧しい人の方が多から一錢でも僧正の爲にはならぬ、のみならず時々分與へるに不足して自分の乏しい家計を割減す事がある。

凡そ人の艱難病氣と有らば何の様な危きを冒しても之を救ふ、此點では慈善家たるのみで無く勇者である、けれど世間一般の宗教家の様に決して殿しい意見は持たぬ、本来由緒ある家に生れ華美と贅澤の中に育つた人で、唯だ革命の亂の爲に家を失ひ、亂を他國（伊國）へ避けてゐるうち最愛の妻に死なれて、其れが爲め痛く世を果無み、發心して宗教に歸したとの事である、だから若い時には普通の俗人と同じ様な行ひをしたであらう、其れは自分で常に云ふのだ、従つて人に説く意見も柔かで無理が無い、先づ斯うだ「何うでも人と云ふ者は肉體と云ふ重い荷物を背負てゐるのだ、此荷物が常に慾心や過ちの元と爲るから、油斷無く之を見張つてゐねば成らぬ、出來る丈は之を抑へ附け、之に勝つ様にして、萬々止むを得ぬに至つて之に従へ、従へば罪と爲るのだ、けれど全く止むを得ぬ場合ならば恕せられやう、轉んで膝を突くのは仕方が無いから直ぐに其の突膝で神に縋り、膝より上に墮落せぬ様にせよ、完全と云ふ事は神より外に無いのだから人は望んでも及ばぬ事、人は唯だ正直にせねばならぬ、過ちも、罪を犯しても其でも正直を忘れるな、一生懸命に罪を少くする様に勉めるのが人の道だ、全く罪の無いのは神ばかりだ、罪とは肉體に籠もつてゐる引力の様な者だ」と能く人情を嚙分けた穩かな意見である、人の服するも無理は無い。

此夜僧正は夕方の散歩から歸り、室に閉ぢ籠もつて書ものをしてゐた、所へ、夜食の用意が出来たと見え、老女が来て戸棚の銀製の汁皿を出して行つた、汁皿が銀製とは此の平民主義平等主義の僧正に不似合だけれど、之は先祖から傳はつてゐる大事の寶物で、僧正には此の銀の皿で汁を吸ふのが唯だ一つの贅澤である、皿の數は都合六枚の一组で、其外に銀の燭臺が二本ある之も親類から遺物として受けたので、毎も煖爐の上の棚に一對揃ふて置いてある、客の有る事には用ふるのだ。

能く規則の行届いた家だから、皿が出れば直ぐに食事だ、僧正は爾と知つて、書ものを罷めて勝手へ行くと、茲が食堂をも玄關をも兼ねてゐる、戸を開けば直ぐに往來だ、不都合な建て方ではあるけれど、貧民病院を其まゝ住居に用ひてゐるのだから仕方が無い、此時老女は、僧正の妹御に向かひ頂りに宵に買物に出たとき町で聞いて來た恐ろしい旅人の話をしてゐる「何でも十九年も長い間懲役にゐた奴だと云ひますから屹度今夜、何處へか泥坊に入りますよ、町中では最う皆んなな恐がつて戸を閉ぢてゐます、此お家でも何うか入口の掛金と戸棚の錠前を拵へねば、銀の皿を盗まれては大變です」僧正は聞きつゝ卓子に向かつて坐した丁度此時である、外から旅人が戸

を叩いたのは、直ぐに僧正の口から「お入り成さい」との返辭が出た、之は誰彼の差別は無い、どの様な場合でも訪なふ者さへあれば必ず同じ返辭をする、僧正の家には秘密も無い、都合も無い、難儀する人は救ひ、乞ふ人には與へ、自分の住居を自分の家とも思はず、財産にでも勞力にでも、全く自分と云ふ事を忘れてゐるのが、誰にも眞似の出来ぬ所である、是であればこそ徳行なんだ。

返辭に應じて入口の戸は開かれた、開いた人は殆ど決死の心とも云ふ可きだ、茲で救はれねば救はれる所は無い、彼は突と入つた、背には袋があり手には杖を持つてゐる、風體の尋常ならぬは云ふに及ばず、野卑な、大膽な、疲勞した、爾して亂暴らしい顔が燈火の前に突出た。

五 神の心と云ふ者だ

全く此旅人は、其筋から銘を打たれてゐる通り、「油斷の爲らぬ奴」である、眞に恐る可き人間である。

燈火の前に立た其顔の凄さ、其姿の恐ろしさ、老女も僧正の妹御も我知らず逃やうとする如く立上つた、若し日頃から僧正の感化を受けてゐなんだなら、必ず兩女とも叫び聲を發したゞらう

唯泰然と静かなのは僧正である、驚きも騒ぎもせぬ僧正の此静かさに妹御は直ぐ席に復して、僧正の顔を眺め、老女は立たまゝ棒の様に成つてゐる。

頓て僧正は來客に同かひ、穩かに其の顔を見て、問はんとした、客は問はるゝを待たぬ、遽てた様な聲の、高い調子で「御覽下さい、私の名は我、瓦我と云ひます、懲役人です、十九年の間ツーロンの獄で懲役を勤め牢から出されて、ポタリと云ふ土地へ遣られる途です、今日は朝から十二リーグ(約十七里)歩み、疲れ果て此土地へ着いたけれど、飯食ふ所も寝る所も有ません、行く先々で皆斷られ仕方無しに此家の外の石の上に寝てゐたら、教會から出た婦人が此家の戸を叩いて見よと教へて呉れました、其だから叩きました、泊て呉れますか泊ませんか、此家は宿屋ですか何ですか、錢は斯う見えても持つてゐるのですよ、十九年の間牢の中で溜つた工錢が百零九法と十五錢、四日の旅で廿錢使つた丈です、宿賃は拂ひますが泊て呉れるのですか、呉れぬのですか」

此返辭が何より先に開度いのだ、又も失望するが厭だから、彼は第一着に自分の履歷を晒げ出した、僧正は人を斷つた事が無い返辭せずとも分つてゐる、直ぐに老女に向かひ例の通に靜かに「サア皿を出してお呉れ」と云つた、此者の爲に早膳立を命ずるのだ、彼に取つては實に意外だ

何にも間違さず、早膳立とは何かの間違ひではあるまいか、彼は突々と又一入燈火の傍に進んで忽然と踏止り「お待ち成さい、お待ち成さい、今私の云つた事が分りましたか、私は懲役人ですよ罪人ですよ半から出された許りですよ、此通り是れ黄色い鑑札を持つてゐます、読んで御覧なさい、極めて危険な奴だと書付けてあるのです」と其鑑札を僧正の前に差附けたが「イヤ貴方が讀まねば私が正直に讀んで聞かせて上げませう、之でも半の中の學校で十九年の間に讀書は覺えたのです、ハ、四十六と云ふ年に成つて自分の兇状を讀む事が出来るのだ」と物凄く自ら嘔つて「ソレネ放免囚、我、瓦我と記してあります、盜を犯して五年、在監中に破牢を企てし事四回、其罪の爲に刑期を延ばさるゝこと十四年、合せて十九年入獄したり、此者は最も危険なり、目を離す可からずと書いてある、全く此通りです、泊て呉れますか、最う腹が空で、疲れて、何か食ねばゐられません、寝るのは馬屋の隅でも好いから、どうかねえ、一夜だけ」

僧正は又老女に向ひ「新しい白布を掛けて寢床の用意をも仕てお呉れ」

僧正の言附けには、一言も無く老女は従ふのだ、唯々として次の室に去つた、僧正は初めて我瓦我に向かひ「サア貴君、此へ据つてお煖り成さい、丁度私共も是から食事を初める所ですから御一緒に致しませう」何と云ふ丁寧な言葉だらう、而も故とで無く自然である、我、瓦我は初め

て泊て呉れる事と合點は行つた、けれど貴君、ア、貴君など云はれるのは今まで覺えの無い事だ、泊を得たのは無論嬉しくも安心にも感ずるだらうが、其れよりは此待遇が怪しい、合點が行かぬ、殆ど恐ろしい、全く僧正の盛徳に打たれたのだ、彼は暫しがほど口も利けぬ、何やら云はふとしたけれど吃つて語を爲さぬ、殆ど狂人の言葉かと思はれる。

稍あつて、彼は切れ／＼に「エ、泊て呉れる、エ、本統、エ、何と仰有つた、私をエ、追拂ひもせずに、前科者を、貴君など、貴方は、誰でも野猫めなど云ひますのに、有難い、有難い、何だか本統に泊て呉れる様に見えるぞ、白い布で寢床の用意など、オ、十九年の間、寢床と云ふ者は知らなんだ、有難い、貴方は善人だ、茲は宿屋ですか、宿屋の、貴方は御亭主ですか立派な御亭主だなア、オ、善人、善人全く宿屋の御亭主ですか」僧正「私は茲に住む僧侶です」我「オ、お坊様、其れでは宿賃などは取らないんだ、成るほど着物を見れば分つてゐる、茲の教會の牧師さんでせう」僧正「爾です」我は半信半疑、夢心地であつたけれど、初めて合點が行つた様に背の囊を卸し「ア、善人だなア、牢屋へも時々牧師と云ふのが来たけれど、何だか分らぬ事ばかり云つてゐたが、エお坊さん、牧師さん、牧師がズツと出世して登り詰ると、僧正と云ふのに成りますよ」聞いてゐた妹御は思はず笑を催した、恐ろしさが稍や薄らいだ、我は語を繼ぎ、

「僧正と云ふのは十九年の間にたつた一度しか牢屋へは来ませなんだ、立派ですぜ、帽子なども金びかで、サ、何だつて陸軍大將の次に附くのだと云ひますもの、貴方の様な、譯の分つた方は僧正に成つたつて可いや牧師では勿體ない」と云ひつゝ篤と僧正の質素な姿を見直して「アア貴方は貧しい、未だ牧師にも成つてゐぬワ、宿賃を拂ひませうか」僧正「其には及びません」答ふる聲には憐みが満ちてゐる。

其中に老女は銀の皿を出して来た、我、瓦我は席に着いた、僧正は老女に向かひ、何だか燈光が暗い様だ」とは銀の燭臺を持つて来いと心だらう、老女が爾う心得て去らうとすると「皿も之では足りないだらうと言ひ足した、六枚も残らず出せとの謎である。

此様に盛徳限り無き高僧でも、児供の様な心がある、尤も児供の様な心だから自然に其徳が高くなるのであらうけれど、皿と燭臺を客に見せるのを日頃から一方ならず歡ばしく感ずる容子である、此外には道樂に類した事が一つも無い、瓦我は既に「貴君」と呼ばれて異様に心が鋭てゐる上に斯様な扱ひを受け、嬉しさと怪しさが何時終るか果が分らぬ「牧師さん—先ア追々牧師に出世成さるのだから、今から牧師さんと云つて置かふねえ、牧師さん、貴方は世間の人の様に、私を追つ拂ひもせず、此通り銀の皿や銀の燭臺を出して、お客扱ひにして下さつて私も最う

何にも貴方には隠しませんよ」とて身上をでも語り相である、僧正は遮る様に「ナニ、何も私へ話すには及びません、此家は私の家では無く、私が此家の主人では無いのですから」我「エ、エ」僧正「此家は誰でも艱難する人の家です、行儀む人が此家の主人です」此言葉が若し心の底に浸込まねば人で無い、イヤ鬼ですらも無い、我「本統にねえ、と殆ど呆れた體である、僧正「貴方の名前も聞かぬうちから分つてゐます」我「エ、聞かぬうちから」僧正「ハイ吾々の同胞兄弟と云ふのです」ア、此者を同胞兄弟、眞に僧正の心は、人の心で無く神の心と云ふ者だ。

六 寢臺の上不起直り

「兄弟」とまでに云はれて、其信切を感じずるにゐられやうか、我、瓦我は陽の底まで、有難さが浸渡つた様に、首を垂れて呟いた「己は最う、食は無くつても可いや、寝無くつても可いや、餘り信切にされるから、空腹いのも忘れて了つた」眞に感極まつたと云ふ者だらう、とは云へ頓て食事の用意が出来ると、彼は餓た獸の如くに食ひ食つた、けれど獻立は極めて質素だ、彼は氣の附いた様に「あゝ牧師さん、貴方よりは馬方の方が餘ほど旨い物を食つてゐます」、僧正は穩かに、「其れは馬方の方が私より骨の折れる仕事を仕てゐるからです」僧正の言葉は總て神々し

い。
 食事の間に僧正は幾度か憐みの眼を以て彼の顔を見、竟に問ふた「随分貴方は苦しい想ひをし
 たでせうね」我は嘲る様に答へた「へん苦しい想ひ、爾です、赤い着物で、獸の様に首輪が箱つ
 て足には鐵の鎖で重い大砲の丸を結び附けられ、何にもせぬのに鞭が降り、一言云へば密室監禁
 です、病氣で寝たとて鎖の離れる暇は無く、全く犬に劣ります、爾して長い十九年を勤めて、揚
 句が此黄色の鑑札で、年は四十六に成りました、此鑑札のある間は、何處へ行つたとて人間の様
 に思つて呉れません……」苦い言葉である、僧正「けれど貴方が世を恨み人を憎む心を以て
 その境遇を出て来たならば、猶ほ悪人では無いのです、眞に憐む可き人と云ふ者です、若更に不
 平を抱かず人をも恨みず、却つて慈悲の心を以て出て来たなら、貴方は何人も及ばぬ程の善人で
 す」

此言葉がどの様な感じを起させたかは分らぬ、猶ほ此後で様々の話をしたけれど僧正は彼れに
 其身の墮落を恥ぢさせる様な事は一切云はず、唯だ眞の兄弟を扱ふ様に、打解けて最と親しく扱
 つたのは此上も無い情である。

頓て一同と共に食事も済んだ、老女は早速に卓子の上を片付け初めた、取分けて、銀の皿を先

に仕舞つたのは仲々の用心である、僧正は我、瓦我に向ひ「サア最うお寝みなさい」とて、銀の
 燭臺の一個を與へ、残る一個は自分が持つて丁寧に彼を寢室に送り届けた。

寢室と云ふのは、此家の間取が宜く無い爲め、僧正の居間を通らねば行かれぬのだ、我、瓦我
 は送られつゝも、深く考へ込む體であつたが、寢室に入つてから何と思つたのか、今まで僧正の
 徳に感じて綿の如く柔かであつたに引替へ、忽ちに打つて變つた様な舉動を示した。

幸に僧正と彼と唯だ二人差向ひである、若も此とき僧正の妹御か老女が居合せたなら必ず恐れ
 戦く所だつたらう、彼れ我、瓦我は垂れた首を忽然として擧げ、僧正に向ひて立ち、兩の手を
 横柄に胸に組て、嚇す様に僧正を睨み附けた、或は飛び掛る積りでともあるのだらうかと思はれ
 た。

何故彼の容子は斯う變つたのだらう、問ふ迄も無い、十九年も牢にゐて荒びに荒びた心が、今
 漸く僧正の親切で治まつてゐたけれど、一時の力は本來の性に勝たず、暫し抑へた反動に其の性
 が跳返る様に湧いて起り自分でも制する事が出来ぬのだらう、全く我を忘れた様な者である、爾
 して噓れ聲を立て「貴方は自分の寢る直ぐに隣の室に私を寝かせて好いのですか」自分の聲の恐
 ろしい響きに、彼れは又心附いたか、忽ち破顔して可々と笑つた、笑ひ聲の物凄さは得も云はれ

ぬ。

けれど僧正の態度は少しも變らぬ、我は又云ふた「貴方は篤と考へての事ですか、私人が人を殺さぬと誰が云ひました」殆ど汝を殺すかも知れぬぞと云様にも聞える、僧正は答へた「其れは神の知る事です」と、爾して我を宥める様に口の中で祈り、猶ほ片手を彼の額の邊まで舉げ、神の恵の、彼が身に加はる様に撫で鎮めて、靜かに茲を去つた。

斯て僧正は自分の居間に入り、又暫し神前に禱りを捧げて庭に出た、爾して森嚴な庭の景色に天地の示せる深き祕密を考へつゝ逍遙した。

之に引替へ瓦我は、僧正の去つた後に、柔かな寢臺の面を見廻した末、枕許に置いた燭臺の火をば、牢の中で慣れてゐる通りに鼻息を以て吹消し、其まゝ寢臺の上に身を横へ、眠に就た、間もなく僧正も室へ歸り十二時に至つて之も寝た。

一眠の後、我、瓦我は目を覺して、やをら寢臺の上へ起き直り、四邊の容子に耳を澄したが聞として何の物音も無い、一家全く寢鎮まつた。

七 社會の罪

我、瓦我の目を醒ましたのは夜中の二時であつた、彼は寺の時計の音を聞いた。

纔に四時間許りしか寝ただけれど、少しの間にグツスリ寝る癖が牢の中で附いてゐると見える。最う晝間の疲れも無くなつてゐる、再び眠らうとしても眠られぬ、彼には餘り寢床が柔か過ぎるのだ、十九年の間板の間に寝た者には却て寢心の快く無い所がある、彼は默然として考へた、無論比家の主人の信切から食物の旨かつた事まで思ひ出したが、其れよりも猶明かに彼の心に遺つてゐるのは六枚の銀の皿である、老女が匆々に之れを仕舞つた様をも見た、其の仕舞つた處をも知つてゐる、六枚を残らずならば捨賣にしても二百法以上の物はある、牢の中で十九年稼ぎ溜た工賃よりも一夜の間に二倍の稼が出来るのだ、彼は此の様な事を考へ、胸の中で計算した。初めは眞逆に實行しやうとは思はなんだが、考へるに従ひ益々慾が募つた、けれど彼は自分の慾心に抵抗した、容易には決し得なんだ、考へて又考へ、竟に一時間を過した、三時の鐘が又聞へた。其の音が彼の耳に「働くのは今だ」と云ふ様に聞えた。

彼は靴のまゝ寝てゐたが靴を脱いで自分の衣囊に入れた、荷物の革囊から鑿の様な物を取出した、是れは僧正の室と自分の室との、間の戸を開るに用ふる積なんだらう、爾して囊は背に負ひ全く立去る用意を定めて寢臺を降りた、先づ忍び足で窓の所に行き庭の容子を見ると「薄月の明

りに、塀のどの邊が最も乗り越えて逃げ去るに都合が好いかとの見當も分る、彼は再び考へたけれど、最う斯うなつては「働く」と云ふより外の思案は出ぬ、ソツと僧正の室の戸の所に進み耳を澄した、彼方に何の物音も無い、確に主人は寝つてゐる、彼は先づ戸を推して見た、定めし鑿を用ひねば開かぬ程の錠でも卸りてゐるかと思つたら、意外にも締が無い、戸は推すに従つて音もせず開いた彼の身は直ぐに僧正の居間に入つた。

抑も此の我、瓦我は何者である。後は此國の都巴里府より遠くもあらぬ、ブライと云ふ山里の木樵の息子で幼い時父母を失ひ、近村へ縁附いてゐる自分の姉の家へ引取られて育てられた。所が姉の夫と云ふが又死んで、姉は七人の子供を残されて寡婦と爲つた、子供は上が八歳で、末が當歳の乳呑であつた、此時、我、瓦我は廿五歳、姉の家は貧しいのだから、自分が稼いで姉と七人の子を養はねば成らぬ事に成つた、随分彼は働いた、日傭にも出れば道普請にも雇はれ、木挽もすれば獵にも出ると云ふ様な状で、本統に夜の目も寝ぬ程に稼いだけれど、悲しい哉資本の無い者には生活を許さぬのが文明と云ふ此恐ろしい制度である、一日日に彼及び姉の一家に貧苦は迫つた。世の常の男ならば、最早多少は村の娘達にも彼是れ云はれ、苦しい中にて又笑つたり

樂しんだりする事のある年頃なのに、彼には其様な折が無い、暇が無い、女の愛が何かと云ふ事は彼の未だ知らぬ所である、其代りに彼は七人の子を愛せねば成らぬ、實の所能く其子等を愛した。随分姉が叱る場合などに、影に日向に、庇ひもし氣を附けもした、彼は陰氣な無口な質では有るけれど、多少は深い愛の心を、持つて生れた者と見える。

次の年の冬、甚く雪が降り、日傭に雇ふて呉れる人も無く、其外の手間仕事も全く絶えて、彼は一家九人と共に餓え且、凍えねば成らぬ様な景状には落入つた、眞に其日稼ぎの人に、悪い天氣と不景氣の續くほど残酷な者は無い、全く天道が人を殺すのだ、或る夜の事、其村にある何某と云ふ麴屋の主人が、晝間賣残ツた麴の片などを方附て居ると、外から窓の硝子を叩き破つた者がある、主人が驚いて振向くと其の破つた間から人の片手が出て、臺の上に在る一個の麴を取るより早く逃げ去つた。

直ぐに主人は飛んで出て、追掛けて捕押へたが、泥棒は早麴は投捨て、何にも持つて居ぬけれど、片手に硝子で切れた創が有つて、血が流れて居る。勿論辯解の道は無い直ぐに警察へ引渡された。是が我、瓦我である、彼は七人の子の餓に泣くを見かね聞かね、終に一片の麴を盗む氣に成つたのだ、彼れが盗んだのだらうか、將た社會が彼れに盗ませたのだらうか、若し彼れにして、

麴屋の主人に打明けて麴一個下さいと云つたならば必ず呉れる所だつたのだらう、けれど彼れの氣質は其れが出来ぬ、爾う打明ける質で無く又爾う口が軽くなかつた。

其が爲に到頭正式の裁判に附せられた、詮議の結果、彼れの家に一挺の獵銃が有つた、獵銃は有るけれど鑑札が無い、鑑札が無ければ盜獵者である、盜獵する位の奴ならば外にも盜罪の有る筈だと認められた、全體鑑札を持たぬ獵師は世に幾等も有るけれど、盜獵と爲ると甚く上の方が憎まれる、其れに貴族の獵場や山林を荒すとの懸念のためである、彼れは様々に辯解したけれど通らぬ、盗んだ麴も直ぐに投捨たけれど、戸締りの有る家へ亂入して盗みを働いたと云ふ箇條に當られた、未遂では無い、既に遂げた上に投捨たのだ、遂に懲役五年の刑に處せられた。

爾して腰繩で巴里に引かれ、他の多くの罪人と共に球數繋ぎに成つて、馬車に乗せられ二十七日の長い道中を経てツーロンの獄に送られた、其あとで姉の一家は何う爲つただらう、其れは能く分らぬけれど、外に何うも成り様が無い、通例斯る境涯の人達が成る様に、一家離散して、乞食にもなれば養育院にも入り、尋ねる跡方も無くなつたのだらう、不幸な人を無慈悲に亡ぼすのが社會の仕組であるのだから、尤も母の方は末の乳香を抱き、巴里に上つて下等な製本屋へ雇はれ、乞食同様の景狀に成つて居るのを見受けた人も有るとの事が、風の便りで獄中の、我、瓦

我に聞えたけれど、其れ切りの事で後は分らぬ、此後にも又と此話の上へは現はれぬ。

今でも巴里の牢番を勤めた人で、我、瓦、我が初めて都へ引かれて來た時の狀を覚えて居る者が有る、其れは、我の容子が他の囚人と違つてゐたから特に目に着いたのだらう、其人の直話に依ると、五六十人球數の様になり、監獄の庭へ並んで腰を掛けさせられた中程に、髪の毛の長く延びた男が身を悶へて泣いてゐた「ア、己は獵師だ、親の代から山の物を採つて正直に食つてゐるのだ、此様な、重い仕置に遭ふ様な、悪人では無い」と云ひ、頓て泣き止むと手を差し延べ、宛かも背丈の揃つてゐる七人の子供の頭を撫でる様に段々と其手を低くし、口の中で何やら呟いてゐたので、扱は子供に未練が残つてゐるのかと、牢番の慣れた眼には察せられたとの事である。

されば、我は入獄の後も、罪に合はせて自分の罰が重過ぎるとの念が絶えず、服役の苦さに付け次第に人を憎み社會を恨む心とは成り、折さへ有れば牢を出やうと企てた、其れが爲に段々刑期が永くなつた、初めは四年目に逃出して二日目に捕へられ、三年の刑期を増されて八年と爲り、其翌年又逃したが、今度は捕まる時に役人に抵抗したとの罪まで加はつて五年を増され、十有三年と爲り、次は十年目に又逃げ掛けて又三年を増された、都合で十六年とは成つた、十三年目に又隙が有つたので最後の逃亡を企てたが、其結果は又三年を付け加へられ十九年の刑期と爲るに終

つた、誠に愚な次第では有るが、憤慨に憤慨が重なつて、終には利害など考へる事の出来ぬ様な場合の有る捻けた頑な心に成つて了つたのだ、境遇が人を損ふのだ。
兎も角も、餓に迫る子供の爲めに、一切の麩を盗み損つた罪が本で、十九年の刑に服した。

八 恍として見惚れた

二十七の歳から四十六まで、全く人間の盛りである、此の盛りを牢の中で過ごすとは、其れも大した罪の有る事か、麩一片を盗み損じた罰だとは、眞に無惨の極である、爾して漸く牢を出れば、家も無い、食も無い、滿十九年の汗脂らで稼ぎ溜た金が百法の餘は有つても、世間の人が相手にして呉れず犬猫よりも劣つて居る。

此様な人に、正しく心を持って云ふは無理だ、彼れ我、瓦我は牢の中で既に心が捻けもし曇りもして、深く物の道理などを考へる事が出来なく成つた、偶には考へもするけれど唯恨めしさが先に立ち、人間らしい思案は出ぬ、或時は自分で自分の境涯を夢の様にも思ひ、亂暴でもすれば夢が破れて自由の身に成られるかと疑ふ事さへ有る、兎も角も自由が得たい、早く牢の外に出度

いと、其れ許りを思ふから、逃られる折さへ有れば直ぐに逃る、逃げて逃果せられるや否や、又捕まれば前より刑期を延ばされはせぬや否や、などの事を考へて居られ無い、丁度檻の中に入られた獸の様な者だ、檻の戸に隙間さへ有れば直ぐに逃る。
全く彼の心は獸の心の様に、唯其時の衝動に従ふのだ、思案でも無い慾でも無い、單に逃げ度いから逃げ、奪いたいから奪ふ、深い考慮はして居られぬ、詰り十有九年の殘酷な境涯が人を獸にして了つた。

本來彼は力が強い、四人前の力は確に有る、取分けて背に物を負ふ力などは度々官吏や同囚の者を驚かせた、其上に又身の軽いことが驚く可き程である、牢の中には逃亡の學問が有つて、少し刑期の長い囚人は、間がな隙がら之を勉強して居る、彼れは監獄の學校に入り讀書を勉強する外には、常に此の逃亡術を研究した、讀書の方は智識を得て世間の憎さを知り、出獄の後に世間へ仇を復するに必要で、逃亡の方は早く其仇を復す時を得るのに必要だと、此様に思ふて居る彼は牢の中で他の囚人の登り得ぬ壁などに易々と上り、又塀を越え垣を飛ぶなどは最も得意だ、人が梯子を掛けても恐れる様な高い煉瓦造りでも、彼れは其の隅の角に成つてゐる所を手足で挟み、巧に這ひ登つて二階へでも三階へでも、必要に依つては屋根へでも上つて行く、是れが却て

彼れの身の仇と爲り、四度も逃亡を企て、五年の刑期を十九年に引延ばされる本とも爲り、又鑑札の表に危険極まる囚人として特に警察への注意を書入られる元とも成つたのだ。

斯くて十九年の刑期が漸く済んで今度放免せられた時、「汝の身は今日より自由である」と言渡された言葉が夢か、現か分らぬ様に彼れの耳には響いた、其れから在獄中の工錢を受取るに及び、彼れの腹の中で計算して二百法の餘に爲つてゐる事と思つてゐた、所が纔に百法の餘しか無い、是は多分休の日の分や、種々の費用を差引かれた結果で有らうけれど、彼れは爾は思はぬ、確に役人に半分だけ盗まれた者と信じた、是に就けても世の中に憎さが増した。

其れから牢を出て此地へまで来る途中で土木の工事が有つたから、彼れは其れに雇はれた、只一日だけれど兼ての大力ゆる四五人分も働いた、爾して共に働いてゐた人足に聞いて見ると一日一人の賃錢が卅錢以上だと云ふ事である、牢の中の賃錢に比べると餘ほど割が好いので、彼れは心に喜んでゐたが、其の所へ通り掛つた警官が彼の風體を怪しみ、姓名を取調べた、彼れは正直に答へて黄色い鑑札を示したが、警官は人足頭に何事かを吐いて立去つた、彼れは其翌日解備せられた爾して一日分の賃錢を請求すると、たつた十五錢しか渡されぬ、此様な筈では無いと争つたが、「貴様には其れで澤山だ」として相手にせぬ、茲でも彼れは又自分の賃錢を盗まれた様に感じた。

世間は盗みで立つてゐるのだ、監獄の官吏も盗み、土木の人足頭も盗む、此の盗まれた丈は世間から盗み復すが當然だ、誰も皆盗みをするのに、自分獨り盗みをするのが何で悪いと、彼れは其の曇つた心の中で此様に考へた、其れだから親切の限り無く深い僧正の家に寝ても亦銀の皿を盗まうと云ふ氣に成つた。

尤も様々の故障が、心に起らぬでは無かつた、第一は僧正の正直な親切な容子である、十九年來絶て起つた事の無い氣の毒と云ふ念が起つた、斯親切にして呉れる人へ恩を仇で返しては「濟まぬ」との針で突く様な感じもした、何故彼の人の言葉が監獄吏の言葉の様に横柄で無いのだらう何故アノ顔が人足頭の様な憎々しい顔で無いのだらうと其れを聊か残念にも思ふた、けれど自分で思ひ消した、人の顔附を氣にして盗棒が出来る者かと、爾して第二には又も捕はれて再び牢へ引戻されはせぬだらうかと氣遣つた、此の故障は前の故障よりも烈かつたけれど、ナニ監獄の官吏だつて盗む、人足の頭だつて盗むとの一念が又此故障を搔消した、其が爲に遂に僧正の室に忍び入つたのは何と云ふ不幸な奴だらう。

僧正の室は暗い、彼れ瓦我は盜坊には慣れてゐぬ、其實之が眞の初めてとも云ふ可きである、彼の皮囊から取出した鑿の様な道具とても、盜坊の用意では無い、牢の中で石の細工をするに用ひ

たのを其まゝに持つて来たのだ、其れは扱置き戸が開いて先づ嬉しやと一步進む足許に小さい蕨があつた、其れが彼の足に掛つて倒れ、静かな室に異様な物音を爲した、ビク／＼してゐる彼の耳には殆ど警鐘を打たれた様に感じ、身動きも爲し得ず其まゝ登んだ、最う確に捕はれるのだとの心が一時に湧き起り、目の前には十九年の長い苦役が歴々と見える様に感じた、アゝ最う駄目だ、再び牢屋へ引戻されるのだ。

後悔など云ふ善念の最う凋び盡してゐる、彼だけれど此ときのみは、強い強い後悔の念が出た何故盗む氣に成つたのだらう、何故此室へ忍び込んだらう、何故再び捕へられる恐ろしさを最つと能く考へて見なんだらうと、けれど之は少しの間だつた、暫し登んでゐる中に、誰も目を醒ました容子は無い、室の中は再び静かに成つた、イヤ此身には猶だ盗運が附いてゐるのだ。

彼は又忍び足で進んで、爾して僧正の枕許に立つた、僧正は確に熟睡してゐる、其の寝息の平な事は宛も小兒の様である、僧正の寢臺は窓の下だ彼は窓から指す薄明りに、ソツと僧正の顔を眺めた、此とき天にも意あるが如く、空を包んだ村雲が忽ち破れ、冴え渡る秋の夜の月が僧正の顔を照した、同じ人間でありながらも、監獄吏や人足頭などの顔と、何と云ふ相違だらう、我瓦我は此様な顔を見た事が無い、唯恍として見惚れて了つた。

九 恐る可き分岐點

心に何の罪も無い人の安々と眠れる顔ほど清い美しい者は無い、之に對すれば、對する人の心まで自然と清淨に成つて来る。

我、瓦我は僧正の寢顔に見惚れた、眞に何と云ふ穩かな容貌だらう、雪の様な白髪が廣い額を隠し、童顔とも云ふ可き豐な頬の邊にまで掛つてゐて、顔一面に喜びが満ちてゐる、どの様な夢を見てゐるか知れぬけれど、殆ど人間の顔とは思はれぬ、神の顔である、多分に善を積み徳を重ねて、多年研き立てた良心の光りが、天國の光りと相映じて、一種の神々しい色を現すのだらう而し正僧の天國は天に在るのでは無く心の中に在るのだから、内の光りで透過つてゐる様にも見える、是れが此世の活神と云ふものだ、我は今活神の前に立つて、其の威光と其の慈悲とは心の底まで浸されてゐる様な者なんだ。

彼は我知らず帽子を脱いだ、彼の額には脂汗が浮いてゐる、實に大變な違である、一方ならぬ恩を受けて其恩人に仇をしやうと云ふ罪の塊りと、全く悪人を信任して、自分の弟の様に持做し少しの危険をも感ぜずに氣を安くしてゐる人と、全く地獄と極樂との別が只此の咫尺の間に現

れてゐるのだ、餘りの事に我は恐れを催した、何で此身に、斯くまで深く氣を許して呉れるだらう、人間業で出来る事とは思はれぬ。

寧ろ此寝た人の頭を叩き割らうか、其れとも此人の手を戴き平伏して謝罪やうか、我の心は唯だ一髪に繋がれてゐる、今ならば何方へ振向く事も出来る、毫厘の差が千里の違を來すと云ふ恐る可べ分岐點は茲ではあるまいか、窓から差す餘光に、煖爐の棚の上に在る十字の像が、宛も兩手を差述べて、一方の平穩を祝し、一方の罪を解き許さんとする様に見えてゐる、我は決然として又帽子を頭に置いた。

再び僧正の顔に振向もせぬ、寝顔などに見惚るゝ自分の愚さに氣が附いたのだらう、其まゝ去つて宵に見た戸棚の所に行き、其戸を開けた、茲にも錠は卸りてゐぬ、爾して延び上つて銀の皿をば、其の入れた籠ぐるみ取出して脇に挟み、急いで自分の室に歸つた。

室には携へて來た杖を残してある、之を取るが否や窓を開き、軽く其の外に出て月の明りに皿を檢め、籠を捨て、皿だけを背の袋に入れ、宛も荒れた虎の如き凄じい勢ひで塀を乗越え、孰れとも無く逃失せた。

* * * * *

翌朝僧正は毎もの如く庭に出て散歩したその所へ遠だしく來たのが老女である、「貴方は銀の皿を入れた籠を御存じありませんか」僧正は靜かに「知つてゐる、コレ茲に」と昨夜我、瓦我の捨て行つて籠を取上げて示した、老女「アレ籠ではありません、皿の中の銀の皿をですよ」僧正「皿ならば知らぬ」と云ひ、少しも氣に留めぬ體で、籠に敷かれて折れてゐた草花を起し初めた、老女は狂亂とも云はまじき程の狀で直ぐに馳せて家に入つたが、無論我、瓦我の寝た室を見廻はつたのだらう間も無く又馳せて來て「盗られました、銀の皿を、昨夜の人は早立ち去つた後です上銀の皿を盗んで行きました、とて虚呂々々と四邊りを見廻し「先ア驚いた、塀の彼處を乗越えて逃げたのです、足痕も残つてゐます、何と云ふ呆れた奴でせう、貴方様の大恩を仇で返して」とて、悔しげに言葉に力を入れた、僧正は又も靜かに振向いて「爾う云はずに先づ考へねば……第一彼の皿は此家の物だらうか、今まで私が惜んでゐたのが悪かつた、那れは當然貧しい人の物である、昨夜の客は確に貧しい人だらう」貧しい人が持つて行くのは當り前だとの意味が現はれてゐる、何たる宏量な心だらう、何十年來、僧正の徳に服して一言も批評らしき言葉を吐いた事の無い老女だけれど、餘り残念だ「盗まれたとも私共は構ひません、お妹御もお構ひは無いのでせう、けれど貴方様が直にお戻り成さるではありませんか、今朝は何の器でお汁をお召上りに

成りますか」僧正「何か錫の皿でもあるだらう」老女「錫は臭みます」僧正「では鐵の皿」老女「鐵は味が付きませす」僧正「では木の皿」

間も無く僧正は朝餐の卓子に就た、妹御は何にも云はぬ、老女は猶だ口の中で何事をか頻りに呟いてゐる、僧正は兩女に向かひ戯れた「へ、此通り麪の片を乳に浸して直ぐ喫れば木の皿さへも要らぬ、今まで氣の附かぬ事であつた」と、老女は腰を卸さぬ、立たまゝ子卓の邊を前後に歩みつゝ、熟々と嘆嗟した「ホンに先ア、彼様な奴に宿を貸し、直に隣室に寝かせて遣つて、でも銀の皿だけで済んだのは未だしもです、命まで取られなんだのが運が好いでせう、危い事危ない事、思ひ出してもゾツとしますよ」斯くて漸く食事の済んだとき、外から戸を叩く人があつた僧正は少しも躊躇せず、例の通りに「お入り成さい」と答へた。

答へに應じて戸は開き、動搖々々と外から四人の人が入つて來た、其の三人が一人の男の首筋を押へ、殆ど捻伏る様にしてゐる、三人は即ち憲兵である、押へ附けられてゐる一人は誰でも無い我、瓦我だ、彼は早捕へられたのだ。

一〇 愚と云はふか不幸と云はふか

何と云ふ間違つた奴だらう、十九年の苦役が済んで、今日が唯つた五日目だのに早捕へられる様な事を仕出來した、再び監獄へ引戻されるに極つてゐる、今度行けば又どの様な事に成つて、何時出られるか分らぬのだ、愚と云はふか不幸と云はふか、全く言はふ様が無い。

憲兵の中の長らしい一人が僧正の前に進み、先づ「閣下よ」と恭々しく呼掛けた、閣下とは尋常の人を呼ぶ言葉では無い、尊敬の極度とも云ふ可きだ、捕へられてゐる我、瓦我は此語を聞いて驚いた、殆ど呆れた様に顔を上げて呟いた「閣下とは、閣下とは、其では只の牧師さんでは無いのだ」憲兵は叱つた「黙れ、僧正閣下に向かつて」ア、此人が僧正とは、今が今まで牧師よりも猶ほ下の人と思つてゐた我、瓦我に取つては意外なるとも何とも譬へ様が無い、彼は殆ど消え入る様に畏縮した。

僧正は直ちに立上つて我、瓦我の傍に行き「イヤお前さんか、好い所へ歸つて來成さつたよ」と却て嬉しげに聲を掛け、更に「私は燭臺をも一緒に前さんへ遣つたのに、那れも皿と同じく純銀だから二百法には成るのだよ、何だつて燭臺を残して皿ばかり持つて行かれた」慈悲が溢れるとは此僧正の此心と此言葉である、我は目を張開いて僧正の顔を見上げた、その目附、其の容子は、到底人間の言葉に寫す事は出來ぬ。

憲兵は少し張合ひの抜けた體で「イヤそれでは、閣下、此者の申立が事實でせうか、拙官等は途中で此者に逢つたのです、此者の走つて行く容子がどうも怪しく、何だか盗みをして逃去る者の如く見えましてから、擴へたのです、爾したら銀の皿を持つてゐましたので……」僧正「分りました」として笑を浮めて「私から貰つたと云つたでせう、其通りです、昨夜一夜の宿を貸して其品を與へたのです、その言立が怪しいから、茲へ詮議に連れて來られたのでせうが、お詮議に及びません」憲兵は顔の長を引延ばして「ハア、左様でしたか、爾う云ふ事なら捕縛す可きでありません、直に放つて遣らねば」僧正「勿論放たねば可けますまい」憲兵は押へ附けてゐた我の首筋を放した、我は後巡した。

爾して云ふた「ア、私を、私を許して下さるのですか」全くですか」全く夢を見てゐる様な言葉附だ 憲兵「爾さ、罪を犯したで無いから。勝手に立去つて好いのだよ」僧正は又我に向かひ「ア、立去るなら、昨夜遣つた燭臺をも持つて行くが好い」と云ひつゝ、急ぎて次の室に行き、彼の二個一對を持つて來て「サア是もお前さんのだから」と云つて差出して渡した、瓦我は頭から足の先まで震ひつゝ受取つた、殆ど何を受取るのか自分で知らぬ程だから、僧正は言ひ足した「サア、機嫌宜うお出で、オ、我友よ、今度來る時は、何も扉を越えるには及ばぬよ。何時でも入口

の戸を推せば、錠は卸して無いのだから總て入口から、出入なさい、全く親友を遇するのだ、爾して又憲兵に向かひ「何うも御苦勞様でした」憲兵は其意を領して立去つた。

瓦我は燭臺を持つたまゝ其首を垂れたまゝ、身動きをも得さぬ、或は氣絶し相である、既に氣絶してゐるのではあるまいか、僧正は床より降りて彼の前に立つた「お前さん決して忘れては可ないよ、此燭臺や銀の皿を資本にして屹と善人に立返ると、私に約束した事を」我は其様な約束した覚えが無い、自分で忘れたのか知らんと唯當惑の體である、僧正は猶も言葉に力を込めてコレ我、瓦我、コレ兄弟、お前さんは最う悪に從つては無らぬよ、善の人だよ、私が斯うしてお前さんの魂を買取るのだから、ねえ兄弟、今から心を入れ替へて、暗い考へや地獄にゐる様な思案を起しては可いぬ、明るい正直な人に成つて能く神様に縋らねば、好いかえ、分つたかえ」是が分らずにゐられる者か。

人事不省とは此時の我、瓦我の状だらう、彼は一言をも發せななだが、忽然として逃げ出した。彼は狂ふ獸の如くである、何處が道、何處が町とも知らぬ、唯早く人家の無い所へ行き度い、早く早くと氣の迫く儘に、曲角へ來ればキツと曲る、後戻りをするのも知らぬ、けれど終に野原に出た、爾して徘徊ふて又徘徊ふた、朝から一粒の食をも食ぬけれど自分の空腹をも知らぬ、午

前から午後に至つた、心の中には様々の感じが湧いた、或時は花の咲いた秋草の匂ひに、幼い頃野に遊んだ罪の無い状をも思ひ出した、廿年目に初めて其様な思ひが出たのだ、心の底に其れが微にも残つてゐたのが不思議であつた、或時は牢の中が却て無事だとも思ひ、何故今朝引戻されなんだ、うらうとも怪しんだ、けれど總て切れぬのである、素れ／＼た心の中に取留まつた考への纏まらう筈が無い、或時は自分の身が、自分の身か、人の身か、其れも知らぬ、疲れたのか疲れぬのか、竟に路傍の叢村の陰に腰を卸した、考へるでも考へぬでも無い、身動きもせず唯眼を空に据ゑて幾時をか経た、爾して日は次第に沈んで、地面に在る小石の影まで長くなつた頃、何れより可愛い子供の聲で、歌を詠ふて來るのが聞えた。

多分は近村の子でもあらう、使にでも行つた歸りか、手に散ら錢を持ち、嬉しげに其れを投げ上げ、落ちて來るのを又受けて、手玉の様に弄んで我、瓦我の前まで來た、瓦我の顔は、先ほどから夕立の空とでも云ふ様に曇り、陰氣にと暗んでゐたが、彼の子供は茲まで來て其の手玉を取落した、詠つてゐた歌は罷んだ、落ちたのは廿錢の銀貨で、轉がつて瓦我の足許に來た、瓦我は直に足を舉げて踏附け、知らぬ顔で其銀貨を足の下へ隠した、エ、彼は又此様な事をする。

一 甚いなア、甚いなア

何だつて我瓦我は、子供の落した廿錢銀貨を足の下へ敷いたとらう、餘り愚な仕事では無いか彌里耳僧正が何と云つた、魂を入替て善人に成るのだよと、血の垂る様な言葉で教へたでは無いか、我の耳には其言葉が猶だ響いてゐる、彼の心には僧正の限り無き慈悲の心が充ち満ちてゐる筈である、其れなのに、早此様な罪を犯すとは何う云ふ譯だ。

多分は彼、正氣では無いのだらう、心が狂つてゐるのだらう、彼十九年の間、獄にゐて、唯世の中の憎いことを許り心に刻み、復讐しやう、復讐しやう、とのみ思ひ詰めて來たのだから、心が狂つてゐる際でも知らず／＼に此様な事をするのだ、子供は忽ち立止つて、銀貨を踏んでゐる動の足を見、次に我の顔を見上げた、顔は極めて恐ろしい、けれど子供は恐ろしいとも思はぬ唯戯れと思つたのだらう、思案もせず我に近づき「伯父さん其様な事を仕ては可けないよ、我は無言だ、子供其足を舉げておくれ、ヨウ伯父さん、我は光る眼で、子供の顔を見た、見た様の妻には子供も初めて恐れを催したらしい、殆ど泣出す様な聲で「大事の銀貨だからよう」我は動きもせぬ、子供「では足を舉げて斯うして取るよ」と云ひつゝ子供は俯向いて我の足に兩

手を掛けた、無理も無い、全く大事の銀貨だらう、子供としては一身代奪はれた様な者である、
 我の足は少しも動かぬ、子供は力盡きて今度は我の胸を押し「ヨウ伯父さん、還してお呉れ、銀
 貨を無くしては大變だから、ヨウ、ヨウ」と揺ぶつた、我は澁る様な聲を出し「銀貨など知る者
 か」と叱つた、子供「だつて此足に踏んでゐるじや無いか、お呉れと云ふのに」我は怒りを示して
 立上つた。けれど踏んだ足は動かさぬ、子供は劍幕に恐れて一足退いた、其の眼には最う涙が浮
 んでゐる「甚いなア、甚いなア、子供の鏡なんかを盗んで」と泣き聲で恨んだ、之を平氣で聞く
 我は全く鬼である、彼れは平氣で聞くのみで無い、大喝して「蒼蠅い奴だ」と再び叱つた、子供
 は泣いて「金を返せ、金を返せ」我は出抜に杖を取り「是れだぞ」と振かざした、全く叩き殺す
 勢ひである、直に子供は、泣ながら一散に逃げた。

けれど暫く行て逃げ兼ねたと見え、稍久しく其泣聲が、淋しい原に、蟲の音の様に聞えて居た
 我は立つた儘である、銀貨を踏んだ儘である、幾時か其の儘で、恐い顔して唯だ空中を睨んで
 居た。何時まで彼れは其儘で居るのだらう、自分で自分の立つて居る事を知つて居るのか知らん
 共中に日は全く沈んで了つた、我は身に受ける夜露の寒さにゾツと身震ひしたが、是れが彼れの
 身に氣附薬の様に利いた、熱を持つて居る彼れの腦は冷めた、彼れは「オヤ」と云つて四邊を見

廻した。

頓て立去らうとする如く、彼れは背後に在つた袋を取つて背負ひ直したが、此時チラリと彼れ
 の目に見えたは砂の中に光る銀貨である、彼れは怪しむ様に俯向いて之を取上げたが、取上ると
 共に、電光の如く彼れの腦髓に光が射した、彼れは何も彼も思ひだした、今の子供の泣聲さへ猶
 だ耳に響いてゐる、エ、何だとして我が身は子供の銀貨を盗んだのだらう、僧正の清い姿も眼に
 浮んだ、唯だ一時にして生涯の悔恨に身を責らるゝは斯様な時である、彼れは直に、暗い大地の
 上に身を投た、地を掻むしつて悔しんだ、けれど悔しんではゐられぬ、直に立上つた「子供よう
 子供よう」と叫んだ、延上つて四邊を見廻した、子供はゐぬ、最う去つてから時が立つた。

彼れは子供の去つた方へ走つた、半丁も走つたけれど姿がない、又聲を立て、呼んだ、呼んでは
 走り、走つては呼び、廣い野原を、月の出るまで走り廻つた、月に透かすと何だか彼方に人影が
 ある、直に其後へ行つて見ると、旅の法師であらう、瘦馬に乗つて兀々と夜路をして來るのだ。
 「法師さんお願いです」と我は馬の前に首を均れ「若し貴方の通つた道で、十一二の一人の子供
 は居ませんでしたか、法師「愚僧は誰にも逢ひません」我は銀貨を差出して、何か之を貧民にお
 施し成さつて下さい」受取るのが法師の役である、怪しみながら受取つた、我「若しや何處かで

子供の泣聲を聞きませんでしたか」法師「聞きません」我は又「何うか貧民に、之を」とて今度は銀貨二個を出して渡し「ア、私は盜賊です、盜賊です、何うか警察へ連れて行て、懲役に遣つて、下さい、此世にはゐられぬ悪人です」法師は驚いて瘦馬の腹を蹴つて之も逃げた。

如何とも仕方が無い、再び我は聲を立て子供を呼びつゝ、何處までも走つたが、遂に路の三方に岐れてゐる所へ来た、何方を見ても村らしい者は無い、彼は大地に撞と座して、腸の底から深い涙が迫り上げた「エ、己は、エ、己は」と聲を放つて泣き、顔折れて錯伏した、彼が泣くのは廿年來絶えて無い事だらう、涙が彼の痺れた脳髓を解きほこせば好い。

何時間泣いたか知らぬが、全く存分に泣いた、之れが彼の魂の入れ替はる時であらう、幼い頃から彼の心は、善心を捻伏て其上へ自分で惡の壁を塗り、世間が憎い人が憎いと、曲つた心ばかり練固めた、無理に頑冥にしたのだから、最う善と云ふ心は芽を吹く力も無い様に枯れて了つたのが、其の所へ彌里耳僧正の靈精が差込んだ、彼の心は昨夜から革命の様に揉めてゐた今が革命軍の最も盛に揉み立てる時なんだらう、彼にして若少しでも物事を比べて見る丈の力があれば、僧正の心と自分の心とを比べても見るだらう、自分が自分の目へ全く人鬼の様にも見えるだらう、彼れは天國の光に照して自分の惡相を、愛想の盡きる程に見入つた。

竟に彼は何うしただらう、其れは誰も知らぬ、此夜の夜半を過ぎ、世間の寢鎮まつた三時頃にダインの町を通つた飛脚がある、其者が丁度彌里耳僧正の住居の前を通過した時に、其戸口に一人の男が地に伏て合掌し、神にでも祈る様な身振で一心に家の中を拜んゐた。

此男は我、瓦我である事は云ふ迄も無い、彼れが再び話の表に現はれる時に、何の様に成つてゐるだらう、抑も又何處へ現れて出るだらう。

一一 華子

女學生でさへ墮落する、沉んや女工に於てをやだ、嘆かほしい次第では有るけれど若い男女の身に、過ちや惡事の有るは、孰れの國、何れの時にも、仕方の無い事と見える、とはいへ一つは社會の仕組も悪いのだ、可哀相に、貧といふ奴が若い身空の者を驅つて、墮落せざるを得ぬ様な境涯に立たせるのだ、イヤ沈ませるのだ。

我、瓦我が僧正の家の戸口に合掌して祈つてゐた時から、早二年の後である、巴里の懶惰學生四人が恐ろしい惡戯を遣らした、遣つた方は冗談だとか腕がよいとかいふだらうが、遣られた

方では生涯を誤るのだ、殘刻ともいふ可きである、一々名前は擧げぬけれど、地方から遊學に來てゐる奴等で、四人とも銘々に情婦があつた、情婦といふのは孰れ女工の果なんだらう、針を持つより學生に仕送られるのが樂だから、其れは又年頃でもあり、旨い學生の口前に欺されて、女工でもなく處女でもない一種の懶惰者に成つて了つた者と見へる。

或時四人と四人と、八人が一群と爲つて町盡處の野原へ遊山に出た、是れは學生の方で、驚かせる事があるからといつて誘ひ、女の方では何の様に驚かされる事かと楽しんで附いて居つたのだ、勿論若い同志だから、傍から見れば馬鹿けてもゐるだらうが、當人達は此上もなく面白う一日を暮し、爾して遊び草臥て田舎の茶屋で夕飯を喫たけれど、驚かせるといつた約束が、何の様な事柄なのか少しも「驚く」といふ様な波瀾がなかつたので、女達は「サア驚かせて下さい」何の様に驚かせて呉るのです」などと、寄々に迫つてゐた、スルト學生等は一人去り二人去つて悉く席を外した、サア愈々驚かせて呉る事と女どもは目を見合せて竊に笑つてゐると卅分経ても一時間経ても音沙汰がない少し怪しんで不安心に思ふ所へ、其家の給仕か一通の手紙を持って來た「キツと是ですよ」として四人額を突合せて封を開いて見ると四人連名で其四人へ宛たので、中の文句は手切れ状である。我々四人は孰れも國に兩親があり最う學問も仕てゐられぬから、只今發足し

て故郷へ歸るのだ、今までの事は互に夢を見たと思念めて呉れ、茶屋の勘定は濟ませてあるといふ意味を記してある、是が驚かすにゐられやうか、多分は喜しく驚かされる事だと思つたのに、爾はなくて恨めしく驚かされたのだ、餘りの事で、四人は眞事とは思ひ得なんだ、けれど全くの眞事であつた、直に外へ出て、問合せたり聞糺したりして見ると、四人とも、巴里の方から來た馬車に乗り、地方の方へ向け最う一時間も前に立去つたとの事である。

悔でも仕方が無い、笑談と見せて笑談で無かつた、此後、幾日幾月経つても、イヤ幾年経ても彼等學生は再び巴里へ來なんだ、彼等の或者は田舎の代言人とも成り、或者は町會議員とも成り或者は地主様とも成て、先田舎紳士と云ふ資格で相變らず、銘々の土地の空氣を傷らせつゝ、面白可笑しく生涯を送つただらう。

振捨られた女の方は、四人の中が三人まで單に平氣であつた、ナアニ有でちの事なんだよと、殆ど氣にも留なんだは、自分等が幾等でも學生の財布を吸取つたのを手柄と見得てゐるのだらう爾して直に後釜をでも捜したに違ひ無い、けれどもだ四人の中に唯一人本統に泣悲しんだ女がある名を華子と云ひ、四人の中で年も若く爾して一番の美人で、一番世間知らずであつた、年は其時が十七歳、生れは此國の北海岸に在るモントリウルと云ふ小都會の貧家で、幼い頃兩親に死な

れ、父の顔をも母の顔をも覺えず、其の土地で育ちましたけれど、女工と爲つて巴里へ來のだが、全く頼り無い身の上だけに、親切にして呉れるその學生を生涯の所夫ぞと思ひ、欺れるとは知ずして欺されてゐた、其丈ならば猶だしもだけれど、捨られたとき實は其學生の胤を宿してゐた。身重の身體で最早骨の折れる眞面目な仕事としては出來ず、讀み書は唯自分の名前だけで、其の以上は分らぬゆゑ、人に頼んで三度まで手紙を認めて貰ひ、其學生の許へ送つたけれど、其の返事も無い、竟に泣々斷念めたが、間も無く美しい女の兒を産落した、世に、初めての女の兒ほど母に取つて可愛い者があるだらうか、其愛に引かされて、悲しさをも辛さをも凌いだけれど、凌がれぬのは暮し向である、若此上に墮落して眞の醜業婦にでも成れば、本來の綺織は良し随分贅澤にも世が送れたらうけれど、其の様な氣質で無い、其兒が數へ年、三歳に成つたとき、是では末の見込がないと熟々思ひ込んだので、自分の生れた田舎へ歸る氣になつた、故郷ならば猶だ知た人もあり、工場へ雇はれて何うか立過しが附くだらう。

併し故郷へは兒を連れて歸つては駄目だ、都と違つて堅い田舎の人が、私生兒など連れて歸れば唯此身の墮落を賤しむのみで、誰が世話など仕てくれる者か、歸る途中で何處かへ預ける事に仕やうと、辛い思案ではあるけれど、血を吐くやうな想ひで心を定め、先自分の着物の中で、絹

物は悉く兒の着物に仕立て直し、家財道具を賣拂つて二百法の金を得て、其中で溜つてゐる借金などを拂ひ、猶ほ多少の支度をもして、残る八十法を懐にし、重い革包一個を携へ、兒を脊に負ひ、田舎を指して巴里を出た、今まで貧しいとはいつても身には綺羅を張り、日々化粧などもしてゐたが、打つて變つて粗末な女工の姿に復つたのは、斯かる女としては仲々の勇氣であるこの時この華子の歳は廿二であつた。

一三 小雪

脊には兒を負ひ、手には重い荷物を提げ、故郷を指して巴里を出た華子は、途々乗合の馬車にも乗り、歩みもし、又休みもしつゝ、日暮に及びフアーメルといふ小さい町に着いた。

茲は此のち彼の拿翁が最後の敗軍に名を留め、殆ど世界中に知るゝ事と爲つた汪多樓へ行く追分路である、其追分の所に居酒屋の様な小さい宿屋があつて、妙な看板が掛つてゐる、妙などは極めて下手な畫で、一兵卒がで負傷した大將軍を脊負つて落延びる景状を見せ、其の身邊に無暗に煙を畫いてある、其煙は即ち戰場を利かせた積だらう、聞けば此家の主人手鳴田といふ者が、昔軍曹を募めた事があつて、嘘か誠か知らぬけれど、自分の常にする手柄話を、自分の筆で看板へ

畫いたといふ事だ、之が爲に此宿屋は軍曹旅館と稱せられてゐる。

華子は此家の前まで來掛つた折しも、丁度華子の連れてゐる兒と同じ位の女の兒が、其妹と思はれる更に小さい兒と共に往來に遊んでゐた、如何にも其の狀が可愛いので華子は立留つて、思はずも「オヤ好い兒だこと」と感嘆した、此聲を聞いたのが、直に其傍に立つてゐた母親である自分の兒を賞められて嬉しく思はぬ者は無い、直に華子の傍に寄り「ハ其皆様が爾う仰有つて下さい升よ」と暗に自分が其母だと云ふ事を披瀝して更に華子の脊に眠つてゐる兒の顔を覗き込み「貴女のお子さんこそ、ほんに可愛では有りませんか、先ア私共の店で、一休して乳でも呑せてお上げ成さい」と世辭を返した。併し之れは世辭と云ふのみで無い、華子の娘は母に能く似て、誰の目にも全く美しいのだ、後々はどの様な美人に成らうとの面影が二葉の中に宿つてゐる。

頓で華子は誘はるゝ儘に軍曹旅館の店先に腰を掛けた、誘ふたは此家の主人、元の軍曹と稱する手鳴田の妻である、女同志の昵むも早く、早や兩女は身の上などを問ひ合ひ語り合ふ程と爲つたが、華子は茲が我兒を預くべき天の指示す所であると思ふた、茲を過ごしては又と此様な所の有らう筈が無い、暫しの間思案を定め、言出す可き言葉の折を待つて「何うでせう、私の小

兒を預つてお育て下さる事は出来ませうまいか」と言ひ出した、勿論妻は驚いたけれど可とも否とも答へぬ、華子「預つて下されば月々六法づゝ仕送りますが」六法なら充分の手當である妻は夫が聞いてゐやうと奥の間に振向いた、夫は世に云ふ地獄耳で、我が店先に在る事を見逃し聞き逃しなどする様な男で無い、直に聲を出して「六法では可いね七法で無くば」華子「では七法拂ひませう、私は八十法持つてゐますから」主人の聲が又聞えた「爾して半年分の前金をもらはねば」妻は早速暗算して「六七四十二法です」と説明した、華子が若し「最と世故に長けた女なら是だけの容子で此の夫婦が一通りの相手で無い事が分かり、大事の子を茲へ預けて成る者かと怖氣を震つて立去る所であつたらうが、爾までは見抜き得ぬ、遂に六ヶ月の前金と、自分で丹精を凝して拵へた四季一通の小さい着替まで荷物の中から出して此夫婦に與へ、此夜は茲に一泊して、翌朝兒を残して出發した、此子の名は小雪(コセツト)と云ふのであつた。

是で華子は身體も荷物も懷中も軽くなつた、併し小雪に分かれるのが何れほど辛い思ひで有るか華子が此町の盡れまで行き、立去り兼ねて泣いてゐたので分る。

此後は毎月の様に華子から手紙が來た、小雪の容子を聞かせて呉れと、其度に手鳴田は、無事

に成長する許りだと答へて遣つて、七ヶ月目には約束通り七法の金が来た、定めし華子は故郷で職業に有附いた者と見える、其後も引續いて月々金が来たけれど、手鳥田の慾心は増長した、間もなく小雪の衣類は賣拂つて了つた上に、華子の許へ七法では足らん、から十二法づゝ送れといつて遣つた、華子は之にも従つた、其うちに彼は又何處から何を聞き出したか、何うも小雪は私生兒だらうと疑ひ初めた、其れならば十二法で口留に成る者で無いと、今度は文句も横柄に、十五法づゝ送れといつて遣つた、之にも華子は従つたけれど、女の手で、月々十五法の仕送りは容易の事で無い、年の經つに従つて金を送つて来る期限が段々に少しづゝ後れ、果ては滞る事さへあるに至つた。

其れで小雪を何の様に養つてゐるかといへば、實に甚い、近所へは母親の捨て行つた子を慈悲で育てゐる様に言做し、賄附で預かつた子の様にはせぬ、其上に妻の方が更に甚い、自分の産んだ娘二人を可愛がるに付けて小雪を憎む、小雪がゐると娘の呼吸する空氣まで吸滅らされる様に思ふ、食はせる者も犬の食より少し優り、猫の食より遙に劣る、先犬と猫との間である、華子から来る小雪の養育料は姉娘疣子(エポニン)と妹娘痣子(アゼルマ)の養育費に成て了ふ、疣子痣子まで母に見習つて小雪を容める。

全く小雪は奴隷の様に追使はれや、五歳や六歳の兒が、爾う使はれるといふは怪しくも聞えるだらうけれど怪しくは無い、艱難といふ者は何れほど幼い子の身の上にも降つて来る、現に此頃の裁判に、五歳から一人で糊口してゐた孤兒の例があつた、其者は盜棒で罰せられた、小雪の追使はれるのは拭き掃除や、小買物の使ひや、宿屋だけに皿小鉢の持運びや、其れはく用事が絶えぬ「此様な次第だから小雪の身體は瘦て凋び」元の何の様な美人に成らうと思はれたのが全く見る影も無い、若三年目に母の華子が見に来たなら之が自分の子の小雪だとは受取る事が出来ぬだらう、只だ其美しい太い眼だけが幾等か元の狀を留めてゐるかと思はれるけれども顔體が縮んでゐるから不似合に太く見えて釣合を爲さぬ。

近所の人には此子を綽名して雲雀と呼んだ、雲雀とは能く云つた、身體などは殆ど小鳥ほどしか無い爾して物に驚き易くて、人を恐れて、朝は町中の誰よりも先に起きて、水汲みに出たり、使に出たり、多く青天の下にゐるのだ、但し此の雲雀は轉ると云ふ事が無い。

一四 斑井の父老

小雪が此様に瘦せ、凋び、追使はれ、宥められてゐる年月の間、母の華子は何の様に暮してゐ

るだらう、先づ其の歸つて行つた郷里の事から述べねば成らぬ。

華子の郷里モントリウルと云ふは、昔から英國産や獨逸産の珠玉や鎊物を模作し、婦人の、裝飾用として諸方へ積出す土地であるが、近來原料の値が騰貴した爲め、自然商賣が衰へて、土地總體に殆ど見る影も無い迄に疲弊してゐた、所が、千八百十五年「我、瓦我が僧正の家」に宿つた年」の暮に何者とも知れぬ旅人が來て、木の脂や護謨などを以て其品を製造する事を初めた、誠に容易な改良では有るけれど、原料も安く、手間も少く、其上に出來揚がりも美事なので、一時に聲價を高くして、寂れた町が纔の間に回復し土地總體に、昔に幾倍する繁昌を來した、眞に工業的の革命が行はれたと云ふ者だ。

其の一斑を記せば、其事の發明者は三年の間に自分を富ませ、自分よりも更に多く土地を富ませた、併し此人が何者かと云ふ事は誰も知らぬ、何でも彼れが此土地へ入込んだのは十二月の末の或夕方であつた、其とき彼れは僅に數百法の元手しか持つてゐるんだらしい、荷物と云へば背に負つた糞と、手に持つた杖だけで有つたが、丁度其の夜に、町役所から火事が出た、彼は其と見が否や馳せ附けて、全く命掛で働いて、見た人の噂では彼が火の中で焼死なんだのが不思議であ

る、命の惜しい人には、逆も其の眞似は出來ぬ、彼は煙の中から二人の兒供を抱いて出た、其兒供が丁度警察長官の子であつたので、長官は甚く有難がり、其れが爲に彼の持つてゐる旅行の鑑札をさへ檢めなんだ、檢めては失禮に當るといふ程に感じたのだらう、だから彼の身分は誰にも分らぬ名は其時から班井の父老(フアザー・マデライン)と呼ばれた。

父老といふのは先多少の尊敬である、班井とは自分の名乗る名なんだらう、彼の製品は殊に西班牙の方面から莫大の注文が引切りなしに來る事になり、本場の英國や獨逸の株を壓倒する程に見えた、彼は二年の後に男工、女工と二棟の大なる工場を建てた、五年目には銀行への預け金が六十萬法以上も溜つた。

けれど彼は自分で是だけ溜る迄には、町一般へ直接間接に何れほど寄附したか分らぬ、慈善病院をも彼の力で増築した、彼は二個の學校をも建て、町へ寄附し、其教師をも自費で雇ふた、常に彼はいふた、國家の中で、最高至上の職務といふのは、國務大臣でない、病院の看護婦と、學校の教師だと。

彼の年は五十左右と見受けられた、氣質は至つて柔和である、顔を見ると爾う柔和ではなく、餘ほど艱難を経た者と見え、深い筋が額にも頬の邊にも刻まれてゐる爾して極の無口だ、けれど

男女の區別を正す事だけは至つて嚴しい、工場を分けたなども男女の風儀を重んずる爲である、從來餘り風儀の良くない土地であつたけれど、之が爲に餘ほど改まつた、苦情も醜聲も貧の泣聲もなくつた、細民といはれてゐる者達が、大抵は富んだ、従つて正直にもなつて、彼が人にいふ言葉は唯「正直にせよ」といふより外にない、職工に向かつて、女工に向かつて「お前は正直者にならねば可いぬよ」とのみいつた。

其上に彼は信神者だ、日曜日には必ず朝夕に誰より先に説教を聞きに行つた。

中以下の者は彼を慕はぬはなかつたが上流の中には彼の餘りに篤實な行ひを合點し得ぬ連中もあつた、其様な人は、彼が町の事に多分の寄附金などするを見てはいふた「ア、市會議員の候補を争ふ下心だ、彼れ仲々の野心家だ」と、併し彼の徳望は町に溢れたといふ者だ、千八百十九年に地方廳から、彼れの功績を中央政府へ上申した、彼れは國王から土地の市長に任命せられたけれど彼れは辭した、彼れを野心家といつた連中は見當が違つた、間もなく彼れの製品は勸業博覽會で最有功の審査を受け賞勳局から彼れに名譽ある勳章が下つた、彼れは又辭した、愈々彼の心の奥底が分らぬ、斑井父老、斑井父老、其名は殆ど神の様だ、諸所方々の宴會や祝宴などから彼れの元へ招待状が雨の様に集まつた、けれど彼れは悉く斷つた、彼れを疑ふ者は又いふた。

「無教育な人間だから實際の仕方を知らぬのだ」と、是だけは本統かも知れぬ、彼れは一身の暮し方でも實に質素を極めてゐた、自分の使ふ職工と多く違はなんだ。

愈々出て愈々現はれるのは彼れの徳だ、遂に市會一致で彼れを市長に推選した、國王から再び其の任命が來た、彼れは又も之を辭した、けれど今度は地方廳が、其の辭表を取次がぬ、市中の重なる者は、或は自身で、或は總代を立て、毎日の様に彼の許へ、就職の勸告に來た、其れでも彼れは聽かなんだが、或日彼が細民の住む町を見廻つてゐると、一人の老婆が戸口に立て腹立しげに彼れを罵つた「市長に成れば何の様な功德でも出来るのに、此人は功德を積むのが嫌ひだと思へる」此言葉が最も彼れの心を動かしたらしい、彼れは終に就職した、善を行ひ功德を積むといふ考へで就職したので斑井父老と呼ばれた身が終に斑井市長と尊はるゝ様に成つた。

一五 蛇兵太

眞に斑井父老の様な善人は又と得難い。

彼は幾等富ても自分の暮し向を變ぜぬ、贅澤と云ふ事が一つも無い、少し身體の暇な時には讀書する、其が爲だらう、初め此土地へ來た頃から見ると、言葉も人柄もズツと上品に成つた、初

めは職人かと思はれたが今は立派な紳士である。

彼は銃を肩にして出る事がある、けれど罪の無い生物を決して殺さぬ、何うかして偶に射撃する時は、其狙ひの正しいこと恐る可き程だ、彼は何時でも許多の金銀貨を衣囊に入れて家を出るが、歸る時は全く空にてゐる、途中で貧民や子供に與へるのだ、時に依ると人の留守の家に入込んで、棚の上へ金貨を置いて立去る事も有る、又彼は若い時は田舎に住んだ事が有ると見え農産物などに就て様々の知識を持つてゐる、折さへ有れば誰にても教へて遣るが、其言葉に従つて見ると必ず意外の好結果が得られる、彼は腕力も強いからして可也の年だけれど途中で行惱んだ荷車などを推して遣る時には馬より強い、曾ては町の中で荒狂ふ牡牛をば、角を持つて押へ附けた事も有る。

何しろ彼れの評判は日に／＼高い、或る貴婦人などは、彼れが何の様な寢室に臥るだらうと怪しみ、物好にも「拜見させて下さい」と言ひ込んだ、彼は直に其婦人を二階に連れ行き寢室の飾り附を見せた、其婦人は案外な想ひをした、狭い室に、古い寢臺が一つ有るのみで、四方の壁は古新聞紙で貼つて有る、此の上も無い質素な作りだ、唯だ一つ不似合とも云ふ可きは、枕許の棚に二個一對の銀の燭臺が立つてゐる、刻印で見ると全くの純銀だ、其上に多少の古色も着いて

ゐる。

千八百二十二年、即ち彼れが市長に就職した翌年である、有名なタインの高僧彌里耳僧正が死んだとて、其の報知が田舎の新聞にまで載せられた、彼れは之を見て自分の服へ直に喪章を着けた、餘ほど彼れは悲しんだ容子である、之を見て、上流の人達は、扱は此の市長は彌里耳僧正の親戚で有らせられたのか、其れでは慈悲善根を積むのも無理は無いと、一方ならず尊敬する様に成つた、或人は故々彼れに問ふた「貴方は彌里耳僧正のお従兄だと聞きますが」彼れは答へた、「イ、エ、何でも有りません」其人「でも喪章をお着け成さるのには」彼れ「私は若い頃、彼れの方の既に雇はれてゐました爲めです」

最う班井市長を尊敬せぬ人は一人も無い彼れの名は遠近に響き渡つた、土地の人は何事が有ても彼れに相談に来る、又相談さへせば必ず満足な結果を得るのだ、訴訟事でも裁判所へ持出さずに先彼に仲裁を頼む、彼が仲裁すれば必ず公平に治めて了ふ、其れだから十里二十里と離れた土地から故々彼の風采を拜みに来る人さへある、彼が外へ出ると子供や又は特別に彼の世話に成つた者達が群を爲して彼の後を隨ふて行く程とはなつた。

併し斯様な中に唯つた一人、斑井市長を怪しんで、何うしても心の解けぬ人がある、其れは此土地の警察に巡查部長を奉職してゐる蛇兵太（ジャベルト）といふ者である。

蛇兵太は斑井父老が此土地へ入込んで多少の位置を爲した後に此土地へ轉任して來たのだから初めの事は知らぬ、けれど自分が來て後は少しも斑井に目を離さぬ、其のち斑井の身分が上れば上る丈け益々彼は嚴重に目を附けて、斑井が市長とまでなるに及んでは、何うしても此市長の化の皮を剥いで呉れねばと決心した様である。

此者は本、巴里の監獄の中で生れた、母は愚民を欺いて世を渡る女占師で父も懲役に入つてゐた、是だけの成長で大抵其人柄は分るだらうが、人情といふ者が毛ほどもない、何でも彼に取つては法律のある許りで、人の善悪は唯法律に觸れると觸れぬとで分れるのだ、少しでも法律に背いたと見れば、直に目を附ける、直に擧げる、直に捕縛する、天然に捕吏といふ恐ろしい職務に生れ附いてゐるとでもいふのか知らん、縦しや自分の父であらうが母であらうが、法律に違つたと見れば容赦はない、其れだから他に取所もないけれど廿年も巡查を勤めて今は部長にまで登つてゐるのだ、大抵の人は一目彼の姿を見れば震へ上つて了ふ、彼は何時でも其額を帽子の縁に隠

し、其の眼を濃い眉の下に隠し、頤を襟の中へ突込んで隠し手先を袖口の中に隠し、警棒を外套の下に隠してノソリノソリと歩んでゐる、宛で羅紗に包んだ箱が歩んでゐる様な状態で少しも人間と認む可き所は現れて居らぬけれど、スハ怪しい者が見えたと爲ると、手も足も目も口も、一時に隠れ場から現はれて飛び掛つて捕縛する、全く人を捕へる機械の様に出來てゐるのだ。

此機械は初めて斑井父老の顔を見た時、何だか見覚えのある顔だと怪しんだ、何でも暗い所を経て來た人に違ひ無い、爾無くば己の眼に斯う見覚えの残る筈が無いと云ふのが論法だ、幾日幾月彼れは怪しんだか知らぬが、終に思ひ出したと見え「爾だ、最う逃さぬぞ」と呟いた、此後と云ふ者は折さへあれば斑井に接近した、何でも確な證據を得ねばと、唯其れのみ肝膽を砕く容子であつた。

けれど彼れに對する斑井父老の容子には少くも、他の人に對するのと異つた所が無い、同じ様に親切で丁寧で、同じ様に平氣で、謙遜だ、身に暗い所のある人とは少しも思ふ可き手掛りが無いので、彼も聊か飽飽であつたが、併し終に變つた所があつた。

多分斑井父老は蛇兵太が自分を怪しむ容子に氣が附かなんだらう、けれど終に氣が附かねば成らぬ場合が來たのだ。

一六 星部父老

何の様な罪人でも一旦蛇兵太に見込まれたら最う逃れぬ、何うしても取押へるまで執念く付き纏ふのが蛇兵太の蛇兵太たる所である、縦しや罪人で無くとも彼れに疑はれたら災難だ、何か缺點は見出される、此の様な男に斑井父老が見込まれたとは實に不運だ。

或時、雨の續いた揚句であつた、一輛の賃馬車が泥の中で轉覆して、年老いた馱者が其下に壓かれた、此馱者は元、土地で公證人を勤め、姓を星部と云ひ、世間からは星部父老と呼ばれて多少の尊敬を受た人だが、丁度斑井父老が初めて此土地へ来た頃に零落して事務所を閉み、其日暮しの憐な身とは成つた、何しろ取る年で、是と云ふ仕事も出来ぬから、自分が盛な頃に乘つた馬車を、其まゝ賃馬車とし、昔自分の爲に馱した腕で人の爲に馱する事とは爲つた、斯う自分が零落した頃から斑井父老がメキメキと繁昌を初めたので、此人のみは世間が總て斑井父老の徳に服した中で獨り斑井父老を嫉んでゐた、嫉むと云ふ程で無くとも斑井の出世を快く思はなんだのだ、其れは扱置き、此通りの年である爲め、今は充分に馬を馱する事さへ出来ず、雨後の惡路で手綱を取損じ、馬と車とを共に倒して自分が其下に成つたのだ。

直に通り合す人々が其處へ集まつたけれど如何ともする事が出来ぬ、重い車だ抱返した深い泥に食入つて次第々々に沈む許りだ、沈むと共に老人の身體は益々壓されて、今にも胴骨が折れるか碎けるは必定である、彼れは唯だ腕き、唯だ苦しみ「痛い、痛い、早く助けて呉れ、最う死ぬる、死ぬる許りだ」と悲鳴を揚げて叫ぶ状は聞くに忍びず視るに忍びぬ、彼の蛇兵太まで茲に来て合せてゐるけれど、手を下し様が無い。

悲鳴の聲や、人々の騒ぐ聲を聞き付けて、斑井父老も茲に来た、彼れは直に馬車の周圍を見廻つて「誰でも横桿を持つて来い」と叫んだ、けれど持つて来る者が無い、斑井は又見廻して「ア、馬車の下に、猶だ少しの隙がある、誰でも那の下へ這つて入り、背で馬車を持上げれば星部父老を助ける事が出来る、ササ誰か潛て入る者は無いか、褒美は茲に五ルイある」五ルイと云へば百法である、誰とて之を得度く無い者は無いが、馬車の下へ潛て入れば星部父老と共に壓潰されるは必然である、諸人は唯だ顔を見合した、其中に老人の悲鳴は又聞えた、今は絶入る程の苦痛である、斑井父老は宛も自分の身の苦痛の如くに氣を揉めて「其れでは十ルイ遣る」十ルイの聲にも猶ほ應ずる者が無い、斑井は三たび叫んだ「星部老人を助けた者には二十ルイだ」四百法の大金でも馬車の下に入る者が無い。

斑井父老「エ、今の中で無ければ馬車が益々沈むから、這入る隙間が無く成て了ふ、サア誰かサア誰か、」先ほどから窃に斑井父老の容子をのみ睨んで居る蛇兵太は、父老の傍に寄り、穴の開くほどに其顔を眺めつゝ「馬車の下へ這入つたとて星部老人を助ける事は出来ません、全く共に厭潰されます、私の知て居る所では、下から此馬車を持上げるほど物を背負ふ力の有る人は、此世の中にタツタ一人です」タツタ一人と云ふ言葉に斑井父老は異様に震ふた、其中馬車の下から悲鳴の聲が又聞えた、斑井は苦痛の顔で又馬車の下の際間を見た、蛇兵太は語を續け「タツタ一人と云ふ其人は、先年懲役場にゐたのです」斑井は單に「爾ですか」と答へた、蛇兵太は又も斑井の顔を見て「ツローンの監獄署に服役してゐた奴です」確に我、瓦我の事を指してゐる、斑井は聊か顔の色を變じた、此とき悲鳴が又聞えた。

「誰か星部父老を助ける者は無いか」と斑井は又も叫んだけれど誰も應ぜぬ、其中に馬車と地との隙間は愈々少くなつた、蛇兵太は咳く聲が又聞えた「ツローンの那の囚人で無くては、逆も駄目だ」斑井は絶望する如く蛇兵太の顔を見た、彼れの眼は猶ほ我顔に注いでゐる、更に斑井は他の人々の顔を見廻して異様に笑んだ、彼の笑には殆ど身を捨てる決心まで籠つてゐるのではあるまいか、彼れは直に帽子を脱いだ、爾して一同が何をするか合點し得ぬ中に、身を屈して馬車

の下なる隙間の所に入つた。

一同は其れと知つて、驚いて絶叫した「斑井父老、斑井父老、其様な事を爲さつては」と、今まで悲鳴を揚げてゐた星部父老も、苦しい息で「斑井父老、私は死んでも好いのです、出て下さい、出て下さい」今出すば全く命が無いのだ、唯一人之を喜ぶのは蛇兵太である、彼れは斑井父老が馬車の下で必死の力を出す時には、必ず一入明かに現はれるだらうと信じてゐる、彼れの目は殆ど鷹の目の様だ、馬車の下に入つた斑井の顔に鋭く注いだ「けれど、斑井は頓着せぬ、唯人の命を助け度い一心だ、彼れは全身の力を以て馬車を擡げた、けれど馬車は動かぬ、彼れの顔は朱を注いだ様である、彼れは再び全力を出した、馬車は動かぬこと初めの通りだ、彼れは三度目の死力を出した、之で動かすば人間の力には及ばぬのだ、馬車は動いた、泥に没した其轡が一尺ほど抜けて出た。

一七 死んでも此御恩は

實に何と云ふ大力だらう、到底動くまいと思はれた重い馬車を、脊の力で起し上げた、通例の人なら脊骨が碎けて了ふのだ。

蛇兵太がツローンの獄で見たといふ其囚人ほど強い人が、茲にも一人あつたのだ。けれど之れが斑井父老の最後の力であつた、彼は馬車を一尺ほど起したまゝ其下で叫んだ「サア早く、早く」と、之は壓せられてゐる星部父老に早く這つて出よと促すのだらう、其聲は實にあらん限りの術なさを集めた様に聞えた、若此まゝで唯一分間猶豫せば斑井父老の力は盡き、星部老人と共に再び馬車の下になつて死の運命を共に仕たのだらう、眞に危急とは此事である、併し見てゐる人々が直に馳寄つた、最う是れだけ馬車が上つたのだから後は一同の力で引き出す事が出来ると想ふたのだ、そして幾十の手で其馬車を引起した、全く斑井父老一人の熱誠が多勢の力を喚び起したといふ者だ。

馬車の下から出た時の斑井父老の顔は、火の燃てゐる様であつた、満面に汗が流れて着物は裂け身體は泥まぶれである、此様な事が他人に出来るだらうか、自分の一身を打忘れて人の命を助けたのだ、我が敵を助けたのだ、彼は先づ蛇兵太の顔を見た、蛇兵太の眼は猶も彼れに注いでゐる彼れは次に一同の顔を見た、彼れは恐れる色も誇る色もない唯星部老人を助け得て、安心した容子である、直に星部老人は彼れの膝に縋り「お蔭様で助かりました、貴方は命の親です、神様です」とて感泣して恩を謝した、けれど星部老人の膝の骨は碎けてゐた。

直に斑井父老は、人をして星部老人を、自分の建てた病院へ擔ぎ込ませた、翌朝此老人が目を見つて見ると枕邊に千法の金と一通の書附があつた、書附には「此金は貴殿の馬車と馬とを買取たる代金にて候」と斑井父老の筆蹟で記してある、ア、何といふ行届いた仕方だらう、馬は死に馬車は碎けて何の役にも立たぬのに、斯まで深い情を受けてと誰が恩義を感ぜずにはゐられやう幾日の後老人は病院を出たけれど、跛と爲つて了つた、斑井父老は猶も心配し種々の通手を求めて、終に此老人を巴里の或尼寺の庭番に住込ませて遣つた「死んでも此御恩は忘れません」と老人が繰返して謝したのは無理も無い。

この後、間も無くで有る、斑井父老が此市の市長に擧げられたのは、全く積り積つた徳望が自ら其身を推上げたと言ふものだ、けれど獨り蛇兵太のみは驚いた、彼れは宛も番犬が狼を主人と戴かねば成らぬ場合に迫つた様な心持がしたのだらう、之よりはなる丈け市長に接近する事を避けた、職務の上で止むを得ず市長の前に出る時は非常に鄭重に口を利いた、餘計な言葉など交するを恐れたのだ。

市長と爲つて後の斑井父老の功績は一々記し切れぬ、此のモントリウルの地を繁昌の上にも繁昌させた、その一例を云へば、是れまで此土地は、政府が租税を取立てるに尤も骨の折れる所で

有つたが、数年の中に收税費が他の土地の三分の一で足る様になつた、其頃の人は孰れも善政の實例として此土地を引證した、就中く時の大藏大臣ウキリル氏の如きは口を極めて賞讃した。

丁度モントリウルが此通り繁昌して來た際で有つた、彼の憐む可き華子が、娘小雪を汪多樓の宿屋に預け、此の故郷へ歸つて來たので、彼れは十二年目に歸つて來たので、別に頼る可き人とも無かつたが、斑井父老の女工場が、困る人なら誰をでも喜んで迎へ入れた、彼れは間もなく女工として此の工場で給金を得る事になつた。

一八 夫がなくて兒供が

禍は禍を生み、不幸は不幸の種と爲る、一旦墮落を初めた者は、何の様な深い谷底へまで落ち込むかも知れぬ。

弱い相手と見れば、傷つては遣らずに却て宥め付け、躓く人を見れば、扶け起しはせず却て推し出す、是が世の中と云うものだ、實に恐ろしい仕組では有る、それだから、餓た兒供を救ふ爲に麩一切を盗まうとしたのが本で、十九年の間懲役場に置かれた様な人も出来るのだ。

華子の如きも或は其類ではあるまいか、本はと云へば、貧と云ふ不幸の爲に、辛い女工の境遇に立ち、爾して旨い書生の口先に欺されたのが初めである、それが種と爲つて私生兒を産んだ、次には巴里にゐられぬ事に成つた、其子と別れねばならぬ事にもなり、のみならず其子までも散々に宥められて、四歳や五歳で荒い波風に揉まれねばならぬ事に成つた、是れ文で止まらば未だしもだが一旦不幸に躓いたのだから此上に猶だ何れほど沈んで行くかも知らぬ、社會が沈ませねば措かぬのだ。

兎も角も華子は斑井市長の工場に入つて、再び女工と云ふ昔の境遇に返つた、尤も未だ仕事に慣れぬ爲め充分の賃銀は得られぬけれど、我子小雪に仕送つて幾等かの餘りがある、是れで先安心が得られた、何も本からの懶惰者では無く唯境遇の爲に身を持崩してゐたのだから、斯うなると仕事の忙しいのが面白く感ぜられ、先後々の見込も略付いたと思つた、其處で彼女は小さいながら一家を借受け、月賦の約束で多少の小綺麗な造作をも施した。

實は之が少し早過ぎる、けれど巴里で懦弱に暮した癖が、只此れだけに残つてゐるのだ、何うも造作の粗末な家に住み度く無い、爾して時々鏡に向かつて自分の姿を照し、長い髪を撫で、見

たり、可愛い口許で笑つて白い齒の輝くを眺めたりするのが唯一つの鬱晴した、何だか自分に綺綴が残つてゐる間は猶だ寶が残つてゐる様にも感じて氣強い所がある、必ずしも見榮だの贅澤だのと云ふ譯でもない。

斯様に仕てゐて月々彼の手鳴田の許へ、手紙と娘小雪の養育料とを送つて遣る、勿論手紙は人に書いて貰ふのだ、何しろ是れで順當に行けば先苦勞も無く過ごされる所であつたが、世の中には順當と云ふ事が極めて少い、何時の程からか女工仲間では疑ふ者が出来た、毎月金と手紙とを何處かへ出すのは、何か仔細があるに違ひ無いと云ふ様な事から、益々疑ひが廣くなり、果は手紙を代筆する者を捕へて問糺しなどする人も出来、終に子供のある事が分つた、夫が無くして子供があれば其兒供は私生兒だ、私生兒の母を、此の清い女工場へは置かれぬと云ふのが、仲間うちの輿論とは成つた。

若し慈悲深い工場主が知つたなら、何とか穩かに處置する工風も有たらうが、此工場は一人の老婦人が總て女工の出し入れなどを任されてゐて、雇ふにも解備するにも其の人の一存で決するのだ、私生兒の母と云ふ事が其の老婦人の耳へは餘ほど恐ろしく聞えたともえ、直に華子は其人の前へ呼出され審問せられ、爾して解備せられた、但し工場主が兼ねてから、人を解備する場

合には是れ／＼と、手當の仕方を定めて有るのだから、その定めに従つて五十法の手當を與へられた、キツト安心と思つた地位が是れで又消えて了つた。

頼る人の無い華子の身に、解備と云ふ事は大變な事件である、造作主からは直に嚴談が來た「若し月賦金の濟まぬうちに此土地を立去る様な事でも有れば、窃盜と見做して其筋へ訴へる」と家主からも略ぼ同様の嚴談が來た、家賃も多少は滞つてゐるのだ、併し造作主も家主も華子の綺綴の美しいのを見込んで居るから、此土地に置さへせば何とか返済は付く者と信じて居る、漸く華子は五十法を双方へ振播いて一時の所を凌いだ、後の見込が少しも無い、それに丁度此時である、小雪を預けてある手鳴田から、養育料を七法から十二法に上げて呉れとの請求が來た、何として此後の所得の道を付けねば成らぬ、それには奉公の外は無いと、先づ町中を殆ど軒別に聞いて歩いたが、何處でも雇ふて遣らうと云はぬ、見るに見兼ねて、或人が勧めた、工場主の斑井市長へ一應事情を打明けて雇繼を願つてみるが好からうと、若し此勧めに従へば必ず工場主は其の日頃の慈悲心で、何うとでも取計らふて呉れたで有らう、けれど華子は此勧めに従はなんだ、自分の身に落度があるから解備せられるのが當然だと諦めた。

一九 責道具

女が職業を失へば賃仕事の外に道は無い、華子は賃仕事を初めた、兵隊の着る襦衣を縫ふのだから、毎日十七時間づゝ縫ふて凡て二十四銭の賃が得られる、其中で廿銭は娘小雪の養育料に送らねば爲らぬ、一日の暮しが只た四銭、稼ぐのは十七時間。

是れで何うして身體が續かう、兼て華子は、巴里以來の艱難に、何處か内部を傷めたと見え、折々咳が出て居たが、此頃になつて其の咳が益々出る、醫者に診せれば必ず肺病の下地だと云ふのだらう、併し日に四銭では養生が出来ぬのみならず、食ふ事も能くは出来ぬ、自然と小雪への養育料も後れ勝に成つた。

けれど、意外に人間は艱難に堪へる者だ、食ふ物も減し、着る物も減し、朝の六時から夜の十二時まで針を持ち通して幾月をか経たが、娘小雪の預り主、彼の手鳴田から小雪に綿の入つた胴着を着せねば成らぬ故、十法の金を送れと云つて来た、此の金が何うして出来やう、けれど自分の身が艱難に沈めば沈むだけ、益々兒の可愛さが増して来る、實を云へば唯娘の可愛さのみに、艱難を耐へて行く事が出来てゐるので、何としても此金を送らねば成らぬ。

此夜華子は理髪師の店に行き、我が髪の毛を解いてみせた、根からそつくり刈り取れば十法に買受けると理髪師が値踏した、直に其場で刈取らせて十法の金を受け取り、之を以て胴着を買ひ直に手鳴田へ送つて遣つた、手鳴田は見込が違つた、金で来るだらうと思つたのが品物で来たのだから大いに怒つて直に其の胴着を自分の娘疣子に着せた、小雪は依然として寒さに震へて居る併し華子は爾うと知らぬ、定めし小雪が暖かに成つたらうと安心した。

爾して其身は頭巾を被つて暮したが、斯うなると世のなかを恨ますには居られぬ、此様な景状に落入るも畢竟斑井市長が此身を解備した爲だと、何にも知らぬ市長を憎む様になつた、此時までは自分の貧窮な姿に耻ぢ、人に見られるのを厭ふたけれど、最う耻をも忘れた、自分で段々と自分が耻知らずに成るのを感じて「何に構ふ者か」と呟き、心の中に起る情け無さを揉み消した而うして外へ出ても殊更反返る様にして、頭を高く上げて歩き、顔には常に世間を嘲る様な笑を浮べて、偶に斑井工場の邊などを通る時には、故と窓下で鼻語を語ふた、此様にして終に、世に不貞くされなど稱せられる墮落女が出来上がるのだ。

髪の毛を切つてから、半年と経ね中に手鳴田から又難題をいつて来た、今度は小雪が疫病に罹つたから薬代として四十圓送れといふのだ、早く薬を吞せねば死ぬかも知れぬと書添てある、一

日四錢で暮さねばならぬ身に此金が何うして出来やう、華子は餘りの事に聊か氣でも觸れたのか聲を放つて笑つた、爾してフラ〜と町に出て、何處といふ當もなく歩んでゐたが、弱者を窘める社會の責道具は何處までも備はつてゐる、町の或所に屋臺の様な店を卸して、人の齒を抜いたり創薬を賣つたりする旅から旅の香具師があつて、面白い口上を述べ、往來の人を呼び留めてゐる、華子は外の人と共に其店先に立留り口上を聞いて笑つたが、忽ち其の口許に目を付けたのは香具師の親方である、彼れは無縁に華子に向ひア、姉さんの齒は美しい、何うです、前齒の揃つた所を二本だけ私に賣つて呉れませんか、丁度其様なのを欲しいと思つてゐた所だから一枚に就き二十圓、二本で四十圓に買ひますが」華子は恐ろしさに顔色を變へた、傍にゐた一人の老婆が「此娘は何と云ふ合せだらう、賣つてお了ひよ」とて、齒の無い齒齦を露出して美んだ。

華子は忽ち逃げて歸つたけれど、其恐ろしさに聊か正氣を回復した、考へて見ると浮々してゐられる場合で無い、我兒が疫病で死掛つてゐるのだ、何とか工風せねば成らぬと、兼び手紙を取出して讀めぬ目で打眺め、更に隣家へ持つて行つて、兼て賃仕事を分け合つてゐる親切な老婦人に讀直して貰つた、老婦人は云ふた「何度讀直したとて、先刻私の讀んで上げた通りだよ、四十圓の金が無ければ小雪が死ぬると書いて有るのさ」華子は家に歸つて夜に入るまで獨りで泣いた

爾して夜の十時頃である何か思案が極つたのか、強い酒を多量に呑で其の勢で家を出た、尋ねて行くのは晝間見た彼の香具師の宿であつた。

此翌朝、毎日は早起きの華子が起き出ぬので、信切な隣家の老婦人が病氣でも有るかと思つて華子の家に入つて来た、華子は寢床の中に坐つて床の上を見詰めてゐる、殆ど老婦人の來たのにも氣が付かぬ様に見える、老婦人は其顔を見て驚いた、昨夜分れた時までは、頭の毛こそ短けれ未だ若い愛らしい美人の面影を留めて居たにの、一夜の中に相格が全く違つて、老婆かと、見誤られる様に成つた「先ア何うしたのだよ、華子さん」華子は一言も發せぬ、唯だ床の上に指しをした、見れば其の所に廿圓の金貨が二つ光つて居る、老婦人は又驚いた、「此の金貨は、エ、本統の金貨では無いか」華子は初めて答へた「ハイ小雪に遺るのですよ」聲までも老て居るのみならず唇が膨上つて其の兩側へ血が浸み、口の中には前齒の所に黒い穴が開いて居る。間もなく華子は四十圓を手鳴田へ送つた、けれども其實小雪は疫病でも何でも無かつた。

二〇 畜生道に落ちた

髪は女の容色の第一である、貧の爲に之を切つて賣るとは能く〜の事だ、更に生きた前齒を

抜いて賣るとは何と云ふ無惨な次第だらう、齒が無ければ女で無い、怪物だ。

此様な場合にまだ立到つては、最う何の様な事でもする、何を惜み、何を憚るに及ぼらうぞ、華子も最う全く自狂とは成つた、自狂と爲る外に仕方が無い、鏡などは二度と見る氣が仕ないから窓から外に叩き付けて碎いて了つたけれど、是が爲に貧苦は癒えぬ、癒えぬのみか益々重くなる許だ、着物も有る丈は賣つて了つた、家具も造作も追々に無くなつた、纔に残つて居る品物は借金の方にとて雑作屋が持て去つた、後には寒いのに着て居る夜具も無い。斯うなれば容貌などは何う成らうと構はぬ、着物は破れるに任せ、顔や身體は汚れるに任せて、繕ひもせねば洗ひもせぬ、全く人であつて獸の境遇だ。

見るもの聞くもの、總て腹の立つ種と爲る、人が憎い、世の中が憎い、取分けて斑井市長、恨む心などは殆ど極度にまで募つた、此様な状態で、果は何う成り行だらう、其上に兼て憫んで居る怪しげな咳が、寒い想ひをするに付け益々重く成る許りだ、而も此の甚い最中へ又も手鳴田から難題の手紙が來た、百圓の金を送れと云ふのだ、送らば漸と病氣の直り掛けて居る小雪を、寒空へ叩き出すと書いてある。

手鳴田へ送る可き養育料が最う少からず滞つて居るのだから此様に云はれても仕方がないと云

つて百圓の金が何うして出來やう、生き齒まで賣つた後だもの、「エ、最う此身を賣つて了はう」と華子は叫んだ、身を賣れば人間でなくなるのだ、畜生道へ落ちるのだ、自分の肉を切賣する様な者だけれど、最う華子の心は人よりも獸に近い、情も無い耻も無い、有るのは唯だ娘の可愛さと人の憎さだ、竟に身を賣つた、愈々畜生道には落ちた。

嗚呼文明の法律で、奴隷は廢止に成つたと云ふけれど、社會には依然として奴隷が有る、貧苦が奴隷を作るのだ、そして社會が之を買取るのだ法律で許して有つた頃の奴隷賣買よりも残酷だ

翌年の一月、雪が降る寒い夕方の方の事である、道樂者の寄集まる風儀の悪い或る料理屋の前に厭らしいほど華美に見ゆる夜會服を着けた一人の女が、行きつ戻りつ徘徊して居る、是れは夜會の爲でなく、客を引く爲である、慣れた人の目には一見して其れと分る、顔には殆ど人間の色もなく、人間を離れた様な只物淋しい面影が有るけれど、白く現はれて居る襟首は多少の恰好を存じて居る、此寒いのに何時まで徘徊して居る事かと怪しまれたが、店の中に一人の客が居て、此女が窓の外を通る度に、唾と共に煙草の煙を吹掛けなどして嘲つて居る「何と云ふ醜い顔だ」とか「齒抜けの婆あ」とか云ふ様な聞き苦しい言葉が幾度と無く其の客の口から出るけれど女は即か

ぬ振である。

客は土地の物持の息子でも有らう、當時の道楽者の仲間に行行する荒い縞の服に大きな襟を着けた所から、總ての容子の横柄な所などは、孰れ身代の威光を以て、人を窘めなどして面白がる連中の一人りである、彼れは散々に女を罵つたけれど、少しも女の頓着せぬを見て、是では足らぬと思つたか頓て家の外に出て、両手に雪を掴み取り、女の行く脊後から其の首筋の所を目掛けて浴せ掛けそして喝采する様に打笑ふつた、眞に悪戯にも程が有ると云ふ者だ。

勿論襟の所を切開いて肌までも現はした服だから女は夥たか浴た、今まで平氣を粧ふて居る勘辨が盡きたと身え、彼の女は忽ち恐ろしい叫び聲を發し、狂ふ獸の様に此方に振り向き、紳士の身に飛び掛つて紳士の顔を引つ攫み引つ搔いて、猶も悔しげに獅噛み付いた、今まで散々に嘲られ辱められた狀を思ふと、少しも之は無理で無い、自他の區別も忘れる程に腹が立たのだらう、けれど紳士は驚いた、醜業をする様な女に、此の様な待遇を受けるのは初めてである、振放さうとしても女は死物狂ひの様で仲々離れぬ、組みつ解れつ双方が一塊りと爲つた、周圍は早や居合せた他の人々が取圍んだ、若此儘に置いたら、何の様に果るかと疑はれたが、頓て群集の中から警官の服を着けた恐ろしげな大男が出て女を捕へた、其間に相手の若い紳士はコソ／＼と身を引

いて人の中に姿を隠した。

捕へられた女は華子である、捕へた警官の顔を見て彼の女は忽ち恐ろしさに堪へぬ如く萎縮した、萎縮するも道理、捕へた其人は虎よりも恐る可しとして、市中の何人も戦慄する巡査部長の蛇兵太である。

二 警察署

直に華子は蛇兵太に引立られた、問いても仕方が無い、警察の力には勝たれぬ、其ま警察署へ連れて行かれた。

何うなる事かと華子は震へ戦いて居たが、先暗い冷たい發石の床に引据られた、茲は警察の審問所である、此頃の法律に依ると市中に起る喧嘩や争ひなどは總て警察署で處分した、即ち巡査部長が裁判官の様な者である、蛇兵太が人に恐れられるは無理も無い、彼れは先部下の巡査を呼びて華子を床の上に引据させ、其身は卓子に向つて筆を取り一種の書面を認め初めた、此書面は監獄の長に宛た者で、即ち華子を牢に入れる積りなんだ、間も無く認め終つて巡査に向ひ「此書面を以て其女を監獄へ連れて行くのだ」と告げた、監獄と聞いて華子は跳上る様に起き、何事を

か云はふとしたけれど、蛇兵太がその眼を興へぬ、直に彼れは華子に言ひ渡した、大抵の人が縮み込む様な冷い嚴かな聲で「汝は今より六ヶ月、入牢するのだ。」

此語を聞いた華子の驚きは、見るも恐ろしい「エー、私しを六ヶ月の入牢、何の爲です、何の罪です」と叫んだが、直に泣聲と爲つて床の上に伏し「其れは甚い、其れは甚い、餘りと云ふ者です何れも私しは牢に入れられる様な悪事を働いたのでは無いのです、私しが牢に入れば、誰が小雪の養育料を拂ひます、私しは毎日稼いで娘小雪を養はねば成りません、私しを牢に入れるは親子二人を殺すのです、許して下さい、許して下さい、部長様、部長様、成るほど私しが紳士に掴み掛つたのは悪いかも知れませんが、腹立の餘りに前後を忘れましたのです、何の咎も無い私しを、向ふが散々に罵りまして、其れを私しが知らぬ顔して耐へて居ると、今度は出抜に往來の雪を取て私の襟首へ投掛けました、幾等身分が違ふても、悪いのは向ふです、私しは餘りの事で勘辨が盡きたのです、其れでも達て私が悪いと仰有れば、私しは那の方に謝罪ります、ハイ謝罪りますから何うか牢に入れる事だけは許して下さい、娘小雪が可哀相です、私から養育料を送らぬ事に成れば、預り主の手嶋田と云ふ男は少しも慈悲などの無い男ですから、直に小遣を叩き出します後生ですから、部長さん、何うぞ、何うぞ」と泣いて願ひ、そして後は、怪しき咳に咽せ入つた

全く此事は、華子の悪いので無く、客が悪い、殊に華子の事情や境遇を考へてみると、石でも涙を注ぐだらうが、唯だ蛇兵太のみは涙を注がぬ、彼れは靜かに卓子より離れ「六ヶ月の入牢と云ふ言葉が通じたのだな、通じたならサア牢へ」華子は床に蹙み付いて、「お慈悲です、お慈悲です」と繰返した、蛇兵太「サア牢へ」

此室の隅の暗い所に、先刻から立て居た一人がある、此人は彼の騒ぎの有つた料理屋の邊から華子と蛇兵太との後に隨て來て此の土間に入り、先ほどから黙つて容子を聞て居たのだ、多分は群集の中に交つて居た人なだらう、そして今や愈々華子が牢に引立てられやうとするを見て、耐へかねたと云ふ状で、突と隅の方から歩み出て、「少しの間、待つて下さい」と云ふた、知らず是れ何者、何を頼みに巡察部長のする事を遮るのだらう。

蛇兵太は怪しんで其人の顔を見た、他でもない斑井父老である、蛇兵太は驚きもし怒りもしたけれど自分より役目が上だから尊はぬ譯には行かぬ、彼れの目には唯だ官等の高下があるのみだ高級の人は尊い、故に禮をする、下等の者は賤しい、故に叱り付ける、是れが彼れの標準なんだ彼れは剛ちなく帽子を脱いで一禮しつゝ「貴方のお言葉では有りますけれど、斑井市長？」と、待つて待たれぬとの旨を述べやうとした。

「斑井市長」との名を聞いて、忽ち容子の變つたのは華子自身である、華子は兼て此市長を誰よりも憎む可き人だと思ひ詰て居る、今茲に現はれたのは更に自分へ重い仇を爲す爲だらうと思つたのか、積る恨みを輝く瞥に溢らせて立上り、巡査が制止する間も無き中に、突々と市長の前行き、其顔を満面に見詰て「オヤ斑井市長さんと云ふのは貴方ですか」と叫びて更に大聲に打笑つた、其の笑ひには斯る女の外は眞似も出来ぬ様な輕侮の響きを含ませて有る、確に市長に向つて、恨みを返す積りなんだ、全く自狂の極度に達して居るのだ、そして「へん市長さんには是れで澤山だ」と云ひつゝ斑井父老の顔に唾を吐き掛けた、ア、侮辱、侮辱、是ほどの無禮が又と有り得やうか。

市長は靜かに自分の顔を拭ふた、そして最と穩かに蛇兵太に云ふた「此女を放免してお遣り成さい」本統に驚く可しとは市長の勘忍である。

三三 市長と華子

蛇兵太の目から見ると、華子の様な賤しい女が、市長に對つて直接に口を利くさへ不敬である況して市長の顔に唾を吐掛けるとは何と云ふ事だらう、眞に世界が轉倒したのだらうかと怪しんだ。

だ。

其れさへ有るに、市長が此の不敬を怒りもせず靜かに顔の唾を拭ひ爾して「此女を放免して遣れ」と云ふに至つて蛇兵太は全く、喪心した、驚きの餘りに、最早や驚く力をさへ失ふた。

けれど華子とても殆ど其通りだ「此女を許して遣れ」と云つた言葉が眞逆に市長の口から出たとは思はぬ、定めし蛇兵太が云ふのだらうと思つた、彼の女は叫んだ「エ、エ、私を許して下さい、さうで無くては成りません、私は悪い事を仕たてたは無いのすもの、私が牢に入れば娘小雪が死にますもの、オ、有難い部長さん、此お慈悲は忘れません、忘れません、ナニ私は恩を忘れる様な悪人では無いのです、此様に成り果てたのも此市長が悪いのです、私を工場から追出したが元なんです、其れが爲に私は、今は借金ばかりの身と爲つて、家主にも手鳴田にも百圓以上の借が出来、詮方無しに此様な情ない身の上に成つたのです」斑井市長は靜かに此言葉を聞いて居たが、深い憐れを催したと見え、衣囊から財布を出して開いたけれど生憎に財布は空だ、彼れは其まゝ華子の傍に寄り「シテ借金と云ふは今何れほどに成つて居る、」華子は又腹立しげに狂ふた「誰が貴方に借金の事など言ひました、大きにお世話ですよ」と云ひ、猶も辱み足らぬと見え巡査に向かひ「巡査さん、巡査さん、貴方は能く御覽成さつたでせう、私しが此の市長の顔

に唾を吐掛けて遣つたのを、いゝ好い氣味だ、是で私は歸りますよ、部長さんから放免して戴いたのですから」とて其まゝ出口の所に行き、戸の引手に手を掛けた。

此時までも部長蛇兵太は、驚きの餘りに石像の如くに成り、身動きも爲し得ぬ状で有つたが、忽ち聲を發した「誰が此女を放免すると云つた」華子は聲に驚いて引手を放し、又脊後に踰るた。斑井市長は穩かに「私しが放免すると云ひました」蛇兵太「仰では有りますが、放免する事は能ません」斑井市長「イヤ私しは騒ぎの所を通り合せ、實地の有様を能く見ました、少しも此女に悪い所は無い、若も拘留するなら雪を浴せなどした紳士の方を拘留す可きです、此女を放免なさい」憎しと思ふ市長の口から此公明な言葉の出るを聞き、華子は呆氣に取られた」蛇兵太「でも此女は、其上に市長閣下をも侮辱しました、今と爲つては何うしても放免は出来ません」斑井「イヤ市長を侮辱した件は貴方に關係は無い事です、私一身の事柄ですから」蛇兵太「イヤ市長を侮辱すると云ふ事は治安の妨害です、貴方一身の事では無く法律の事件です」市長「私は市長の職を以て言ひます、此女を放免なさい」蛇兵太「私は巡査部長の職を以て云ひます、放免は出来ません」斑井「貴方は服従すれば好いのです」蛇兵太「私は職務に服従するのです」職務上此女を六ヶ月の禁錮に處せねば成りません」

意外に激しい争ひである、何う決着する事かと怪しまれた、市長は益々嚴かである「六ヶ月は扱置き一日でも拘禁は出来ません」蛇兵太「でも現に此女が私の職權として」斑井「貴方は中央警察の職務、此事件は地方警察の領分です、職權を云へば私が、此市長が扱ひます」蛇兵太「イヤ、エ市長」斑井「イヤ、エ部長」蛇兵太「其れでも市長」争ふて果しが無い、斑井市長は日頃の穩厚に引替へて大喝一聲「お黙り成され」蛇兵太「と仰有つても」斑井「此室からお退き成され」何うして此人が斯うも嚴重な語を發し得たらう、蛇兵太は威光に打たれ、首を垂れて退いたけれど、彼れの胸中は不平満々である。

華子は市長の一語一語に、總て意外な思ひを爲し、何うなる事かと唯だ身を震はせて聞いて居たが、漸くに市長を恨だ自分の身の過ちを悟り、此様な信切な人は又と無い様に思ひはじめた、其れだのに只た今、自分が此人に無上の侮辱を加へた事を思ふと、消も入り度い程であるが、其れを咎めぬ市長の徳は、世に比も無いほどに高く感ぜられる、何うして此様な人を見損つて居たらうと、次第に後悔の念のみ深くなつた、頓て市長は其の傍に來り「オ、華子さんとやら、貴女が工場に居た事も、工場を出た事も、更に私しは知らなんだ、何んで其とき直に私しへ訴へて呉ません」市長の言葉は自分と同等の人に對する如く丁寧である、昔ダインの高僧彌里耳僧正が

罪深き我、瓦我と云ふ者に論した時とても之には過ぎぬ、華子は一言の返事も出ぬ、「ナニ、過去つた事は仕方が無いとして、最う何も心配には及びません、貴女の借金は悉く私しが拂ひ、爾して娘小雪とやらも引取て貴女へ渡して上げませう、貴女は此土地に住むなり巴里に住むなり、自分の好きな所で暮すが宜しい、但し最う今までの様に賤しく身を持ては可ません、神の目には清い様に、人にも敬はれる様に行ひを改めねばア、可哀相な身の上だ」と眞に涙の出る様な聲で、論し終つて嘆息した、華子に取つては全く身に堪へ得ぬほどの親切である、借金も返して呉れ娘小雪をも迎へて呉れ、其上に清く身を持つ事の出来る様にして呉れるとは、唯だ勿體ない思ひがして、其の身の今までの汚らはしさと、今救はれる有難さが、骨身に徹へる、彼女は、咽び泣く聲の中より「オ、オ、」と叫んだまゝ、斑井市長の足許に氣絶して仆れた。

二三 運命の網

氣絶した華子を早速に斑井市長は、自分の建てた病院へ送らせた、そして其の身は、自ら諸々を奔走して、其夜の中に、華子の今までの身持から、艱難辛苦した次第などを聞知した。華子の容體は思つたよりも重かつた、何しろ無理ばかり續いて居る身體だから一旦躓けば様々

の缺點が現はれて来る、其れに兼てから肺に故障の有る所へ、冷たい雪を浴せられたのだもの、無事に済む筈がない、詰る所、其れや此れやの原因が重なつたのだらう、夜半から熱を發して、翌日の晝前に、漸く人心地には復つた、其とき初めて華子の口を出た言葉は、娘、小雪の名であつた、全く華子の心の中には娘の事より外に何も無いのだ。

市長斑井が華子を傷はつた事は又一方ならぬ、彼れは暇さへ有れば自分で見廻り、信切な言葉で以て慰めた上、昨夜約束した通り愈々小雪を引取つて遣ると云ひ、手鳴田へ拂ふ可き養育料の滞りなどを調べた、爾無きだに華子は最う、深く市長の徳に感じて居るのだから、眞實に有難く思ひ、且喜んで「小雪の顔さへ見れば、直に病氣は直ります」とまでに云つた。

養育料の滞りは百圓餘りで有た、斑井は之に向かつて三百圓の金を送り、直に小雪を連れて来て呉れと言送つたが、餘り金が多かつたので手鳴田は却つて愁心を發した、彼は妻に向かつて云つた「エ、屹度華子に好い旦那が出来たんだぜ、小雪を此方へ留て置けば未だ此上にも搾れるだらう」と、そして彼れは五百圓の勘定書を送つた、其内譯の中には醫者や藥屋の受取なども入つて居る、之は自分の娘と瘧子とが病氣した時の書付なんだ、其様な者を取雜せて旨く計算を作つたのだ、市長は之を見て、三百圓を送つた、是では百圓だけ餘るのだ、爾して「大急ぎで小雪

を連れ来れ」との催足を添へた。

けれど手鳴田は小雪を連れて来ぬ、此後も度々催促を送つたけれど、或は此寒いのを連れて行けば途中で風を引かせる恐れが有るとか、或は未だ前便に調べ洩れた勘定が有るから其れを取調中だとか、様々の口實を書列べて返辭を寄越すのみだ、其の中に早や四十日ほど経たぬが、華子の病氣は益々重くなる一方だ。

其の重る病氣の中で、華子は常に小雪の事のみを云ひ、斑井市長が見廻りさへすれば「小雪は何時来るでせう」と問ふのだ、市長は其度に「イヤ最う来ねば成らぬのだが、今日来なければ明日は必ず来るでせう」と自分の心に信じてゐる儘を答へて居たが、小雪は終に來ぬ、最う此上は直々に人を遣る外は無「爾なくば私が自身で行つて來ます」と云ひ、委任状を作つて華子に署名させた、其文句は「手鳴田殿、此手紙持参の人へ直に小雪を御渡し下され度候、小雪の身に附いての費用等は一切此人が拂ひ申す可く候、華子」と云ふので有つた、是れさへ持て行けば幾等手鳴田でも逃れる道が無いだらう。

此委任状を以て斑井市長が自ら出掛けて行く許りとは成つたが、誠に運命の絲は目に見えぬ網の様な者で、誰も知らぬ間に人を金縛りにし、思ふ通りに出來ぬ様な仕宜に立到らせて了ふのだ。

斯る事の間にも他の方面に容易ならぬ禍が熟しつゝあつた、其れは外で無い、彼の蛇兵太から起つたのだ。

蛇兵太は斑井市長と争つた其夜に、長い手紙を認ためて巴里の政府へ送つた、何かの密告状でも有らうか、或は市長に對する不平の餘り、他の土地へ轉任でも請ふ爲に、辭表をでも出したのかと怪しまれたが、市長が明日手鳴田の許へ立たうと思ふ前日に彼れは市長の許へ尋ねて來た其の容子が毎もの嚴かな彼れと違ひ、痛く愁ひをでも帯て居ると云ふ風で全く打萎れて居る、市長は怪しんで問ふた「蛇兵太さん何の御用です」蛇兵太は力の無い聲で「お願ひが有りました」市長「ハテナ、聞きませう、お願ひとは」蛇兵太「何うか私を免職する様に貴方から中央政府へ御申達を願ひます」實に不思議な言分である、市長は益々怪しんで「エ、免職、免職がせられたいなら御自分で辭表を出すがいでは有りませんか」蛇兵太「私は而うは思ひましたけれど、自分からの辭職では濟みません、私には大變な落度が有りますから、免職せられるが當然です、私は免職を言渡されるのが自分の義務だと思ひます、」其の落度とは何の様な落度かは知ぬけれど流石に蛇兵太である、彼れの一念は唯だ政府と云ひ職務と云ふ事で固まつて居る丈けに落度に對しても辭職だけでは濟まぬ者。免職せられねば成らぬ者と、職務的に信じて居る、彼れは職務の有

る間、職務的な許りでなく、職務を失ふにも矢張り職務的に失ふのだ、彼れは職務の化け者である、併し其の落度とは何だらう、市長は問ひ返した「御自分で落度とは何の様な事柄です」蛇兵太「ハイ先頃、あの華子と云ふ女の事に就き、貴下と権限を争ひました時に、私は餘り腹が立ちましたから、直に書面を以て貴方を巴里の中央政府へ告發しました」市長は笑つた「ハ、私を告發、市長の身を以て警察に干渉したと云ふ告發ですか」蛇兵太「イ、エ爾では有りません、斑井市長は其實懲役から出て来た前科者で、公の職務を奉ずるの公権の無い人だと告發したのです」斑井市長は返辭の言葉が咽喉に詰つた、出し度くも聲が出ぬ、顔は殆ど鉛の様な色に成つた。

二四 本統の我、瓦我

「懲役から出て来た前科者として市長を告發しました」と云ふ蛇兵太の此一語が斑井市長の耳に何の様に響いただらう、眞に市長の顔色は見るも氣の毒な程で有つたけれど蛇兵太の方は自分の事に屈托して居て市長の顔を見ぬ、自ら下を向いて話して居る、之れだけ市長に取つて先仕合せとも云ふ可きだらう。

蛇兵太は市長の返事待たぬ、其まゝ言葉を續ぎ「私は全く爾うに違ひ無いと思つたのです初めて此土地へ来て初めて貴方を見た時に、何だか見覚えの有る様に思ひ、能く氣を付けて見ると第一貴方の歩み振が何だか足を引擦る様に見えるのです、是は半の中に長く居て、足へ重い分銅を着けられて居た人の歩み振だと私は此様に思ひました、御存じの通り、重い懲役人の中で、危険な奴と認められた者は足へ分銅を着けられるのです、分銅を着けられて長く居る間には、足の癖が違つて異様な歩み方をする様に成り、人に依ると生涯其癖が抜けません、貴方の歩み振には何だか其様に見える所が有りますので、扱ては長く懲役に居た事の有る大變な前科者だと思ひましたそう思つて又考へると、確に私が、昔ツウロンの監獄へ助手に雇はれて居た頃、屢逃亡を企てた罪人だと云ふのが有りました、貴方の顔が何だか其者に似て居る様に見えるのです、それから益々氣を付けて居ますうち、那の星部老人が馬車に壓かれた事件が有りました、其とき貴方が馬車の下へ潜り入り、背中で其馬車をお持ち上げ成さつたので、最う愈々違ひが無いと思ひ込みました、今申したツウロンの囚人と云ふのが、何をさせても、四人力以上有つて殊に物を背負ひ上げる力などは驚く可き程でした、其罪人は姓名を我、瓦我と云ひましたが、私は那の時から貴方の事を自分の心の中では斑井市長とは云はず我、瓦我と云つて居たのです、其れだか

ら先夜貴方と争つた時、忌々しさに堪へず、最う黙つては居られぬと思ひ、既に貴方を告發したのです。我、瓦我と云つて、中央政府へ密告したのです」

長い説明の間に漸く斑井市長の顔色は、さほど眼に立たぬまでに直つて、爾して聲も平に出る事に成つた、併し彼れは卓子の上に在り合せた記録帳を開き、筆を以て何やら取調べて書入れる様な振をして居る、之は心の騒ぐ状を見せまじとて紛らせるのでは有るまいか、其れとも眞實に取調べる必要が有つてだらうか、彼れは極めて用心深い様子で、徐に、蛇兵太に問返した「そして中央政府では貴方へ何と云ふ返事を寄越しました」蛇兵太「私を氣でも違つたのだらうと云はれました」扱ては彼れの密告は採用せられなだと見える、其れだから彼れ、自分の落度と知て免職せらる可き場合だと思ふ事に成つたのだな。

其れにしても彼れの其の疑ひは根本から解けたのか知らん、彼れは最う、成るほど自分の疑つたのが全くの思ひ違ひで有つたと、思ひ直したのか知らん。

彼れは又語を繼いだ「實は大變な失策でしたよ、全く中央政府に居る上官の云ふ通り、私は氣が違つて居たのですよ」市長は曖昧に「先何にしても仕合せです」と答へた、何が仕合せなんだらう、市長が前科者で無いと思つたのが仕合せか、其れとも蛇兵太が辭職する事に成つたのが

仕合せか、直に蛇兵太は言葉の尾に付き「イヤ仕合せにも不仕合せにも、全く私の見込違ひで有つたのだから強情を張る譯に行きません、何うでせう私の密告状の届く前に、本統の我、瓦我が其の筋へ捕へられて居たのです」

本統の我、瓦我が其筋へ捕まつた、あゝ其様な事が有り得るだらうか、斑井市長は失ほど初めて密告の事を聞いた時よりも又一入驚いた、手に持て居る筆が自ら卓子の上へ落つて轉がつたけれど彼れは其れを取上げる力が無かつた、顔は勿論土色である、爾して唯だ「オヤー」と呟いた、蛇兵太「ハイ全く捕まつたのです、兎に角我、瓦我は妙な悪人ですよ、其筋の調べに依ると牢を出て間も無くダイン地方で何とか云ふ僧正の家へ入つて窃盗し、其の翌日又、其附近の野原の中で、十一二になる子供を捕へて追剥同様の不埒を働いたと云ひます、其の頃から今まで凡そ八年の間何處へ行つたか少しも分らず、何でも今度捕まれば無論終身懲役ですから自分でも餘ほど用心したと見え、何うでせうクロチエと云ふ片舎田へ隠れてゐたのです、其れが妙な事から捕まつて到頭舊悪が露見する様に成つたのです、何しろ彼れは既に廿年ほどの刑を経て居るのですから最う何處の裁判所へ持つて行つた所が終身刑の外に宣告の道は有ません、今丁度アラヌ地方の裁判所へ連れ出されて居るのです」市長の顔色は唯悪くなる許りだ。

二五 不思議な次第

本統の我、瓦我がアラスの裁判所へ引出されてゐるとは、何と云ふ不思議な次第だらう。斑井市長は怪しまぬ振で怪しみ、聞かぬ振で聞いた。

蛇兵太は語り續けた「其の事實を初めから申しませう、今申したクロチエの田舎に數年前から住んで居る馬十郎と云ふ獨身の老人が有るのです、取るにも足らぬ貧しい者ゆゑ、誰も其身許などを問ひもせず、只だ日雇などに雇ふて遣る位の状態で有りましたが、數ヶ月前に此者が或家の果物を盗んで賣つたのです、直に露見して、警察へ引立てられました、折から警察の留置所が普請中で有りました故、假りに未決監へ入れました、所が其監に居た一人の前科者が其馬十郎の顔を見て、確に二十年前にツーロンの獄で見受けた我、瓦我に違ひ無いと云ふのです、若し此言葉が事實ならば警察だけの處分では濟まず正式の裁判に附す可き筈と爲ります故、直に諸方の心當りへ人を派遣し、我、瓦我を見知居る者を二人まで喚び出しました、爾して馬十郎の顔を見せ、ますと二人とも確に我、瓦我だと云ふのです、此二人も我と同じ頃ツーロンの獄に居た奴ですが、是で三人の證人が出來たのです、最早や三人の口が揃ふ上は其の以上に躊躇する所は無く、直に

警察から裁判所へ移しました、丁度其の時です、私から、貴方を我、瓦我だといつて密告したのは、其れだから中央政府の上官達は一も二も無く私を狂人だといひましたが、私は如何にも残念に堪へず、多少の抗辯を試みましたけれど、外に眞實の我、瓦我が捕まつて居ると云はれて、最う争ふ言葉が無く、其れでも初めて念の爲に其の我、瓦我を見度いと思ひ、アラスの警察長官に宛てて手紙を認め、何うぞ此の蛇兵太をも證人の中へ加へる事に取計らつて呉れと頼んで遣りました、直に其頼みが旨く運び、私はアラスの豫審官から呼出されて、先日其の豫審廷で出馬十郎と顔を合せたのです、私は馬十郎の顔一目見て自分の失策を悟りました、其時迄も心の底では未だ貴方を我、瓦我だと思つて居りましたが、駄目ですよ、本統の我、瓦我の顔は全く悪相です、貴方の様に紳士らしい所が少しも有りません、私は最う我を折つて正直に證言しました全く此の馬十郎と云ふ者が昔の我、瓦我に相違ありませんと、彼れには確に獄に居た頃の我、瓦我の面影が其儘に残つて居ます。

「是れで四人まで口が揃つた故、幾等彼れが強情でも最う強情は通りません、けれど彼れは流石に我、瓦我ですよ、言ふ事が實に旨い、通例の男なら其れは必ず人違ひでせうとか、私は我、瓦我で有りませんか、種々の事を言立て係官の心を動かさうと勉める所ですのに、彼れは唯だ

「私は馬十郎だから馬十郎だと云ふのです」と答へるのみです、爾して呆れた様な顔をして時々「驚いた」「本統に驚いた」など云ひます、其事が如何にも誠しやかです、何しろ我、瓦我は十九年も牢に居て、四度まで脱獄を企てる奴ですから通例の囚人とは違ひます、其の言ひ方の旨いので益々、私は我、瓦我だと見て取りました、兎に角、今は最う公判廷へ移されたのですから、先刻も云つた通り終身懲役に極つて居ますが、私は最う一度證人として今度の公判廷で證言をするのです」

班井市長は此物語りの間忙しそりに帳簿を繰返しつつ、其様な無駄言は聞くも蒼蠅いと云ふ容子であつたが、猶ほ帳簿を見詰めたまゝ、氣の無い聲で「其の公判は何時ですか」と問ふた。蛇兵太「公判は明日です、私は今夜の馬車で出發するのです」市長は前と同じ調子で「公判は長く掛りますか」蛇兵太「證據が揃つて居るのでから無論一日で済ませよう、私は自分の證言の済み次第に歸つて来る積りですが、多分宣告は、遅くとも明夜でせう、明後日に延びる事は先ありません」市長は顔を簿書から離し、最う用は無いと云ふ風で蛇兵太の顔をみた、けれど蛇兵太は立去らぬ、市長は更に促す様に「貴方は未だ何か、私へ御用がありますか」蛇兵太「ハイ最初に申上げました通り、何うか私の免職せられます様に中央政府へ申達書を認めて戴きたい

のです」市長は起立した、爾して異様に眞面目な聲で云ふた「蛇兵太さん、貴方は官吏として極めて方正な極めて正直な方です、此の私を我、瓦我と思つて告發成さつたのは、何にも自分で思ふ程の甚い落度ではありません、辭職とか免職とか云はず、依然として留任なさい」蛇兵太は極りの悪い様な目をして市長を見「イ、エ、何うも私は氣が済みません」市長「でも其の告發と云ひ落度と云ふは唯だ私一身に關した事ですから、私が落度で無いと云へば、落度では無いのです」蛇兵太「イ、エ、私は日頃から、人に厳しくする通りに自分の身にも厳しくせねば成らぬと信じて居ます」感心な言ひ分である、市長は又異様に考へつゝ「では熟考して置きませう」と云つて丁寧に手を差延べた、けれど蛇兵太は之を握らぬ「私は最う市長に握手する資格が無いのです」彼れが職務と云ふ資格を重んずる状態は是で分かる、彼れは首を垂れ、恭しく辭儀をして「私は後任者が定まる迄出勤しませう」と云遺し、來た時と同じ様に打委れて去つた。

彼れ若し市長の手を握つたならば、殆ど死人の様に冷いのに驚いたゞらう、市長の手の中には今は活たる人の心は無い、彼れは耳を澄して蛇兵太の立去る足音を聞いて居た。

二六 難場の中の難場

耳を澄して蛇兵太の立去る足音を聞いて居た此の斑井市長が、其實以前の我、瓦我であるとは讀者の既に察して居る所だらう。

彼れがダインの野原で子供の銀貨を盗んで以來、何の身分に成つた迄の次第は略ぼ分つて居る通りである、彼れは心を入れ替へた、全く墮落の谷底から自分の力で善人の峰の頂上に攀ち登つたのだ、然り自然の力である、とは云ふ者の限り無き彌里耳僧正の高徳が彼れを感化したとは云ふ迄も無い、彼れの心にも今でも彌里耳僧正の心が宿り、彼れの目には僧正の面影が見え、彼れの耳には僧正の聲が残つて居る、實に一個人の誠心が能く他の一個人を感化する力は、何れほど強いやら計られぬ。

彼れは唯だ彌里耳僧正を手本とし、僧正の様に身を持ち度いと期して居るのだ。

之が爲に彼れが今まで積んだ艱難辛苦は何れほどであるか知れぬ、其上に彼れは慈善善根をも重ねた、爾して漸く今の自分の地位を作り出したのに、舊惡の報ひが猶ほ亡びぬのか、蛇兵太の様な者があつて、彼れの身に纏はつて居る、のみならず、他の人が我、瓦我と誤認せられて終身

の刑に處せられ掛けて居るとは、何と云ふ奇妙な廻り合せだらう、天は到底此の人に人間並の安樂と云ふ事を許さぬのだらうか。

蛇兵太の立去つた後に、彼れは唯だ默然として考へて居たが、其中に毎も病院へ行つて華子の見舞に行く刻限とは成つた、彼れは異様に落着いて居る、先簿書などを片付けて、徐に立上り病院を指して行つた、多分落付いて居る譯では無いのだらう、餘り心が騒ぐ爲め思案する力もなく唯だ日々の仕來りに従つて、するとも爲しに此様な事をするのだらう。

自分が眞の我、瓦我であるのに、他人が我、瓦我と認められて、必然終身刑に處せられんとし居るのを黙つて見て居る事が出来るだらうか、と云つて其人を救ふ爲には、自分が今の地位を捨て今返の事業を捨て、其人と爲り代らねばならぬ、ア、十九年の永い懲役に服し終つて纔に八年又も其の苦役に歸り生涯を獄の中に埋めねば成らぬだらうか、如何に悔悟して善人とは云へ、如何に彌里耳僧正の感化を受けて居るとは云へ、一身に取つて此様な大事件がさう容易に思案せられやうか、一時間や二時間で、何で心を定めることが出来るものぞ。

心は未だ定まらぬけれど、彼れは先病院に行つて、彼れの顔は暗く曇つては居るけれど、人の心の底を悟られる彼れではない、多分は必死に自分を制して居るのだらう、頗て彼れは華子の枕

許に坐したが、華子は彼れが傍に居る間は全く病苦をも忘れる様である、其れも無理はない、華子が彼れの徳に感じたのは、彼れが僧正の徳に感じたに比す可きである、彼れも亦、華子の枕邊に居る間は心が悠々と解けて居る様に見える、毎もは三十分ほど話して去るのだけれど此日は三十分経つても去らぬ、四十分、五十分、到頭一時間ほど留まつた、華子の深く喜ぶ様子が其の衰へた顔に見えた

其間に彼れは醫者にも逢つた、看護婦にも逢つた、醫者は云ふた「時々刻々に衰へます、最う永くはありません」と、之れを聞いて彼れの顔は亦一入曇つたけれど、其れは少しの間であつた看護婦に對して彼れは様々の注意を與へたが、其主意は總て親切に華子の心を慰めてやれと云ふのであつた。

華子への親切は娘小雪を連れて来て、逢はせてやるが第一である、華子は二度までも小雪の事を問ふた、二度とも市長は答へた「ナニ直に参りませう」と、彼れは自分で華子からの委任状をまで持つて居るのだ、全く直々出張して連れて来る積りで有つたけれど、今と爲つては其様な事が出来るだらうか、一方には身に降掛つた大の事變が有る、そうして一方には此の小雪の事、實に難場の中の難場である。

けれど彼れは其色をみせず去つた、来た時と同じ様に静かに歩んで外に出たが、道に兼て知る馬車屋が有る、彼れは之に立寄つて、一日に五十哩を歩き、翌日直に五十哩を歸るほどの違つた馬車があるかと問ふた、重い荷物をさへ積まづ一人乗の極軽い馬車を引かせるならば其れだけの道を請合ふ事が出来る馬が有ると馬車屋は答へた、彼れは満足した容子で「では其れを借りる事に仕やう之れは二日間の賃金だ」とて許多の金を與へた、馬車屋「併し旦那、馭者が一人附けば其れだけ重く成りますが、貴方は馭者無しに、御自分で馬車を操る事が出来ですか」と問ふた、市長は「出来る」と答へ、更に「では明朝の四時半までに私の家の前へ着けて置いて下さい少しでも時間が遅れると困るから」と言ひ渡した、四時半と云へば何人も起き出でぬ中である、彼れは此馬車を用ひて何處へ行く積りだらう。

二七 永久の火

全く難場の中の難場とは斑井市長の今の身の上で有る、世の中に此様な辛い事情が又と有り得やうか。

獄中に送つた十九年は夢として、其後の艱難辛苦、眞に身を粉にする程に働いて唯だ人の爲を

のみ計り、漸く今の身分に推し上げられたのに、又元の我、瓦我に歸らねば成らぬ事に成つた、アラスの裁判所へ自首して出るのは明日の中である、明日の夜を過せば、我、瓦我で無い人が我、瓦我として終身の刑に處せられるのだ、而も又一方には、汪多堞の宿屋から少女小雪を引取つて来て死にかけて居る其母華子に逢はさねば成らぬ。

何から何う運んで好いか、未だ思案も付かぬ、けれど兎に角早い馬車が要る事だけは確だから一日に五十哩行て次の日に五十哩歸る駿足の馬と車を雇ふ事にはした、爾うして我家に歸つて来た。

此様な時には、何でも心と身體とが確で無くては成らぬからと、先づ充分に夕飯を喫し、其の上で二階の居室に閉ち籠もつた、茲で能く思案するのだ、先づ考へて見るのに、到底自首せねば成らぬだらうか、イヤ必ずしも爾で無い、此身を誠の我、瓦我だと疑ふ者は廣い世界に蛇兵太の外には無い、けれども彼れは既に疑ひが解け、其の非を悔ひて自分から免職して貰ひ度いとまで願つて居る、此まゝに抛て置けば彼れ此土地にさへ居らぬ事に成つて了ふのだ、或は是れが天の配劑ではあるまいか、何も此身からさう仕向を譯で無いのに、自然に我、瓦我の身代りが現はれて、此身を疑ふ唯だ一人の證人は此通り消えて了ふ、全く此身に運があるのだ、天が此身を助

けて居るのだ、此身は唯だ知らぬ顔で、今までの通り日々の事務を取居れば好い、さすれば無事太平の斑井市長で生涯變る事は無い、其れなのに、何を苦しんで、此の天の恩に背き、再び我、瓦我と云ふ我身さへ身震ひのする様な浅ましい昔に歸つて、此身を終身刑と云ふ地獄の底に埋めやう、出来ぬ、出来ぬ、其れは出来ぬ。

とは云へ、今までの艱難辛苦は何の爲ぞ、唯だ罪に汚れた一身を洗ひ清め、善人として我が心を救ひ度いのみである、汝、魂を入替よ、生れ替はつた様な人と爲れ、是れが肝に刻んだ彌里耳僧正の誠めである、今若昔しの我、瓦我に歸らねば、生れ替はつた人とは云はれぬ、善人で無い依然たる悪人の魂である、魂を入替へた所が何處にあらう、眞成に我心を救ふには、我身を永久の地獄に落さねば成らぬ、人の目からみれば之れは墮落、天の目からみれば之れが復活である、生れ替はつたのである、身の極樂は心の地獄、此世の榮耀は永遠の墮落である、破滅である、彌里耳僧正は此様な榮耀の墮落を求めよとは誨へなんだ。

「好し、最う心は極まつた、此身は義務に従はねば成らぬ、自首して彼れを救はねば成らぬ」と市長は叫んだ、叫ぶ聲が、思はずも口に發して自分の耳に響いた。

彼れは靜かに立つて卓子に向ひ、整理す可き書類などを整理し初めた、豊ならぬ取引商人へ送

る筈の請求書などは悉く焼き捨て、彼の顔は異様に美しく輝いて居る、眞に善心が内に満ちて、自ら外に現はれると云ふ者だらう、是が昔の我、瓦我だとは恐らく誰も信じ得まい、彼れは室の一方にある小抽斗から財布を出し、有金をも計算した、銀行に宛て差圖の様な書類をも認め、最う爲す可き仕事を爲て了つた。

此とき夜の十二時の鐘が鳴つた、彼れは唯だ夜の寒さを感じる外に、何の感じも無い、心は茫乎と鎮まつて自失したのだ、彼れは夢中に歩む人の様に燠爐の前に行き、燃残る火に炭を加へ、其前に身を置いた、眠るかと思れば眠るで無い、餘り心を疲らせた反動が來たのだらう、物を考へる力も無い、唯だ昏々として絶へ入る様な状態であつたが、斯る中にも自分で自分の心の、次第に消えて行くを感じた、是では成らぬと幾度か自ら勵まして、遂に卒然として驚き立た。

「ハテナ、何事を考へて居たのか知らん、爾うだ自首して出るに決したのだ」と呟いた。

之れと共に又様々の事を考へ廻したが、強く心に浮かんたのは華子の身の上である、「ア、可哀想に」嗚呼眞に可哀想である、可哀想との此一念が又今までの一切の思案を破つて了つた、危い哉、危い哉、彼れは全く局面の一變した様に感じた、イヤ自首する前に猶ほ考へて見ねば成らぬ、待てよ、待てよ、自首して我が魂を清くすると云ふも、生れ代つた人間に成ると云ふも矢

張り我が一身の爲ではあるまいか、自分と言ふ一身はそれで氣が済むとしても、他人の身の上は何うだらう、自分の外に他人の身をも考へねば成らぬ。

畢竟此土地の繁昌するものこの班井があればこそだ、此身が此土地になく成れば、繁昌の中心がなくなるのだ、土地の魂が消えるのだ、今までの我が工業で富んだ人も、再び貧しい境涯に陥るは無論の事、我身の去ると共に、土地總體に貧苦と窮厄とが推寄せて來る、土地が再び墮落する、ア、唯自分の一身を清く仕たいが爲に斯うも多くの人の難儀と爲るのを知らぬ顔で見過して成らう者か、若も自分が今茲で自首の心を翻へし、自分の身は永久に亡びやうと墮落しやうと何うでも好いとして、今から十年の間、市長の職を勤め續けたなら何うで有らう、千萬圓の財産は容易に出来る、その千萬圓を以て慈善の道に費せば、恩に浴する人は何れ程と云ふ數が知れぬ、土地は益々繁昌する工場も増し仕事も殖え、幾千の家や家族が富榮えて幸福を得る事も出来る盜坊も盜を止め、詐欺師も詐欺を廢し、墮落に身を賣る女も無ければ身を持崩す少年も無く、風俗は厚くして人情も改まり、社會の少からぬ部分が樂園の様になり、其影響は四方にも後世にも廣がつて無窮である、本統に世に對する功德とは是である、何うして此の鴻大な世の功德が自分一身の魂や心の爲に捨られやう、自分は死して後、永久の火の中に投ぜられ、限り無き苛貴

を受けても好い、此世を救はねば成らぬ。

全く彼れの心は翻へつた、自首はせぬ、何處までも斑井市長で推し通さねば成らぬ、現に天が此身の爲に身代りの人まで作り、斯うせよと示して居るのだ、是をするには、最う自分が昔し我瓦我で有つた事を心の底から忘れねば成らぬ、是れで初めて男らしい見が定まつたと、彼れは何だか嬉しい程に感じ、又も立て小抽斗の所に行き、小さい鍵を取出して壁の隅にある秘密の押入の戸を開いた。

此中に彼れが昔の記念として、彼の出獄の時に着て居た我、瓦我の着物と杖と帽子と革袋とを納つて有る、之が有つては我、瓦我と云ふ事を思ひ出す種だから、先之を焼捨ねば無らぬ。彼れは此品々を押入の中なる箱の底から取上げた、取上げて能く見ると、流石に今昔の感に堪へ兼ねてか、我れ知らず身が震ふた、けれど彼れは最う怯まぬ、見る其の目先に、又何か轉がつて落た物が有る、是れは銀貨だ、彼れがダインの野原の中で、足に踏附けて奪つた子供の物なんだ、彼れは又身を震はせつゝ今度は煖爐の火を眺めた、此品々を焼捨るには充分の火が燃て居る、けれど何だか氣が後れる、何うも焼く程の勇氣が出て、彼れは三度室の中を見廻した、室には彼れの此振舞を見張つて居る物がある、其れは彌里耳僧正から與へられた彼の銀の燭臺である、若

し彼れをして到底其の昔を忘れ得ざらしむる者であるとすれば、其れは昔し着た着物や帽子などでは無く、此の燭臺なんだ、彼れ此の燭臺に照されて何うして今思ふてゐる様な事が出来やう「ア、先づ此燭臺を鑄潰して只の地銀の塊に仕て了はねば可けぬ」と彼れは呟き、今まで取上げて居た着物を放し、燭臺の許に歩み寄つた、爾して先づ其の一個を取り其の尖の一端を以て、煖爐の火を突き起した、思へ、彼れよ、此燭臺を焼潰すは、其の良心をまで焼盡す者にはあらぬか

二八 天國の惡魔地獄の天人

單に少しの間である、十分とも經ぬうちに銀の燭臺は鑄けて固塊とは成つて了ふのだ、我、瓦我の記念は之で焼盡されて了ふとも、心に存する記憶は揉潰す事が出来るだらうか、彼れ斑井市長は出来ると信じて居る、縦し出来ぬとも出来させねば成らぬのだ。

之が危い頂點である、燭臺は彼れの手に在る、火は煖爐に焰々と燃て居る、誰れも火と燭臺との間を遮る者は無い、彼れは決心した、最う叫呼と叫ぶ暇も無い、此時忽ち彼れの耳に、呼ぶ様な聲が聞えた「我、瓦我、我、瓦我」聲は何人が呼ぶのでも無い、唯だ自分の心の中から發するのだ、彼れは此聲を聞いて毛髪が逆立た、何者に呼ばるゝとも是れほど恐ろしくば感ぜぬ、彼れは

聞くまじとする力も出ぬ、聲は自ら響き渡るのだ。「出来した、出来した我、瓦我、燭臺を燒盡せ彼の僧正の事をも忘れよ、爾して汝の身代りに立てゐる馬十郎と云ふ老人を亡ぼして了へ、彼れは自分の身に何の罪があるやをも知らず、唯我、瓦我と云ふ汝の名の爲に捕へられ、裁判の言ひ渡しを受けて生涯を苦痛と恐れの下に埋めん、汝に取ては此上も無き幸ならずや、斯くして汝自身は善人として世を渡れ、市長の位地を失ふ勿れ、汝は響をも得て榮もせん、身を富ませ人を富ませ、貧者を恵みて孤兒を救ひ、世の恩人と尊はれよ、汝は其れで正直なり、幸も有らん、歡びもあらん、其汝が其の歡びに酔ひ、其の幸に浮かびて、何不足無く榮え行く間に、牢の中には一人の罪も無い老人が、汝の名を負ひ、汝の赤い衣服を着け、汝の鐵鎖を腰に纏ひて絶望し悲鳴せん、汝は之が快きか、定めし快きことならん、嗚呼、汝よ、悪人よ」

市長の前額には脂汗が玉を爲した、彼れは魔はれた様な眼で燭臺を眺め詰めた、けれど心の中から叫び立つる聲は、彼れの耳に響いて止まぬ「嗚呼汝、我、瓦我よ、世間の人は異口同音に汝の功德を稱すならんも、唯獨り、汝の外に何人にも聞えざる聲の有りて、絶えず汝の耳に來り、汝の罪を鳴らすならん、能く聽け汝、此世に施す汝の功德は、如何ほど盛なりとも、天に達せずして地に落ちん、然り久しからずして地に落ちん。唯だ汝の罪を鳴らす其の一個の聲のみは天

に登りて神の耳にまで響くならん、汝此聲を如何にするや」一句は一句よりも高く聞える、只初めの中のみは自分の神經のする業と思つたが、果は室中に響く様に思はれて、彼れは我れ知らず戰慄し「其處に居るのは誰れだ」と聲を出して問ふた。

我が聲さへも日頃の我が聲で無い、全く物凄く響き帯びて居るけれど勿論室の中に誰れも居る譯では無い、彼れは其れと氣が附いて又聲を發して今度は大膽の様に打笑つた、自分で自分の恐ろしさを笑ひ消すのだ「何だ馬鹿馬鹿しい、此室に、己の外に誰れが居るものか」イヤ誰れも居ぬ譯では無い確に誰か居るのである、併し其人たるや人間の目には見えぬ、見えぬとも見える人よりは恐る可しだ、彼れを金縛りに縛るのだ、彼れは燭臺を持直して元の通り棚の上に置いた。爾して力無げに室の中を歩み初めた、幽霊の歩むのが多分は此様な状だらう、足が地に着いて居るやら居ぬやら分らぬ。

嗚呼、悲しい哉、彼れは再び不決定、無決心に立返つた、自首して出やうか、自首せず、今の決心を推通さうか、彼れの心は最初此室に閉籠もつた時の通りに迷ひ、且つ紊れて居る、一歩も進んだ所が無い、彼れは唯煩悶し懊惱するのみである。

斯くの如くにして午前の三時まで室の中を歩んだ、けれど決心は來らずして唯神經の昏亂する

のみである、善人と爲るには地獄にも等しき牢の底に沈まねば成らぬ、此世の天國を支へんには心を罪に固めねば成らぬ、地獄の底の天人か、天國に棲む悪魔か、初めの中には、我身に身代りの出来たのが天の救ひの様に思はれたのに、今は、其の身代りの有る爲めに此の身は地獄の底に落ちねば成らぬ、何だとして其の様な身代りなどが現はれたらう、是れが全くの運の盡きと云ふ者か如何なれば運命は此の身にのみ此の様に辛く廻つては來るのだらう、其れも若い身空なら兎も角も、此年に成つて再び暗い牢の底に、刺の莖、鞭の雨、到底堪へられる所で無い、今の地位今の名譽は、唯だ一人の何處の馬の骨とも分らぬ者の爲に、惜氣無く投げ棄てやうと作りはせぬ何うして是れが決められやう、其を決せねば成らぬ様な境遇に立たされるとは運命が無理だ、非道だ、恨んでも恨み盡せぬ

彼れは遂に疲れ果てた、歩み罷んで椅子に凭れた、眠るとも無く眠り込んだ、夢に入つてまでも様々の恐ろしい事に攻められた、爾して夜の空氣の寒さにフト目を覺して見ると金をも鎔すばかりに燃えて居た煖爐の火は、早や灰に蔽はれ、蠟燭も燃えて燼に残つて居る、最う何時だらう早や五時である、閉ぢることさへ忘れて有つた窓の戸が、曉風に煽られて居る、彼れ之を閉づる爲に窓に行つた、永い冬の夜の、五時とは云へど未だ空は明け放れて居ぬ、天は曇つて星の影さ

へ見えぬ、けれど此時、戸表の方に何やら異様の物音がする様に聞えた、彼れは猶ほ半夢の心地で首を差延べて下を見た。

見ると何だか星の様な光りが二點、地の表に輝いて揃いて居る、是れは昨日の夕方に彼が必ず朝の四時半迄に我が門口へ廻して置けと註文した其の馬車で、光るのは馬車の硝燈である、けれど彼れは其れと知らぬ、全く其事を忘れて居る、彼れは呟いた「ア、天には星の光りが無くて却て地の上に其れが有るのだ」偶然の言葉とは云へ天國の悪魔、地獄の天人と云ふ今の境遇に當るのでは有るまいか、呟く中に蹄の音が、愈々明かに聞えた、彼れは初めて馬車の來たのを知つた併し未だ、自分が誂へた事は思ひ出さぬ「ハテナ此暗いのに何者が馬車など乗るのだらう」獨語する折しも下から誰か上つて來て此室の入口を叩いた「旦那様、旦那様」音の主は兼て雇ふてある老女の聲だ 市長「何事だ」老女「馬車が參りました」市長「馬車が、何の爲に」老女「昨日貴方がお命じ成さつたと申しまして」昨日此身が其様な馬車などを、イヤ命じた覺えは少しも無いと云はんとして、忽ち腦の中に稻妻の差込んだ如く思ひ出した。

恐ろしい現在の位地が一時に悉く彼れの心に浮んで出た、彼れは何と返辭す可きやを知らぬ老女は返辭の無きを怪しみ「何と申して遣りませう」相變らず返辭が無い、暫く待つて「何かの

間違ひでせうか」市長「イヤ間違ひで無い、直に此方が降りて行くから待たせて置け」直に行く
とて、未だ思案が定まつて居ぬ。

此朝、此町へ入込んだ一番の郵便馬車が、町の入口で一輛の軽い小馬車と衝突した、小馬車は
何處か破損だらしいけれど其中に唯一人の外套に纏つて乗つて居る其の主人は、餘ほど急ぎの用
事と見え、殆ど衝突にも氣の附かぬ如く走らせ去つた、郵便馬車の馭車は驚いた「何だつて那の
様に急ぐだらう」勿論此の小馬車の主人は班井市長であつた、彼れ何の様な思案を以て、何處を
指して行つたのだらう。

二九 運命の手

市長は何處へ行くだらう、小馬車は矢の如く飛んで居る。

彼はアラスを指して行くのだ、アラスの裁判所には、彼の身代りに立た不幸の男が公判に附せ
られて居る、今日中に宣告せられるのだ、宣告は無論終身刑なんだ。

此者を救ふ爲か、救ふのは裁判所へ出て自分が誠の我、瓦我だと自首せねばならぬ、彼は昨夜
から悩み苦しんだ結果、終に自首すると云ふ事に決心したのか知らん、イヤ必ずしも決心したと

云ふのでは無い、唯何と無しにアラスの裁判所まで行つて見度いのだ、行つた上で裁判を傍聴し
我が身代りに立つた馬十郎とやら云ふ老人の顔をも知り、裁判の容子をも見ねば氣が済まぬのだ
宛も夏蟲の火の光に引かるゝ如く、我にもあらで身を危険へ引附けられるのだ。

人の身の上には、全く思案に餘る様な大難題がある、彼の現在が即ち其れなんだ、此世の天國
に居て悪魔と爲らんか、牢と云ふ活ながらの地獄に落て天人と爲らんか、幾ら思案したとて思案
は附かぬ、けれどアラスへも行かずに、知らぬ顔で済まして居る事は爲し得ぬ、兎も角もアラス
へ行き度い、行けば行く道で何とか思案が附くだらう、或は傍聴して居る中に、誰か善き智慧を
授けて呉れるかも知れぬと、此様な、頼みには成らぬ事が彼れの頼みだ、最う此様な頼みの中に
自分の分別としては少しも無い、眞に傷々しいほど憫む可き有様とは成つて居る。

朝の凡そ八時頃に彼れはヘスチンと云ふ驛に着いた、二時間餘りに七里ほど馳せたのだ、馬は
流石に馬車屋が受合つた丈け、未だ汗もかゝぬ、けれど秣でも與へねばと、但有る宿屋の前に留
まり店先にゐる馬丁を呼んだ、馬丁は指圖を聞き、烏麥を持つて来て馬に與へつゝ、フト怪しむ
様に俯向いて車を見、眉を擡めて「旦那は此車で遠くから來らつしたか」と問掛けた、市長「七
里ほど馳せて來た」馬丁は「エ、エ」と驚いた、市長「何を其様に驚くのだ」馬丁「車の幅が

二本折つて、心棒も曲つてゐます、能く無事に來られました、最り一里とは行かれませんが、」扱は今朝郵便馬車と衝突したときに毀れたのだ、市長「オヤ其れは困つたなア、何處かに馬車を直す者は無からうか」馬丁「丁度隣が馬車屋です、其主人を呼びませう」とて直に主人を呼んで來た市長は之れに向ひ「直に此の馬車を修繕する事が出来やうか」馬車屋は損所を檢めて「今日一日掛ければ出來ます」一日掛つてはアラスの裁判に合はぬ、市長「其れでは困る最つと早く」馬車屋「一日より早くは出來ません」市長「多勢の職人を掛ければ」馬車屋「幾人掛けてもです」市長「では之に代る車は有るまいか」馬車屋「有つた所で、旦那の様な亂暴な乗り手に貸すのは眞平です」市長「イヤ有れば、借るのでは無い、買取るのだ」馬車屋「其れでも出來合は無いのです」市長は氣を燥つた、彼れの間は後から後からと矢を繼ぐ様に口から出た、「お前の家にもくとも何處かに出來合が有るだらう」馬車屋「有りません」市長「形は何の様なのでも好い」主「有りません」市「古いのでも好いが」主「其れも有りません」市「誰か一個人の持つてゐるのでも譲つて貰ひ度い」主「此土地には其様な人も無いのです」市「代價は幾等でも出すのだから」主「何うも、無い者は致し方が無いのです」市「何の様に捜しても」主「ハイ何の様に捜したとて」市「では到底、今日の中に旅を續ける事は出來まいか」主「ハイ何うしても一日茲にお

泊り成すつて此馬車を修復する外無いのです」市「何としても」主「ハイ何と致しましても」市長は是だけ聞いて心の重荷を卸した様に感じた、馬車が損じて、到底今日中にアラスへ着く事の出來ぬとは、是れが天より我身を遮る者では有るまいか、此身は何としてもアラスへ着く積りだのに天が許さぬ、天が此馬車の輻を折つた、天が此身を引留るのだ、此身に自首を許さぬのだ。今日一日を此土地に留まれば裁判は済んで了ひ、此身の身代りは爲つて了つて、此身は市長の儘で勤続する外は無いのだ、何も此身の所爲で無く、天の所爲だ、責任は天に在るのだ、市長は何だか天に謝し度い様な氣に成つて、仕方が無いから一日を此地に留まり、爾して馬車を直させると云ふ氣に成つた、彼れの身代りに立つて居る不幸な男は、可哀相に全く天から見捨られたのだ。

最う何としても仕方が無い、市長の自首は罷り、裁判は確定する、是が天の配劑と云ふ者なら何だか人間の腑に落ち難い配劑の様にも思はれるけれど、市長の腑には落ちた。

若し此事が人通りの爲の野原でも在つたのなら、是きりで終つたらうが、茲は宿場だから市長と馬車屋との問答の間に多數の人が立つた、其中に居た一人の小僧が市長の熱心な容子を見且は其の「代價は幾等でも拂ふから」と云つた言葉を聞き、何か思ひ附いた事のある態で立去つ

たが、頓て市長が天の配劑と見極めを附け、やをら馬車から降らうとする所へ一人の老婆を連れて歸つて来た、老婆は市長に向かひ「只今此の小僧から聞きますれば、貴方は馬車をお求め成さると云ふ事ですが、全くで御座いませうか」此の問ひを聞いた許りで市長の前額には汗が出た、ヤツと自分を放つて呉れた恐ろしい運命の手が、又も後から己れを捕へに來たのでは無からうか彼れは答へた「馬車を買ほうと思つたけれど此土地には何處を捜しても賣る馬車が無いのだから止めました」老婆「イ、エ私共に、丁度お賣り申して好い不用の馬車が有りますよ」愈々運命の手が再び市長の背に達いた。

三〇 聞けば子守歌である

馬車の毀れたのが天の配劑ならば、代りの馬車の無いに極つた處へ代りの馬車の現れたのも天の配劑だ、市長は老女の言葉を聞き全く顔の色を無くした。

けれど、老婆が馬車を持つて居ることは事實である、馬車が有るならば行かねば成らぬ、此土地に一日を暮す口實は無い。

無論、馬車屋も、宿屋の者も、行かれてはお客を失ふのだから、口を極めて老婆の馬車を非難

した「那の様な物は馬車では無い」とか「全で毀れ掛けて居る」とか、思ひ附く丈の故障を並べたけれど輪が二個揃つて居て其上に人の乗る所が有つて、馬に引かせる様に成つて居るから、幾等古くても馬車は馬車だ、市長は老婆の云ふが儘に價を拂ひ、買取つて之れに乗り、爾してアラスの裁判所を指して進んだ、成るほど馬車と言ひ兼ねる程の馬車だから其の途中で困難の多かつた事は記し切れぬ程で有るが、其れでも日の暮頃にアラスから七里と言ふ所まで推し寄せた、茲まで來ると流石の名馬も疲れ果て、此上の進行が覺束無く思はれる状とは成つたので、更に一頭の馬を雇ひ、其の馬丁を道案内にし、二頭引として走らせたが、道譜請の爲に、道で無い野原を迂回せねば成らぬ所なども有り、夜七時に至つて未だアラスに着かぬ、市長は馬丁に問ふた「アラスまで最う何里ある」と、馬丁は答へた「最う三里です、八時には着きませう」八時が九時まで掛つても進む外は無いのだから、又益々急がせたが、併し市長は怪しんだ、八時に着いて、裁判の間に合ふだらうかと、孰れ裁判は晝間から開かれるので、我が身代りに立て居る馬十郎とか云ふ老人の犯罪は單に果物を盗んだ丈の事だと云ふのだから、其の調べは纔に二三時間に済んで了ふだらう、事に依ると今頃既に済んで居るかも知れぬ、爾すれば此様に急ぐのも無益だ。

無益でも急がねば成らぬ、我れは我が出来る丈の力を盡し、爾して間に合ぬのなら、其れこそ

は神の御心で、神が何うしても馬十郎を我が身代りと爲して了ひ、此身を助けて下さるのだ、運を神に任せて急がねば成らぬ、彼れ馬十郎が果物を盗んだ罪は簡單でも我、互我と云ふ嫌疑は簡單で無い、或は此の嫌疑の爲に、何の様に裁判が長びかぬとも限らぬ、夜の九時十時までも、開廷して居るやも知れぬ。

彼れの心は、様々に氣遣ふて、四方八方に馳せ廻つた、けれど彼れは毛頭も、故と馬車を遅くすると云ふ氣は出さなんだ、全く急がれる丈け急がせた、急がせて果して裁判の間に合ふか何うだらう。

間に合ふたならば何うなるだらう、間に合はなんだなら何うなるだらう、之れは唯だ神のみ獨り知り給ふ所である。

市長が斯くも跪いてゐる間に、病の床に臥してゐる華子の景状も亦憐む可きである、市長が煩悶し懊惱して明かした夜に華子は苦しげな咳のみして明かした、翌朝はズツと容體が悪い、受持の醫師は診察した後で、看護婦を次の間に呼んで命じた「後ほど市長がお出に成つたら、直に私を呼んで下さい、市長に報告せずには置かれぬ容體です」と、併し市長の來る筈は無い、市長は

此時アラスの裁判所を指し、馬車を走らせてゐるのだ。

華子自身も唯市長の來るのが頼みらしい、彼女は苦しい息の下より幾度も看護婦に問ふた、「最う何時です」と、毎日午後の三時には市長が來る、華子は只管に三時を待つのだ、其うちに漸く三時の鐘は鳴つた、華子は寝返る力も無かつたのに、此の鐘の音に寢臺の上に起き直つた、爾して入口の戸をジツと眺めた、市長が來れば誰よりも先に其の姿を見認め度いので有らう、彼女は暫し病苦をさへ忘れたのか、衰へた顔に、折々に笑が見える、唯斯く誠ある人を待つ間のみが彼の女の天國であるけれど、市長は來ぬ、凡そ甘分ほど経て、起きてゐる力も盡きたのか其身を横たへた、爾して時の經つに従ひ、悲しげに咳をするのである。

四時も過ぎた、彼女は遂に斷念めた様に、細い聲で呟いた「最う一日限りだのに——明日は此世にはゐないのに、今日來て下さらぬとは、餘りだワ」と、彼女の目は、最う此の世の光が見えることは少く、次第に冥府の光が見えて來たのか、其中に咳も稍や止み、虫の泣く様な聲で何やらん謡ひ初めた、聞けば子守歌である、昔し娘小雪を抱いて謡つたのであらう、其後は今日が日まで歌を謡ふ様な折は無かつた、最う心が恍惚して、殆ど夢路に入つてゐる、多分は小雪を抱いて寝かし附ける夢でも見て居るのだらう、夢とは云へど眠つて居る譯では無い、其聲の優しい中

に得も云へぬ悲しみが有る、室の隅に聞いて居る看護婦は思はず涙を催した、聲は段々に細つて行く。

餘り市長が遅いので、看護婦は其の屋敷へ人を使はした、頓て使ひの女が歸つて来て室の隅で看護婦に細語いた、市長は今朝早く馬車に乗り旅行して、行く先は能く分らぬが、明日で無くては歸るまい、何も留守へは言置いた事が無いと、此細語が聞えたのか、眠つた様に見えて居た華子は忽ち聞き咎めた「市長さんが何う成つたと云ふのです」誠を聞かせて、明日で無くば歸らぬと云つては何れほどか失望するだらう、看護婦は當惑した、けれど看護婦と云ふ如き慈善の業に委ねる身が眞逆に病人へ嘘を聞かせると云ふ様な罪の深い事は出来ぬ、直に寝臺の所に行つて慰める様に「市長さんは旅に出られたと云ふ事です」華子は合點が行つた様に、且は嬉しさに堪へぬ様に、又起き直つて「オ、本統に親切な市長さんです、小雪を連に行つて下さつたのです、是で私は必と病氣が直りますよ、オ、嬉しい、小雪が来るなら私は素直にお薬も戴きます貴女のお言葉を守ります」と云ひ、看護婦の氣遣つたとは反對に、全く心も引立つた如く、手を擧げて天を拜んだ。

嗚呼、世に、子を思ふ親の心より誠なる者が有らうか、人は之が爲に病み、之が爲に癒ゆ、親

子の情は人間の命の綱である、華子の玉の緒は唯だ此の綱に繋がれるのだ、若しも市長が小雪を連れずして歸つて来る様な事でも有れば何うだらう、華子の命は其の時に盡くるのでは無からうか。

三 重懲役終身に

此夜、華子の許へ回診に来た醫師は、華子の容體の變つて居るのに驚いた、今朝見た時は殆ど晩まで持つだらうかと氣遣はれる程であつたのに今は熱も下り呼吸の調子も揃ふてゐる、其上に常人の心に何か嬉しい所の有るかの様にも見える、全く市長が我娘小雪を連れて来て呉れる事を信じ、其の喜びに全身が力を得たのだ、心の引立つた爲に一時病を忘れたのだ、但し何時まで忘れてゐる事が出来るだらう。

其は扱置き市長の馬車は遂にアラスの町に着いた、丁度夜の八時で有つた、市長は或る宿屋の前で、馬車を卸り、賃錢を拂うて、馭者と第二の馬とを歸し、自分の初めから雇ふて来た馬は、自分で引いて其宿屋の馬屋へ預けた、此時まで彼れは無言で有つたが、初めて口を開き馬屋の番

人に問ふた。「何うであらう此馬は、明朝直に又旅行の役に立つだらうか」と彼は、来て匆々に早歸る言を考へてゐる、番人は答へた「餘ほど疲れてゐますから二日は休まねば成りませぬ」と

市長は直に宿屋の店に行つて又問ふた「郵便馬車の出る所は何處だらう」と、此頃の郵便馬車は旅客の便乗を許したから、彼は其れに乗る積なんだ、頓て店の者に案内せられて郵便馬車の出發所へ行き「明朝フアメールの方へ立つ一番の馬車は何時だ」と聞き、午前の一時だとの返辭を得て更に其馬車に便乗が出来ると問ひ未だ一人分だけ空席が残つてゐると聞きヤツと安心した如く、其れでは其の空席を約束する」とて即座に代價を拂つて了つた、斯うして置けば間違ひは無い、嗚呼何ぞ彼れの所行、逃支度に似たるの甚だしきや、急ぎの用の爲に此地へ来て未だ一言其の用事には及ばずして、先づ歸る事を苦勞してゐる、彼は歸る事が出来る者と信じてゐるだらうか、自分の身代りの馬十郎を救へば自分の身は何うならうとも知れぬ、自首して出る人が先づ歸りの用意とは聊か不審と云はねば成らぬ、是で見ると彼れの心は未だ決してゐる譯では無い、今日一日馬車の中で考へた筈なのに、昨夜一夜、我家で考へ明した時と同じく、何の決定にも達せずして唯裁判所へ行つて見る心か知らん、眞に全く運を天に任すと云ふより外に彼れの量

見は出来てゐない。

彼は是より徒に市中を徘徊した、多分裁判所を探してだらう、探したとて、知らぬ土地で分る答が無い、誰れか人に問へば好いのに、彼は誰れにも問はぬ、随分問ふ可き人に逢ふのに嚴重に口を塞いでゐるは、心が進まぬのだらうか、此様にして天運を待つのだらうか、けれど遂に問うた、其れは充分に四邊を見廻した上で、提灯を提げて来た一人の老人に向かひ「此地の裁判所は何處でせう」と、問はれた人は親切だ「裁判所は今普請中で、假に市廳の樓上を充てゝあるのです、市廳は丁度私の行く方角ですから一緒にお出なさい」と答へた、市長は此人の後に就き無言で歩んだが、幾丁か行くと、二階の窓に燈火の指してゐる大きな建物の前に出た、其の人は告げた「ア、貴方の仕合せです、未だ裁判が開けてゐます、アレ二階の燈を御覽なさい、那れが假の法廷です」と云ひ、更に「貴方は證人ですか傍聴ですか」と問ふた、市長は口籠りつゝ「ナニ辯護士に用事があるのです」と、聞えぬほどの低い聲で答へた、是で見ると彼は自分が茲へ来た事を誰にも知られ度く無いと見える、自首するならば直に世間中へ廣がるのに、今更何を氣兼ねるのだらう。其人は又云ふた「オ、辯護士の溜りならば眞中の階段を上つて行けば好いのです」彼れは言葉に従つて内に入り眞中の階段を登つたが、上の廊下で辯護士らしい服を着けた人

に逢つた、直に問ふた、單に「未だ終りませんか」と、辯護士は何事と問返しもせずに

「イ、エ終りました」

「終りました」の一言が市長の耳には何の様に響いたやら、彼れは思はずも「エ、エ」と叫んだ。

早や裁判が終つたのか、馬十郎は我、互我の身代りとは成つて了つたのか、辯護士は此叫び聲の鋭さに氣が附いて「ヤ、貴方は被告の親戚か何かですか」市長「イ、エ、何にも關係は無いのですシテ宣告も済みましたか」辯護士「無論です、何も宣告だけを延期する謂が有りませんもの」市長「矢ツ張り其れでは重懲役に」辯護士「爾です、重懲役終身に」

廊下の燈光が暗くて此時能く市長の顔は見えなんだのは幸である、彼れは咽喉をでもメめられ様な聲で、殆ど聞き兼ねるほど低く「愈々當人に違ひ無いと……イヤ人違ひで無いと定まりまして」辯護士は蒼蠅さげに「ナニ人違であるの無いのと云ふ問題は初めから無いのです、極明白な事件で、陪審員とても唯だ豫謀の有つたと云ふ點に不同意を唱へた丈です、何しろ彼女が自分の兒を殺したのは確實ですから、故殺として終身です」何だか話が齟齬してゐる様でも有る。市長「エ、彼の女？では女ですか」辯護士「無論です、貧家の妻が自分の兒を殺したので、私

の辯護を托されたのは此事件丈ですが、貴方は別の件をお尋ねですか」市長は曖昧に「イ、エけれど終つたなら何故那の室に未だ燈火が點いてゐますが」辯護士「それは其の次に今から二時間ほど前に開廷した別の件です」市長「エ、別の件、別の件、何の様な」辯護士「是れも極簡單ですよ、詰らぬ窃盜の類でせう、何でも前科者だと云ふ事で、何とか云ふ六かしい名の老爺ですが、其顔を見た丈で、有罪と分つてゐます」此件だ、此件も、此件が我が身代りたる馬十郎の公判に極つてゐる。市長「傍聴が出来ませうか」辯護士「イヤ満員の様ですから、誰か出て來る人の有るのを待つて其人の代りに入る外は有ますまい」市長「何の戸口から入りますか」辯護士「彼許の最も廣い戸口から」と、言捨て辯護士は去つた、僅の間の問答では有つたけれども市長は辯護士の一語一語に火水の責苦を受ける様に感じた、爾して最後に、未だ馬十郎の公判が終らずにあることを合點し得て、深い深い息を吐いた、けれど其の息が安心の爲に出たか當惑の爲に出たかは自分の心にも分らぬ。

三二 合議室

急ぎ急いで來た甲斐が有つた、先づ馬十郎の公判の間には合つた。

間に合つたのが嬉しいのか、悲しいのか、市長は自分で自分の心が分らぬ、間に合つたからとて直に傍聴席へ行かうともせぬ、行つたとて傍聴席は塞がつてゐると今しも辯護士が告げた、誰か中から出て来る人を待ち其人の代りとして入込む許りだと是れも辯護士の注告であつた、爾すれば益々彼れは早く、傍聴席の出入口に行き、中から来る人を見逃さじと見張つてゐねば成らぬ筈だ。

けれど彼れは爾うはせぬ、未だ廊下や辯護士溜りの邊を徘徊して、徒に人の噂などを聞いてゐる、勿論裁判所の事だから、夜とは云へ其處此處に多少の人が群つてゐる、互に話す所は裁判の事ばかりだ、彼れは其等の言葉を聞集めて兎も角も馬十郎なる者が、果物を盗んだと云ふ本の嫌疑は證據の無い爲めに晴れたけれど、餘分に起つた前科者と云ふ嫌疑の爲に殆ど通れ難い場合に迫つてゐる事が分つた、既に證人の陳述や檢事の論告も一通りは済んで、是れから辯護士の辯論に移ると云ふ所らしい。

是れだけ分れば最う此上に聞合せる箇條は無い、直に傍聴席へ這入らぬと云ふ譯に行かぬ、彼れは詮方なくと云ふ状で傍聴席の入口に進んだ、茲には警吏が立つてゐる、彼れは問ふた「入る事は出来ませんか」警吏「出来ません」市長「誰れか出て来る人は無いでせうか」警吏「有

りません、今休憩が済んで戸を閉ぢた所ですから、最う裁判の終るまで此戸は開きません」市長傍聴席に空席は無いのですか」警吏「ハイ一席も無いのです」扱は斯く傍聴席の満員と無つてゐるのが、天の助けでは有るまいかと又思ふた、天の助けを頼む外に助かる可き道が無いのだから自然に心が其の方へ向くのである、彼れは歎息して去らうとした、警吏は又云ふた「お待ち成さいよ、裁判官の席の背後に、特別席が三個だけ空てゐます、けれど是れは公職を持つた人の爲に裁判官が殊更取除けて有るのですから、官吏で無い人は仕方が無いのです」扱ては官吏ならば入れるのだ、市長は官吏では有るまいか、市長の職は公職では有るまいか。

警吏は此人が甚く屈托してゐる状を見て「官名を肩書にした名刺を裁判官に送れば多分入れて呉ませうけれど」誰れかの名刺でも貰つて来いとの意味が分かる、けれど市長は其意味を悟り得ぬのか、充分には聞取らぬ振で茲を去つた、爾して悄々と舊來た廊下へ引返し、階段を下り初めた唯彼れは非常な思ひで數十里の道を故々來て、今は傍聴席の塞がつてゐる爲に空しく歸つて行くの不知らん、其で心が濟むだらうか、傍聴席は塞がつてゐるとしても、必ずしも入込む道の無いで無い事は警吏の言葉に分つてゐる、彼れは一段下りては考へ、考へては又降り、終に階段の中程へ來た、茲から降る道が左右二筋に分れてゐる、彼れは右にも左にも降り得ぬ、暫く欄干に

凭れて、前額に手を當てたが、前額には脂が漲つてゐる、彼は靜かに紙入を取出した、其の中
から名刺を出した、爾して其の表面へ鉛筆で何やら認めた、何うしても彼は立去り得ぬのだ
裁判官に名刺を送つて特別席に入れて貰ふ氣に成つたのだ。

此名刺を以て再び彼は警吏の前に引返した、警吏は彼は待たせて置き、内に入つて名刺を
裁判官に取次だが、裁判官は其の表面を見て聊か意外の思ひを爲した容子である、一モント・リ
ウルーの市長斑井、此名は數年來、徳望の附驥として此土地へまで聞へてゐて、誰とて尊敬せぬ
者はない、裁判官は此人の來臨を得て、職務の上に光榮を加へた様に感じた、卓子の影から其名
刺を同僚の手から手に廻し、終に檢察官の手にまで傳はつた、孰れも恭々しく點頭く様に見えた
頓て裁判官は自分の名刺を出し、其表に「敬意を以て」と記入し警吏に渡した、警吏は之を持つ
て来て市長に渡し、謹んで「御案内致しませう」と請じた、市長の運命は是で定まつた、最う躊
躇する餘地がない。

彼は警吏に隨つて中に入つた、警吏は彼れを横手の方へ導いて又廊下を過ぎ又戸を開き、餘
り廣からぬ一室へ入れ「茲が裁判官の合議室です、此室の戸を開けば裁判官の背後へ出られます
」と言ひ一禮して立去つた、市長は合議室の中に唯一人立つた、見廻せば室の眞中に卓子が有つ

て其上に二個の燭臺を立て、蠟燭の火が低く燃えてゐる、是れ此室で、幾多の人の運命が天秤に
掛けられて決せられたのだ、其の事務に能く似合ふ様に室の中は莊重で且何となく陰氣である、
彼れ自身も今は運命を天秤に掛られてゐる者では有るまいか、天秤の傾く所は死か活か、彼れ自
らも知らぬけれど、之を思ふと、急に總身が剛ばつて、彼れは進みも退きも得せぬ、若し進んで
戸を開けば、今彼れの身代は死活の境に彷徨ふてゐる公判廷である、彼れ若し耳を澄まして聞け
ば我、瓦我と云ふ彼れの名も聞えるだらう、彼れの舊惡を數へ擧ぐる聲も、引續き聞えるに違ひ
無い更に彼れの身代りに立つて、言ひ開きの立たぬ爲め絶望に呻吟する馬十郎の聲が聞ゆる様な
事も有れば彼れの耳には何の様に響くだらう。

公判の恐ろしさは、彼れが今も猶ほ忘れ得ぬ所である、唯だ戸一枚を隔て、其恐ろしい公判が
進行してゐるかと思ふと彼れは又氣が挫けた、イヤ挫けたでは無い、餘りの恐ろしさに何も彼も
打忘れた、彼れは最う考へる事も出来ぬ、彼れは昨夜から二十四時間の餘り、一片の麴も喰べず
全く身體を營養する道を絶つて、而も心を施風の如くに擾亂してゐる、是れが人間の堪へられる
事では無い、彼れは何の感じも無かつた様に、室の一方に立つたまま、只だ感んでゐたが稍あ
つて、目に着いたのは、公判廷へ入行く所に在る戸の引手である、手擦れて光る眞鍮の其色が、

異様に眼を射て、彼れの痺れ掛けた神経を攪亂させた、彼れは漸く我に復る心地のすると共に、先立つたのは恐れである、此の引手を一つ廻せば、我、互我の裁判せられる所だと、唯斯う思ふ一念の恐ろしさに、忽ち身を躍らせて、初めに入つて来た戸の方に振向き、之を開いて元の廊下へ逃出した、彼れの此舉動は殆ど發狂の間際と云ふ者では無からうか。

三三 傍聽席 一

運命とは何であらう、目には見えぬけれど、目に見える繩の様に、人を金縛りに縛つて了ふ。一旦之れに縛られたら、自分で自分の心に従ふ事が出来ぬ、唯運命の爲すが儘に弄ばれる計りだ、今彼れ斑井市長の如きが即ち運命に縛られてゐるのだ、十重にも二十重にも、彼れは合議室から公判廷に入る戸一枚を開く事が出来ぬ、開かうとして却て逃去つた、爾して又も廊下を、狂ふ獸の如くに馳回つた、此様に逃たとして、逃果せる事は出来ぬ、矢張り運命に縛られてゐる、馳せて、馳せて、殆ど根の盡きたるは稍や半時も経つた後である、彼れは冷たい壁に凭れて聲を出さずに叫んで、悔しがつた、自分の耳に降下る運命の餘り邪慳なるを恨んだけれど其の邪慳に従ふ外に何の道も無い、彼れは身も心も全く頼れた、力が盡きて、悄げ返つて、今

度は踰越きつゝ、又も合議室の方へ引返した、宛も警官に抵抗して、力盡きて遂に捕へられた罪人が餘儀無く引立てられて行く様な者である、彼れは運命に抵抗したのだ、到頭力が盡きたのだ、爾して厭々引立てられて行くのだ、運命の手は、人の心の中に入つて技をするのだから、目には見えぬ力が強い、本統に恐る可しだ。

再び合議室に彼れは入つた、今度は最う躊躇せぬ筈であるけれど、彼の眞鍮の引手が目に光ると共に躊躇した、身震ひした、此の引手に手を掛けるのが、即ち地獄の戸を開くのだと思ふと、何うしても手が延びぬ、宛も狼に睨まれた小羊が狼の目から眼を離し得ぬ如く、彼れは引手を見詰めたまゝで立つた、斯の如くにして又幾時を空しく過す事やらと氣遣はれたが、其中に怖れをも何事をも忘れた如く引手に手を掛け、運命が彼れを騙るのだらう、恐らくは自分が引手を握つた事さへ知らぬだらう、斯くて其戸を引開けて中に入つた、中は廣い公判廷である、最う茲に入る以上は聞えたとて仕方が無い、實は聞える餘地も無いのだ。

彼れは我が背後の戸をメめて後、初めて我身が最後の修羅場に入つたことに氣附いた、彼れの身は機械の如しだ、心あつて動くでは無く、動く外は無い様に推附けられて動くのだ、彼れは立つたまゝ、傍聽席を眺めたが、満目唯霧の籠めた様に、満耳唯響きに埋められた様に、視ても見え

ぬ聴いても聞えぬ、渾々とし漢々として暗の様な景色が横たはるのみだ、立つ中に霧は、次第に人の顔と爲り、響きは個々の聲と爲つた、ア、判事もある、検事もある、辯護士も警吏も傍聴人も、居るは居るけれど、單に總體が一團と爲つて人間に最も無情な法律と云ふ者と、天道の最も厳格な裁判と云ふ者を、實物の上に描き出してゐる、是れほどの物凄しい感動が又と有らうか、彼れは又機械的に腰を卸し、見廻し、又見廻したが、此の總體の大感動が、場中の唯一點に集注してゐる、判事の下横木の前に、左右から二人の憲兵に挟まれて一人の男が立つてゐる、満場の中心は是だ。

此の男が彼の男である。

市長は此の男は見はせぬ、此の男が直ぐに市長の目に見えた、市長の目に前以て此男の立つ所を知つてゐたかの様に一直線に其の所を射て其の所に定まつた、市長は他人を見る心地がせぬ、自分で自分が裁判官の前に引出されてゐるを見る様だ、成るほど姿と容とが自分と同じ事である但し今の自分は富貴の爲に立派である、彼れは裏れてゐる、自分は若やいでゐる、彼れは老いてゐる、自分は髪を撫附けてゐるけれど、蓬々たる彼れの頭髪は自分が艱難した頃と何の相違も無い彼れの垢づきたる襤褸の着物は、今より八年前、其身が十有九年の獄中で深く心に刻み込

んだ人間に對する恨みと憎みとを以てダインの市に入込み、宿屋の戸を叩いた時と殆ど同じ者である。

斯う思ふと市長の身には、ゾツとする様な厭はしい念が頭の上から足の爪先まで滿ち渡つて、ア、此身は再び此の男と同じ境遇に立返らねば成らぬだらうか。

此の男は最早や六十歳以上にも見える、顔が粗末で、痴鈍で、爾して痛く恐れを帯てゐる、人間の堪へ得る境遇とは思はれぬ。

裁判官は斑井市長の入つて來たを知つて、恭々しく黙禮した、中に檢察官は一兩度フアメールへ出張して市長に言葉をも交へた事が有る、恭々しさの中に、是れ見よがしの親しさをも加味して黙禮した、市長の方は是れ等の歓迎が充分には心に移らず、何事も唯夢やら現やら判り兼ねる様に感じた。

是れ夢か、是れ現か、裁判官の状、書記の状、憲兵の状、傍聴人一同が物知り度げに被告の顔を差覗く状、總て其身が昔し引出された法廷の景状の通りである、ア、夢で無い、自分の身が現實に此の景状に立返らねば成らぬのだ、自分の罪を自首する爲に此裁判所へ出たのだから、再び法廷に立つ外は無い、法廷に立つ其次は宣告されるのだ、其次は牢に入るのだ、其次は、ア、其

次は、次第に心の移り行くに連れ、殆ど全く忘れ掛けてゐた二十七年前より以來の物事が面たり見る様に目の前に浮び出た、彼は見まじとて目を閉ぢて、爾して本心の底から打叫んだ「決して」「決して」と

決してとは、決して再び此の景状には立返らぬと決心したのである、何うして其の恐ろしい境涯へ、此年に成つて立返る事が出来る者か、決して、決して、其れは出来ぬ、自首と云ふ事は最う根こそぎ取消した。

とは云へ彼れは物狂はしい程に心が苦しい、彼れの目の前には彼れの自身とも云ふ可き者が、彼れの恐れる其境涯に立つてゐて、其の境涯と押陥される所である、其者は彼れの本名を以て我瓦我と呼ばれてゐる、自分の生涯の最暗黒な歴史が自分の影身に依り、再び實演せらるゝとは、是れが運命の悪戯と云ふ者だらうか、悪戯としては又餘りに無情である。

三四 傍聽席の二

思ひ出すさへ恐ろしい様な慘憺たる自分の履歴を、目の前に繰返して見せらるゝは、眞に運命の悪戯けである、自分の通りの我、瓦我が、昔し自分の立つた通りに裁判官の前に立ち、自分を

論告した通りの檢察官が我、瓦我の罪を數へてゐる、二十七年前の事が夢で今の此裁判が眞實だらうか、イヤ今のも昔のも眞實である、唯だ違つてゐる所は、昔し自分の裁判せられた時には、判事長の背後に置物が無かつたのに、今此の法廷には判事長の背後の柵に十字架が載つてゐる。ア、彼の時の裁判は神が照臨ましまさなんだ、罪の無い者を罪するとは、世には神は無いものかと疑つたが、今の此の裁判には確に神が照臨してゐたまふのだ、人の心の底までも見破つて明かに罪の有る者と無い者とを分ち給ふに違ひ無い。

市長は昔し我、瓦我が彌里耳僧正の寢室に忍び入つたとき、煖爐の柵の上に丁度此様な十字架の立つてゐた事をさへ思ひ出した、彼の十字架は、其の兩の手を差延べて、間違つた了見を憐む様に見えたが、今此の十字架も、間違つた了見の人に手を差延べてゐるのでは有るまいか、市長は自ら首が下つた、前にも殿めしい裁判の状を見、背後には此十字架を控へて、彼れは再び首を上げる事は出来ぬ、殆ど何人にも我が顔を見られまじとする如く、小さくなつて人の底に沈んだけれど裁判の恐ろしい景状が一々我が心に襲ひ入る事を防ぎ得ぬ、彼れは辯護士の辯論をも首を垂れて聴いた、之に對する檢察官の駁論をも聞いた、首を垂れ、目を閉ぢてゐる文に、却て其等の進行の容子が彌が上にも物凄く感ぜられる、時々耐へかねて顔を上げもするけれど、其度

に我が身代りに立つてゐる被告の見すほらしい淺ましい容子も裁判官の嚴めしい顔も、其の背後の十字架も我が爲に特に其の著しさを増す様に思はれる、其中に裁判長の聲として、被告に「何か申立てる事は無いか」と問ひ、被告が何も答へぬ爲め、更に念を推して「第一は汝は果物を盗んだか否や、第二に汝は我、瓦我であるか否やを答へよ」と言ひ添へる聲も聞えた。

被告は卒然として聲を發した、「私は鍛冶屋の職人です、巴里のパーブルと云ふ馬車屋に長い事雇はれてゐましたが、取る年で仕事の出来ぬ爲め放免せられ、其後は流浪同様の身の上です、日々の食ふ物が無い爲に、途中に落ちてゐた枝の儘の果物を拾ひましたけれど、人の垣を越え塀を破り庭や畑に忍び込んで、樹を荒したり盗みをする様な者では有りません、人に雇はれて世を渡るので、巴里の鍛冶屋パーブル氏へ問ひ合はせて下されば私が前科者で無い事は分ります、に、お役人の言ふには、其の鍛冶屋は破産して主人パーブル氏は行衛が知れぬと云ふ事です、其れでは最う私の身の證明を立て、呉れる人は無いのです、私が自分で前科者で無いと云つたとて無益です、檢察官のお言葉では、其方はフエポール地方に生れ、オーバルにゐる姉の家に育つたのだらうと仰せられます、自分で誰れの兒だか、何處に育つたか知りません、私の知らぬ身の上を檢察官は能く御存じです、私を、其方は我、瓦我だと仰せられます、或は私には其様な名

が有るかも知れませんが、誰れに附けて貰つた覺えも無く、自分で自分の戸籍を洗つた事も無いのです、小さい時は「此餓鬼」と人に呼ばれ、年取つてからは「此の爺」と云はれます、何れが本統の名だか分りませんが、自分では馬十郎だと思つてゐますが、若し何方にか取極めねば成らぬのなら、何うかお上で、篤とお取調べの上、何れでも、へい、宜しい方へお定めを願ひます」

此様な憐む可き者が又と有らうか、猶ほ其上に此者を、自分の身代りとし、自分で思ふさへ毛髮の逆立つ様な、重懲役の牢の中へ推落して濟むだらうか、市長は首を垂れたまゝ身動きもせぬ誰も氣が附かぬけれど殆ど生て居るか死んで居るか分らぬ程だ、檢察官は此の異様な陳述を聞き自分の研き立てた雄辯の結果も幾等か掻消される様に感じたらしい、直に立上つて判事長に向かひ「裁判官閣下、被告は愚人の眞似をして、何も彼も、怪しげな言葉を以て言ひ消さうとする状、實に驚く可きほど巧妙です、斯く犯罪の上に恐る可き天才を以て居る所が我、瓦我たる所以だらうと思はれます、彼れに非ずして誰が斯うまで明白な罪に對して猶ほ人心を惑はさんと勉めませう、本官は茲に彼の四人の證人を召出し、更めて被告の顔を見せしむる事を請求します」

再び四人の證人が呼出されるのだ、幾多幾十の證人よりも唯一人、動かす可からざる大證人の

此の場中に潜めることを誰か知るべき。

三五 傍聴席 三

馬十郎は馬十郎だ、我、瓦我では無い、けれど裁判の力と云ふ者は、豪い者だ、我、瓦我で無い者を我、瓦我にしてはふとして居るのだ、検事が呼出したと云つた四人の證人は即ち馬十郎を我、瓦我にしてはふ道具の様な者だ。

判事長は同意したらしい「併し念の爲に申しますが證人四人のうち巡查部長蛇兵太は先刻證言を済ませて後、公用が有るからと云つて、届出の上に既に退廷しました、今は残る三人しか呼出す事が出来ません」檢察官は立つて「では三人を呼出して戴きませう、ですが私は、茲に陪審員諸君の記憶を新にする爲め、先刻蛇兵太の陳述した證言を繰返します、彼れは明白に言ひました、此の馬十郎と自稱する被告は、馬十郎と云ふ名では無く、ツーロンの獄で五六回、脱走を企てた刑期十九年の囚人我、瓦我です、出獄の後に直に追判と爲つたのみならず、ダインの高僧の家へも忍び入つた疑ひが有ります、私は此被告に於て其の我、瓦我の顔を明かに認めますと、サア蛇兵太は此通り申したので、此の證言が残つて居る以上は再び彼れを呼出さずとも遺憾は無いと

存じます」證人の一人が斯く迄に云つたなら、今しも被告自身の言ひ立てし事は何だか嘘の様に思はれる、爾すれば、成るほど此被告が假忘けた様な事を云ふは、横着か知らん、外に言ひ抜きの道が無い爲め那の様な事を云ふのか知らんと、早聞く人一般の心に疑ひの曇が湧いた、何でも人と云ふ者は新に聞く方の言葉を餘計に信するのだ。

之れに引續き、三人の中の一人なる武ラバットと云ふ者が呼入れられた、是は馬十郎が留置かれた未決監の押丁で其の昔し五年間も我、瓦我と同じ牢に居たと云ふのだ、判事長は之に向かひ「證人武ラバットよ、汝は曾て破廉恥の罪を犯した爲め、今は法廷に於て正式に宣誓する資格が無いけれど天は猶ほ、憐れむ可き汝の心中に良心を残して有るだらう、汝は其良心に誓ひ、「誠實に自分の信する所を申立てよ、汝は此被告を何者と認めるのか」嚴かな言葉である、之に應じて證言する人の言葉に勿論偽りの有る筈は無い、武ラバットは、恭しくして「ハイ私は宣誓する資格の無いのを深く耻ぢ且悲しみます、けれど良心に誓つて、決して偽りは認めません、誰よりも先に此被告を我、瓦我だと看破つたのは私です、彼れはツーロン獄に居た頃より餘ほど年を取つて居ます、且つは心も老けて居る様ですけれど、我、瓦我自身に相違無いのです、彼れは獄に居る時から陰氣に鬱ぎ込んだ氣質でありました」宣誓の出来ぬだけに却つて其の言葉が宣誓をし

た證人の言葉よりも人を感じしめた、愈々被告は我、瓦我に相違ない様に見えて来た、次ぎに呼入られたのは今もツーロンの獄に居る終身囚だ、特に此事件の爲めに呼出されたのだ、名を仙ニルドーと云ふのだ、彼れも同じ様に良心に誓つた上、被告馬十郎の顔をば、親しげに眺め「私とは五年の間、同じ鎖に繋がれて居た我、瓦我です、切るに切られぬ間柄で有りましたもの何で忘れますものか」と云ひ、更に被告に向かつて「オイ兄弟、最う一度歸つて來ねえ、今度はお前も何うせ終身だらうから久し振で同じ鎖を引張り合つて稼ぐのも乙だぜ」と言ひ足した、被告馬十郎は唯だ呆れた状で「驚いた」と呟いた。

最後には、之もツーロンに居て今は或田舎で牧場の番人を勤めて居る古シエベルと云ふ男だ。同じ様に誓はせられ同じ様に被告の顔を見、「我、瓦我です、我、瓦我です、背の力の恐ろしい奴ですよ」と證言した、被告は、又も呆れた様に「驚いたなア」と獨語した。

武ラバット、仙ニールド、古シエベル、此三人の證言が揃ふて、其上に是等の囚人又は前科者とは違ひ巡查部長と云ふ嚴めしい官名の有る蛇兵太の言葉さへ一致してゐる、傍聽席には三人の證言が終る度に、呟き聲が波の様に傳はつた、是れは最早被告の辯解の道が絶えたと思つて人々が細語き合ふ、なんだ、全く被告は辯解の道が絶えた、是だけの言葉が揃つて、何で一人で言ひ

抜けられる者か、何れほど巧妙な辯解法を用ひたとて最う無益である。

判事長は被告に向かつて「其方は三證人の申立を何と聞いた、之に對して陳辯の辭が有るか」被告は相變らず呆れた状で「私は申します、ハイ唯驚きました」憐や彼れの言葉は是だけである驚いただけの一事で何で三證人の言葉が揉み消せやう。

傍聽席には再び細語きの波が起り今度は陪審員の席へまで傳はつた、陪審員が既に心を動かした上は最う馬十郎の運は盡きたのだ、決したのだ、彼れは我、瓦我として終身の刑に處せられたのだ、誠の我、瓦我は何うしたのだらう、聲も無く形も見えぬ、此席には居ないのか、憐む可き此老人を身代りに立て、逃去るとて自分の安全を喜んで居るだらうか、此馬十郎が我、瓦我として刑に服する以上は彼れ誠の我、瓦我は最う何處までも無難である、判事は徐に憲兵に向かひ「場中を静かにおさせ成さい、是にて本官は本件の概要を總括します」と云ふた、サア愈々公判が終るのだ、馬十郎の最後が來たのだ、此の時である、此の危急な一髪の際である、殆ど天から降る聲の様に、何處からと無く凄まじい聲が満場に響いた、何者、何事、何處、満場は唯驚いた聲は確に判事の背後にある特別席から發したのだ「證人の武ラバット、仙ニールド、古シエベルよ此の處を見よ、此の顔を見よ」裂帛の叫び聲とは此の悲壯な聲を云ふのだらう、裁判官も檢

察官も、陪審員も、辯護士も電氣の掛つた様に振ひ立つて、聲の来る本を見た、個は如何に其の處にはモント・リウルの市長斑井父老が冬枯れた寒山の如くに峭立して叫んでゐるのだ。

三六 傍聽席 四

人の心の根底には不思議な力が籠もつてゐる、其れは「善」である、是れが即ち「魂」と云ふ者なんだらう。

根底に「善」の力の無い人は本統の悪人だ、魂までも腐つてゐるのだ、斑井市長は何方であらう、彼れは曾て「魂を入れ替よ」と聖僧に説き諭された、自分でも其氣に成つた、眞に魂を入れ替た、昔の我、瓦我なら知らぬ事、今の斑井市長なら眞逆に心の底の善の力に勝つ事は出来ぬ。

彼れは廿四時間、種々に考へてゐたけかど、遂に愈々馬十郎が自分の身代りに爲つて了ふと云ふ最後の場合に至り、最早や知らぬ顔で看過す事が出来無くなつた、心の底から自分より強い力が卒然として湧いて来て、殆ど我れ知らずに叫んで我れ知らずに證人等の名を呼び「茲を見よ此の顔を見よ」と云つた、斯うなつては最う彼れは我、瓦我で無い、斑井市長でも無い、善の化

身だ、善其者だ。

何ぞ彼れの聲の神々として物凄き、何ぞ彼れの姿の超然として人間に異れるや、吁彼れの頭は霜より白き白髪のみとは爲つて居る、今朝モント・リウルを出發する時に多少の白髪は交つても大體は黒い髪で有つたのに、心の中の苦しみは少しの間に彼れの毛の色を奪つて了つた、能く昔から云ふ事だ、一夜の中に白髪になると、彼れは實に其の一例だ、顔は人間を離れて蒼く、頭は鶴の毛の様に白く、爾して手には帽子を脱いで持ち、首を前に突出して立つて居る。

満場の人は只彼れの方を振向いた、けれど未だ此の神々しい此の物凄しい此の白頭の一紳士が今の聲を發したのかと怪しむ人も有り、又怪しまぬ人とても何と無く此の人の大決心に打たれた状態で、一言の囁き聲をも發し得ぬ、眞に身を忘れる迄の大決心は人を啞の様にする力がある、判事長とても檢事とても、未だ何の事だか合點が行かず、何とするやの分別も定まらぬ、空しく目と目を見合すのみだ。

其間に、斑井市長は徐に自分の席から離れ、彼の三證人の控てゐる被告席の傍へ降りて行つた、誰も彼れも遮る者が無い、猛獸の前に枯草の自ら聞く如く道が開いた、殆ど憲兵さへも呆氣に捕れて居る、彼れは裁判官の正面、陪審官の前、被告と證人との傍に立つて、證人三人に向

かつて云つた「貴方がたは此の我、瓦我の顔を忘れましたか」三人は氣を呑まれてゐる、何とも云はずに唯首を動かした、無論見知らぬとの意味が其の動かし方に現れてゐる、其中の一人古シエベルの如きは軍隊でする様な最敬禮の姿をした、市長は續いて裁判官と陪審官とに向かひ「陪審員諸君よ裁判官閣下よ、此れなる被告を放免して、何うか私をお縛り下さい貴方がたの求むるは此の被告では有りません、私です、私が誠の我、瓦我です」

法廷の静かさは、呼吸する人さへ無いのかと疑はるゝほどである、萬人一様に此の斑井市長の此の誠の我、瓦我の、崇宏な行ひに壓せられたのだ、天然の景色にも崇宏な景色がある繪畫にも崇宏がある、人は眞の崇宏に接しては、物を云ふ事も出来ぬ、胸も迫つて聲も出ぬ、唯感に打たれるのだ、人間の行ひで眞に崇宏と云ふ可きは我、瓦我の此の行ひの如きだらう。

漸くにして判事長の顔色は先づ動き初めた、彼は裁判と云ふ重い職責に對しても、何とか云はぬ譯に行かぬ、彼れは我、瓦我の顔をつくつく見、彼は怒る可き筈である、爾して叱り附く可き筈である、けれど彼れの顔には怒りの色はなく、深い深い惘れみの色が動いた、彼れは更に同席判事の顔を見、次に検事の顔を見、最後に傍聴者一同に向かつて、柔かに「若し傍聴席に醫師のお方は有りませんか」と問ふた、ア、彼れは、斑井市長が發狂したのだと認めてゐる、勿

論彼れの地位として此の場合に斯う認むるより外に認め方が無い、直ぐに検事も立上つて「陪審員諸君、私は許らぬ事故の爲め、法廷が事務の進行を妨げられた事を悲しみます、然れども諸君は今茲に現れた此方が斑井市長だと云ふ事を御存じでせう、斑井市長を知らずとも市長の德行名望は兼てお聞き及びの事でせう、法廷を妨ぐる者には其れんの處分が有りますけれども、此の不幸な紳士、自分で自ら何事を爲しつゝ有るやを感じ得ずして、斯かる過ちに陥る不幸な紳士を、私は通常の場合と同一視するに忍びません、判事長閣下と同じく私も切に望みます、若し傍聴席に醫師が居合せば然る可く此の不幸な紳士に手當して、其の旅館へ送り届けるまで力を假して頂き度いのです」全く検事も發狂と認むる外は無いと見える、けれど我、瓦我は此言葉をも遮つた。

皆までは言はさず彼れは云つた、私は深く方々の厚意を謝します、けれど此の斑井市長、イヤ我、瓦我は發狂して居るのでは有りません、醫師のお手當に及びません、篤と私の云ふ所をお聞き下さらば發狂で無いことが分ります」彼れの聲は先程よりも落着いて居る、けれど先程よりも力がある。

三七 傍聽席 五

検事に對つたまゝ、我、瓦我は語を繼いだ「貴方がたは非常な過ちに陥らんとして居るのです
 早く之なる被告を放免なさい、私、私は自分の義務として打明けねば成りません、ツーロンに居た
 我、瓦我と云ふ不幸な囚人は私です、私です、私自身の外に此事實を知る者は有ませんけれど、
 上には天が見張つて居ます、私は自白するのが天への務めです、何うか私をお捕へ下さい併し
 私、私は申します、力の及ぶ限りは善を行はんと勉めました、我、瓦我の名を捨て、變名を用ひ、
 財産を作つて、市長にまで取立てられ、何うかして善人の仲間に入らふと其れのみ苦心しました、
 けれど、其れは到底出来ぬ事だつたと見えます、再び囚人の仲間へ歸らねば成らぬ事に成りました
 私、私が何の様な心で何をしたかは茲で申さずとも分る時には自ら分りませうが、全く私はダイ
 ンの高僧の家で盜賊をも働きました、其の土地の原野で、弱い少年に對し追刺をも致しました誠
 に私、私の様な汚れた者は、天を恨む権利も無く世人に忠告する資格も有りませんけれど、一言茲
 に云つて置きます、不幸が人を害するのです、監獄が悪人を作るのです、監獄に入れられる前は、
 私、私は無教育な農夫でした監獄が私を變化したのです、愚な田舎者が残忍な悪人と爲りました、

牢を出て後、幸に深い信切と寛大な恩愛を受けました爲め、人間らしい了見に立返る氣に成りま
 したが、全く苛酷な取扱ひは人を悪にし慈悲は悪人をも感化して善と爲します、イヤ斯様な事を
 申したとて何の事だかお分りには成りませぬ、私、私の家を搜索して下さらば今以て牢を出た時
 の我、瓦我の衣服と、彼の少年から奪つた其の銀貨とが有ります、是だけで私を捕縛なさるに
 充分でせう、エ、検事閣下は首をお振り成さる、未だお信じに成りませぬか、其れは餘り残念で
 す、何が何でも馬十郎とやら云ふ被告を罰しては成りませぬ、ア、三人の證人まで誠の我、瓦我
 たる私の顔を認め得ぬとは情け無い、若し蛇兵太が居て呉れ、ば、直ぐに認めて呉れますのに」
 とて眞に遺憾に堪へぬ如く法廷を見廻した、其の言葉と舉動とに現れた熱心なる誠意と傷々しい
 様な哀れさは唯だ想像が出来るのみだ、言葉に傳へることは逆も出来ぬ。
 見廻したとて蛇兵太は居ぬ、成るほど彼れが居たならば我、瓦我の此言葉を信じもするだらう
 我、瓦我は又見廻して忽ち思ひ付いた様に三證人に打向ひ「オ、武ラバットよ、お前は忘れたの
 か己と一緒にツーロンの牢に居たとき、市松格子に染分けた筒袴帛を懸けて自慢してゐた事を」
 武ラバットは驚いて我、瓦我の姿を頭から足まで見、全く恐れに堪へぬ如く戦慄した、次に我、
 瓦我は仙ニールドに向ひ「お前は腕に彫つてある自分の名前を消す爲に炭の火を浴び、其の焼け

痕が肩の下に残つてゐるでは無いか」仙ニールドは唯だ呆れて「ハテな、其通りだ」と呟いた、更に我は古シエベルに向ひ「お前は皇帝拿翁がカンに上陸した年月日を二の腕に彫附けてゐたが今でも一八一五年三月一日の文字が讀めるだらう、確に其の傍に黒子も有つた、ドレ左の袖口を捲くつてお見せ」古シエベルは何にも云はぬ、小兒の如く柔順に袖口を捲くり示した、直ぐに憲兵が燈を持つて来て其の腕を検ためた、明かに今云つた年月日の文字が讀めた、此時我、瓦我は傍聴者に對ひ又裁判官に對ひ、異様に笑んだ、其の笑の悲しげな状は、見た人の今も猶ほ眼に残る心地する所である、勝誇つた笑で、爾して絶望する笑であつた、吁不幸なる我、瓦我よ。彼れは其の笑と共に云つた「全く、御覽の通りです、私が本統の我、瓦我です、最う確です」茲に至つては最早全法廷に判事も無い検事も無い憲兵も無い、只此一個の點に集注した眼と、握り詰めた汗と、高く打つ動悸とのみである、誰れ彼れも自分の位地を忘れて我れ知らずの熱心な見物人と爲つて了つた、全く暗い裁判の上に明燈々の電光が閃き射た様な者である。合點すまじとても合點せずには居られぬ、名譽高く徳高き一世の慈善的事業家班井市長が前囚人の我、瓦我であつたのだ、罪無き人が自分の身代りと爲つて刑せられるのを、知らぬ顔で視るに忍びず、我が舊惡を名乗る爲めに故々茲へ出て來たのだ、此様な辛い悲しい行ひが又と有らうか、此様な

大なる犠牲が人を感動せしめずには止む者では無い、此の暫しの間の感動は全く人々をして呼吸を繼ぐ事をすら得ざらしめた。頓て我、瓦我が満場の静かさを破つた、「最早や、此上私は法廷の時間をお妨げ致しません、まだ捕縛の命令が下りませんから立ち去ります、仕末して置かねば成らぬ事務も澤山に有りますから併し何時でも裁判所の御都合の宜しき時に捕縛して戴きませう、私の住所は幾度かお出に成つた検事閣下が御存じです」是れだけの言葉を残し出口を指して進んだ、誰一人、手を出して彼れを遮らうとせぬ、彼れの前には、先ほど其席から下つて來た時と同じく自ら道が開けた、彼れが戸口まで近づくと、誰が開いたか知らぬけれど自ら戸が開いた、大決心の進む處は、到る所無人の境の如きである、彼れは戸を出んとして又振り向き、私は謹んで法律の命令を待つて居ます」と云ひ更に傍聴人の方に對ひ「皆様定めし憐れむ可き奴と思召ませう、けれど今の私は此事を隠さうと思案した時の私に比し羨む可きほど幸福です」實に爾であらう、さう無くては叶はぬ彼れは茲で殆ど大悟徹底した様な者だ、最う此後に何の様な事をしたとて又何の様な場合に落ちたとて迷ひ怖れる様な事は無いだらう、更に彼れは言足した「とは云へ、何方かと云へば一切此様な事柄の起らなんだのを、私は望みます」全く之が心の儘である、隠しもせぬ飾りもせぬ、彼

は神の退く様に退いて去つた。

一時間と経ぬうちに、何處の馬の骨、馬十郎は放免された、彼れは其の自ら云つた通り「本統に驚いた」世間の人が悉く気が違つたのかと怪しむ様な顔で彼れは引退がつた、此の彼れの放免が則ち本統の我、瓦我の捕縛さるゝ定めとは爲るのである。

三八 市長の就縛 一

我、瓦我は裁判所を出て何處へ行つたやら、夜の一時は此地を立つ郵便馬車へ、乗合の一席を買切つて置いたのだから、無論其夜の中に自分の市へ歸つたのだ。

既にして夜は明けた、茲は華子の臥して居る病院の一室である、華子は昨日斑井市長が、小雪を引取りに行つて呉れたのだと思ひ詰めて以來、病氣の苦しさを忘れられた様に静かになつた、或時は夢現の様な子守歌を謡ひ、或時は正體も無く眠りなどし、醫者の氣遣つた程の事も無く一夜を過ごした但し目の醒めて居る間は勿論、眠つて居る中とても絶間無く咳が出て、餘り末期の遠くないことを此咳が知らせて居るのでは無からうか。

看護婦長を務めて居る信切なる老婦人は華子の目の醒め次第に飲まず可き藥の用意に次の間で

瓶を拭ひなどして居たが、自分の背後に人の來た様に感じたから首を上げて振向いて見ると、青い顔して斑井市長が立つて居る「オ、市長様」と云ひ掛け、又忽ち驚いて「貴方は先ア何う成されました、お頭の毛が悉く白く成つて居ます」市長は此言葉が心に移らぬ容子である、老婦人は傍らの抽出から、醫師の診断に用ふる小さい鏡を出し「之で御覽なさいまし」と云ひ、頭の有様を寫して見せた、市長は唯だ「成るほど」と云つて、異様に笑んだのみだ、猶も心に移らぬ様な状である、爾して頓て問ふた「華子は何うしました」老婦人は直ぐに昨日よりの事を話し「子を思ふ親の愛ほど力の強い者は有ませんよ、貴方が小雪とやらを連れて來て呉れる事をのみ思つて、ズツと靜かに成つて居ます」市長「私を逢はせて下さい」老婦人「貴方は其娘を連れてお歸りに成りましたか」市長「私を華子にお逢はせ下さい」引立たぬ聲だけれど妙に固い所がある老婦人は小雪を連れて來たので無い事を察した「可哀相に華子は、小雪を連れて行つて見せずば直ぐにも何うなるか分りません、其れに先刻から眠つてゐる容子ですから、目の醒めるまでお待ち成さつては如何がです」

市長「待つて居る時が有りません」として早入口の戸に手を掛た。

市長は最う自分の背後に、事に由ると捕吏が迫つてゐる事を知つてゐる、斯る際にも猶ほ華子

を見廻るとは、何と云ふ優しい心だらう、併し老婦人は而うまで見抜く筈が無い、唯公務の爲に時間の乏しい譯だらうと思ひつゝ「華子に逢つて、小雪の事を何と仰有ります、直ぐに華子は聞ひますが」成るほど何と答へれば好いだらう、之には少し飽倦んだけれど「サア何とか其時に返辭が出るでせう」と云つたまゝ申に入つた、市長が病人の事に付き此の老婦人の言葉を推し切つたのは此時が初めてである。

中に入つて見ると果して華子は眠つてゐる、市長は拔足で枕邊に寄つたが虫の様な細い寢息にも一種の聞くに忍びぬ苦しい響きの有るは、肺と云ふ此の病氣の持前で有る、如何にも最う末期の遠く無いことが分つてゐる、市長の眼には見る中に露が光つた、而うして深い嘆息の聲も口に洩れた。

ア、何と云ふ傷はしい寝顔だらう、健康でさへ有れば、未だ花の盛りとも云はる可き美の絶頂を過ぎもせぬ年頃なのに、頭の毛は短く、齒は抜けて、頬の肉は抉り取た様に落ち、唇にも色が無い、全く社會の邪慳と云ふ事が歴々と刻み附けられてゐるのだ、強て昔しの面影を求むれば眠つた目を保護する様に蔽ふて居る長い緑の睫毛のみである、此の睫毛の底に、清い泉の様に安んじ居る眼には何れほどの悲しみが籠るか、何れほど愛を湛えて居るか知る人も無い、今は怪しみ

問ふ人さへも無い、唯其の深い愛、深い恨み、深い悲しみを汲み取るのは此の斑井市長一人では有るまいか、華子に千歳の知己が、若し有らば、唯だ此の市長では有るまいか。
恍として市長は哀れな此顔に見入つた、市長の心は今、華子の心の中に住んで居るだらうか、將た自分の心の中に棲んで居るだらうか、自分も無い、華子も無い、唯だ一種名状す可からざる悲愴の霧が兩人の間を閉ち籠めて冥茫として居るのみだ、人間の意氣は單に斯の如き際に相合し相通するのだ。

氣の所爲か知らぬけれど、華子の顔には次第に安心の光が現はれ、紅の色さへ幾分か復した様にも思はれる、若し此儘で永眠したなら、其身に取て此上も無い安樂な往生では有るまいか、恩人の手から可愛い娘を渡された夢の儘で天國に入る事が出来はせぬだらうか、けれど華子は目を醒ました、目を醒まして市長の顔を見た、嬉しげに且安心した様である、而うして其の唇から出た最初の言葉は「オヤ小雪」と最と軽く問ふたのであつた、無論恩人が連れて來て呉れて居る事と、確く信じて毛ほども疑ふ念は無いのだ。

「おや「小雪は」との一言は、疑ふて問ふのでは無い、信じて問ふのだ、故々市長が小雪を連れて来る爲めに旅行したのだもの連れて来て居ぬ筈は無い、確に連れて来たのだからもう茲へ現はれる筈だがと、華子は有難く思ふて促すのだ。

疑ふて問はれるよりも、信じて問はれるが辛い、市長は返す言葉も出ぬ、華子は、嬉しさに堪へぬ如く、淋しい顔に満面の笑を浮かめ「本統に貴方は御親切です、昨夜私は貴方の事ばかり夢に見ました、貴方の行く先々が目に見える様な気がしました、貴方の昨夜成さつた事は此上も無い功德です、神がお褒めに成りますよ、確に貴方の顔の上に毫光が咲いて居りました、ハイ私は此目で見ましたよ」妙に言葉が昨夜アラスの裁判所で自首した一條を指すが如くにも聞える。

是れは無論偶然である、華子は猶も嬉しさに夢中の状で言葉を續け「早く小雪を茲へ呼入れて下さいな、何故私に抱かせては下されません」まう七歳の子だから懐へ入れる事は出来ぬけれど母の心は矢張り自分が分れた時の通りの様な気がして居る、斑井市長は愈々返辭に困つて居たが丁度此處へ醫師が廻つて来た。

醫師は一目で様子を見て取り直ぐに市長の當惑を救ふた「イヤ華子さん貴方の容體が、ズツと落着かねば小雪を茲へ連れて来る事は出来ません」華子「では小雪はまう茲へ来て居るのですか」

醫師「ハイ」華子「来て居るなら、唯一目で好いのです、何で唯一目見せるのさへ悪いのです」醫師「ソレ其通り貴女は氣が立つて居るのですから、茲で小雪の顔を見れば又心が騒ぎ出し容易に熱が退かぬ事になります、何しろ熱が減ぜぬ事には、決して小雪に逢はせる事は出来ません、ハイ私が許しません、其れだから貴女は、何でも心を落つけて、何事をも思はずに、御自分で先づ熱を下げねば成らぬのです」華子は二言三言争ふたけれど頑として動かぬ醫師の言葉に終に我を折り「では心を落つけます、貴方の云ふ通りに能く養生して熱も退く様に致しますから、何ぞ小雪を見せて下さい」醫師「ハイ私が見て見ればなら大丈夫と思ふ時さへ来れば直ぐに小雪を抱かせて上げます」尤もらしく難場を切抜け、更に一應の診察して、看護婦長に然る可き差圖を残して立ち去つた。

後に華子は市長に對ひ、小雪の事を様々に問ひ廻した「小雪は何の様な着物を被て居ました」「何の様に養はれてゐましたか」「連れて来る道々で風でも引きはしませんでしたか」「まだ私の事を能く覚えてゐましたか」など、其れから其れと殆ど止め度も無いほどに見えたが、此とき病院の庭を過ぐる何處かの子供の、歌を唱ふ聲が聞えた、華子は懐かしげに「オ、あれは小雪の聲です、私の耳には確に聞覚えが有りますよ」市長「貴女は其の様に聲を出しては可けません、

益々咳が募りますから」全くの所、華子は自分の一語一語に咳き入る有様である、常人よりも聞く身が辛い。

けれど華子は猶ほ聲を止めぬ、咳きては語り、語りては又咳き入り或時は此まゝ絶え入りはせぬかと氣遣はるゝほどであつたが、其の間市長は絶えず何事かを考へ込み、華子の顔を見るよりも、眼を垂れて床を眺むる場合が多かつた、眞に彼れは降り積る身の難儀を考へて見ると、何から何う處分して好いか分らぬだらう、表面には何事をも現はさぬ様に勉めてはゐても自ら心の沈み込むのは無理は無い。

眞に彼れが心の底は千々に紊れてゐるのだらう、彼れは且聞き且思ひて、華子の言葉に一々は返辭も爲し得ぬ状とは爲つたが、此時忽ち、何の爲だか知れぬけれど、華子が恐ろしさに堪へぬ如く絶叫した、病み果てた身體に何うして是ほどの聲が残つて居たらう、のみならず華子の身は今まで寢返りさへ爲し得ぬ程で有つたのに、叫ぶと共に半起き上つて「アレ、アレ」と戸口の方に指さした、何を此様に驚き恐れるだらう、市長は靜に「華子さん何事です」華子は猶も戸口を眺めるのみだ、戸口は市長の背後に當つて居る、市長は怪しみつゝ徐に背後に振り向いたが、驚きの本は分つた、巡察部長の蛇兵太が戸を開いて入つて来て、今や市長の背後に立ち、市長の姿

を睨んで居る。

何の爲ぞと問ふ迄も無い、市長は知り過るほどに能く知つて居る、我身を捕縛する爲に來たのだ其れを華子は何かの仔細で自分を引立てにでも來た事と思ひ、其れが爲に驚き恐れるのだ、けれど華子のみで無く、此時の蛇兵太の姿を見る者は誰とても驚き恐れずには居られぬ、覺悟して居る市長さへも戦慄した。

四〇 市長の就縛 三

華子は蛇兵太の姿を見て、全く自分を引立てに來たのだと信じた、驚き恐れたは當然である、彼女は叫んだ「市長さん、市長さん、何うか私を助けて下さい」全く市長の助けを請ふ外は無い市長は靜かに傷はつて「ナニ其様に恐るゝ事は有りません、蛇兵太の來たのは貴女の爲では無いのです」斯く云ふ市長の爲なんだ、市長は更に蛇兵太に對ひ「貴方の御用向は能く分つて居ます」蛇兵太は大喝一聲「神妙に」との叱咤を以て之に答へた、其言葉は雷の如く室中を震はせた、眞に蛇兵太は其頑冥な心を以て、今は此市長を終天の敵の様に思つて居る、過去つた五年の間彼れは此市長を疑つて何れほど苦心したかも知れぬ、其の末に自分の疑ひが過ちだと信じて直接に

市長に對して罪を謝した、抑も罪を謝すると云ふ事か此蛇兵太に取つては千古の遺恨にも比す可きである、單に其職務の上の少しの落度や怠慢が有つてさへ自ら己れの身を許さぬ程の嚴重な男だから市長を疑つた其過ちの爲めに辭職する決心をまで起したのである、其れが今に至つて過ちで無かつたと分り、其身が捕縛に向ふ役廻りとは爲つたので、彼れは千歳の一遇とも云ふ可き程に思ひ、今までの恨を悉く之で晴らす氣に成つて居る、彼れは室の眞中に大山の如く衝立ち、市長の顔を睨みつけて貧乏揺るぎもせぬ、爾して再び叫んだ「サア早く立て來い」

勿論市長に向ひ吐く可き言葉で無いから益々華子は自分の事と思ひ「市長さん、市長さん」と泣聲を揚げたが、其中に蛇兵太は市長の首筋を捕へて容赦も無く引立てた、市長は抵抗もせず引たてられて力無く首を垂れた、蛇兵太は心地好げに嘲らつて「何だ市長さんだと、市長など云ふ者は茲には居ぬ」最う無論市長では無い、單に一個の我、瓦我だ、前科者だ、譯者も之からは再び彼れを我、瓦我とのみ記さねば成らぬ。

漸くにして我、瓦我は、願ふ様な聲で「コレ蛇兵太、」と云ひ掛けた、「蛇兵太ではない、巡查部長さまと云はねば」我は敢て言葉などを争はぬ「部長様、貴方へ内密のお願ひが有ります故——」蛇「何だ内密、イヤ内密などは許されぬ、聲、く申述べよ」我「貴方の外は誰の耳にも入

れられぬ事柄ですから何うか内密に」最と低い聲で云つて居る、蛇「内談などは聞く耳持たぬ」我は詮方なく又聲を潜め「何うか三日の御猶豫を、實は此の憫れむ可き華子の娘を引取つて來て遣りたいのですから、念の爲め貴方が同道して下さつても構ひません、費用は私が支辨しました」殆ど囁く様に請ふた、蛇兵太は大聲に「馬鹿め、其様な願が聞かれる者か、三日の猶豫を得て逃亡する積りだらう、此女の娘を引取りに行くなど、口實は旨いけれど其手は食はぬ」華子は此言葉を聞いて身を震はせた。

「エ、エ、私の娘を引取る爲めに三日の猶豫、其れでは未だ小雪は茲へ來て居るのでは無いのですか、小雪は、小雪は、今何處に居るのです、小雪を連れて來て下さい、サア市長さん、斑井様」蛇兵太は怒る如く床踏鳴らし「フム悪人の片割が居やがるワ、黙れ悪婆、本統に世が逆様だ、前科者が市長に成り、淫賣婦が貴婦人の様な看病を受けて居るとは」とて言葉と共に更に我、瓦我の首筋を引緊めて振廻し「市長さんの斑井様など云ふ者は茲にゐぬ、此奴は盜賊だ、追刺だ、前科者の我、瓦我だ其れだから此通り此方が捕へるのだ」華子は骨ばかりと見ゆる手で支へ起きて其の首を差伸べ、恐れと驚きと懐かしさを眼に浮かべて我、瓦我の顔を窺いたが、之れが此女の身に、繩に残つてゐた命と力とを絞り盡したと見える、我の顔を見詰めたまゝ打倒れ、倒るゝ

機みに寝臺の角で、前額をも打つたけれど打つ前に最う事切と爲つてゐたのだ、哀れ華子は斯の如き景状の中に、斯の如くにして此世を去つた。

我、瓦我は斯と見て、我が首筋に在る蛇兵太の手を捉へた、頑丈な蛇兵太でも我、瓦我の力に逢つては小兒よりも弱く見える、我、瓦我は其手を解き放して「貴方は此女を殺しました」蛇兵太は益々怒り「何だ、無禮な、サア下にゐる巡査を呼ばうか、其れとも尋常に此手錠に掛るか」手錠でも用ひねば我の如き大力な罪人は一人の力に合はぬ、我は無言で室の隅に行き其處に在る古い鐵製の寝臺より一本の鐵の棒を抜き取つた、流石の蛇兵太も此見暮には恐れを催し、戸口の所へまで三足ほど退いた、我は鐵の棒を持つたまゝで「暫しの間、邪魔せず其處に控へてお出なさいよ、爾もないとお身體の爲になりませんよ」云ふ言葉は静かだけれど、千斤の力がある、蛇兵太は若し手下の巡査を呼ぶ爲に下へ行けば其間に我に逃げられる恐れもあるから、詮方なく其言葉に従つた。我が何れほど逃亡の名人かと云ふ事は彼れが熟知する所である、斯て我は華子の死骸の傍に行つた。

四一 入獄と逃亡

華子の死骸の横たはつてゐる寝臺の方へ、我、瓦我は近づいたけれど、彼れは依然として鐵の棒を持つた儘である、若し蛇兵太が邪魔でもすれば叩き殺すとの見暮が、其の落着いた陰氣な顔に現はれてゐる、流石の蛇兵太も如何ともすることが出来ぬ、唯だ戸口の邊に立て彼れの爲す所を見張つてゐるのみである。

彼れは鐵の棒を杖についで、無言で華子の死顔を眺めた、此時の彼れの感慨は何の様だらう、云ふに云はれぬ憐れみの色が満面に現れて、唯だ默然、只暗然として、暫しの間身動きさへもせなんだ、頓て彼れは氣を取直した様に、華子の枕許に膝を折り、死骸の首を抱上げる様にして、其の耳へ口を當て、細い細い聲で何事かを囁き告げた、果して何事を囁いたのだらう、囁く方は今半へ引き立られる人、囁かれる方は既に此世を去つた身である、兩人の間に何の様な默契が有らうとも口から耳に其情が通するだらうか、若し華子が此の囁きを聞いたとすれば冥府から聞取つたのだ、此の世の人は誰も其の聲、其の言葉を聞き得なんだ、けれど聞えたと聞えぬとに拘はらず、囁く方は之で氣が済むのだ、愚痴か迷ひか知らぬけれど此愚痴、此迷ひが人生の最も崇宏な力である趣味である信仰である、兎に角、此様を親しく見て居た看護婦長が後で幾度も人に語つた所に依れば、我、瓦我が囁くと共に華子の死顔に一種の神々しい笑が浮んだと云ふ事である、

此の看護婦長は尼さんである、深い宗教の信仰に生涯を捧げて居る人だから嘘は吐かぬ、何の様な事が有つたとて、無い事を有るとは云はぬ、或は全く我、瓦我の親切な言葉が華子の靈に通じたかも知れぬ華子と我、瓦我の様な意義の相合し同情の相結ばれて居る間柄には、死後と雖も靈犀一脈の通ずる所が有るかも知れぬ。

斯くて我、瓦我が自分の顔を退いた時には全く華子の顔が、其の前とは違つた様に美しく成つて居た是は我が其の開いた眼を撫で卸して閉ぢて遣り、前額に掛つた短い髪の毛を撫で上げて遣り、而うして傾いた枕をも直して遣りなど仕た爲でも有らう、全く華子は天國に登つた人の様に顔が輝いて居る、思ふに人の死ぬると云ふ事は更に明るい所へ出ると云ふ事かも知れぬ、我は更に華子の冷たい手を取つて之を戴いた、戴いた後で、懐かしい人に分れる様に其手に接吻した、之で我の勤めは済んだ。

此様な人に斯くまで信切にせられるれば、華子に若し靈あらば深く感ぜずには居られぬだらう。斯くして我は静かに立た、而うして一方なる蛇兵太に對ひ「サア命令に従ひませう」と云つた。

直ぐに我、瓦我は此市の監獄に投ぜられた、追つて中央の監獄に移されるのである、無論市中

の驚きは一方ならぬ程であつた、市長の捕縛、市長の捕縛、と口から口に傳はつたが、彼れは前科者で有つた、偽名を以て此市民を欺いて居た、本名は我、瓦我と云ふのだと、様々に語り合ふ噂が、彼れの今までの功勞を掻消して了つた、今まで甚く彼れの功徳や善根に服して居た人までも、「而うだらうよ、身分不相應に得た金で無ければ、彼あまでに人に施す事は出来ぬ筈です」などと言ひ合つた、人情の反覆、手掌を反すが如しとは此様な事を云ふのだらう。

けれど斯る中にも彼れに忠實な者は有つた、其の一人は彼れの家に雇はれて居る老女である、老女は主人の入牢を聞き、驚きも呆れも泣きもしたけれど、一旦の驚きが収まつて、唯だ主思ひの一點で、晝も蔭膳を据え、夜に入つても、毎も主人が役所から歸つて来て二階の室へ行く時に取つて行く居室の鍵を、常に懸ける柱時計の下へ懸け、若しや主人が常の通り歸つて来たとした所で小言一つ謂はれる點の無い様にし、其身は孤燈の影に針仕事をして居た、斯うまで忠實に勤務するは全く主人の薫陶に出た事だらう、早や夜の八時とは成つた、不斷ならば最う、遅くても門の戸が開いて主人の足音の聞える頃であるのに、其音のせぬのが、最と物足らぬ様に思はれ殆ど心細さに堪へぬ、稍あつて室の一方に在る時計を見ると、時計の下に懸けて有る主人の居室の鍵をば、外の戸を開いて手を差延べて取らうとして居る者が有る。門の戸が開かぬのに、何

者が何うして這入つて來たのだらうと、老女は痛く驚いて殆ど叫び聲が口まで出たけれど、叫びはせなんだ、鍵を探る其の首、其袖口、確に見覚えがある、我が主人である「オヤ旦那ですか」と壓伏した様な低い聲で云へば「婆や、静かにおし」と云つて、音もさせずに戸を開いて中に入つたは、全く主人である、昨日までの斑井市長、今の我、瓦我である、彼れは先刻牢に入つたばかりなのに、何うして茲へ現はれたのだらう、其の得意の術を以て牢を脱して來たのである。

四二 入獄と逃亡 二

老女は我、瓦我の顔を見て「旦那様は今朝から——」と云ひ掛たが其の後の語は餘り失禮に當ると思つて控へたの口から出なんだ、我は自ら其語を補足し「オ、私は今朝から牢の中におたのだよ、今夜牢の窓の鐵の棒を取脱し、其處から忍び出て屋根を飛び降り、爾して此通り歸つて來たのさ」全く彼れは、昔ツローンで四回まで逃亡を企てた其の得意の手段を以て牢を破つて出て來ただけれど、彼れは落つてゐる、其の言葉の静かさが、直ぐ背後から捕吏に追跡せられてゐる人とは見えぬ、彼れ餘ほどの決心を持つてゐるに違ひ無い。

彼れは更に老女に云ふた「直ぐに尼さんを呼んで來てお呉れ、多分尼さんは、今朝亡なつた女の

死骸の傍にまだ祈つて居られるだらう」尼さんとは彼の看護婦長だ、死骸とは華子を指すのだ、老女は畏んで無言で去つた、後に我は鍵と手燭とを取り、火を點して二階なる自分の室に登つた先づ燭臺に火を移し、爾して窓から町を眺めた、町には多分追手の役人が掛廻つてゐる事だらう最う我、瓦我の脱牢と云ふことが彼の蛇兵太の耳にも入つたに違ひ無い、我は更に、燈火の外に洩れぬ様に窓の戸を締め、其の身は手燭を持つた儘で奥の間に入つた、茲は一昨夜、彼れが自首の決心を起す前に徹夜して煩悶した所である、彼れが昔ツローンの獄を出てダインの高僧の家に入つた時に着た着物も、野原で子供から奪つた銀貨も茲に在るのだ、彼れは紙を展べ筆を執つて「此品々は私我、瓦我が昔身につけし者にして、銀貨はダインの野原にて子供より奪ひたる銀貨に御座候」と書いた、斯うして置けば今茲に捕吏が來て没取して行つて其れ／＼法律通りに處分して呉れるのだ。

書き終つた所へ見音がして下から誰か上つて來た、別人で無い今しも老女が迎へに行つたの尼御である、此人は憂世の人の情を捨てより既に十何年、讀經と苦經とに心を練り、身を神に捧げて慈善の業に従事し、今は人にして人の弱點を脱し、只神の道のみを守る身の上では有るけれど憐む可き我、瓦我の今の境遇を察しては、枯木の如き心にも無限の悲しさ哀れさが湧き出たと見え

顔も青く眼も重い、而うして震ふ聲で「最一度、彼の女に逢つてお上げ成されますか」と問ふた彼の女とは無論華子の死骸なんだ、我は手早く次の書類を認め掛て居たが、立上つた「イ、エ、彼の室へ何けば又捕縛せられる許りです、死骸の傍で騒動するのは罪ですから最う行きません」と云ひ更に、今書いた書類を差出し「私の居無くなつた後で、之を教會の主にお渡し下さい」一種の書置の様な者だらう、尼御は無言で受取つた、我「何うか貴女が、一應讀んでお置き下さい」「尼御は最と從順に聞いて讀んだ、其文は「此の家屋及び附屬する財物一切、恭々しく教會へ寄附致し候間、私の裁判の費用と、今朝死去せし華子と云ふ女の葬式料を支拂ひ、其の残りは悉く貧民へ御施し下され度く候」とある、纔に讀終る時しも、下の室から尋常ならぬ人の聲と物の音とが聞えた、我は手燭を持つたまゝ、何事かと階段の傍まで行つた、尼御も其後に從つた。

聞けば是れ捕手が來たので聲の立のは老女が其れを遮つて争ふのである「イ、エ此二階にはイ、エ其様な人は茲へ來ませんよ」捕吏「來て居るか居ぬかを、尋ねるのでは無い、法律上の御用を以て此二階を検ためると云ふのだ、居るか居ぬかは檢たれば分る事だ」嚴めしく言ひ切る聲は紛れも無い蛇兵太である。

全く其通りである。居るか居ぬかは檢めれば分るのだ、階段の一個しか無い二階だから捕吏が上つて來れば我は袋の中に入つた様な者だけれど、彼れは慌てもせず、先づ持つて居る手燭を吹消し、燧爐の棚の上に置き、尼御に對ひて「不幸な者の爲にお祈り下さい」と云へば、尼御は其意に從つて、燭臺の前に俯向き祈りを初めた、我自らは袋の奥にも均しき奥の室の暗に入つた、入るが早いか靴音高く上つて來たのは蛇兵太である、彼れは燭臺の前に祈れる神妙な尼御の姿を見、一方ならず意外の感を爲した、定めし手に終へぬ我、瓦我が必死と爲つて抵抗する覺悟だらうと思つたのに、唯だ優しい一老尼が、最とも最と平和の姿で餘念も無く祈つて居るので全く張り合が弛んだ様な者だ。

本来此の蛇兵太は法律を敬ふ様に神を敬ひ、神と法律とは少しでも不敬を加へては成らぬ者と信じて居る、其の外には情も容赦も何も無い、彼れは神の前に拜跪して居る尼御を見て、其の祈りを妨げるさへ恐れ多い様に思ひ、其のまゝ無言で立去らうかとも身構たが、其れでは法律に對する義務が濟まぬ、殊に彼れは日頃から此尼御の道徳堅固な事を知り、取分けて嘘を吐かぬ其の操守に感服して居る、此尼御の祈る熱誠の影に我、瓦我の様な惡人が潜んで居やうとは、彼れの信じ得ぬ所であるけれど、彼れは遂に問ふた「尼御よ、法律の爲に止むを得ずお妨げを致しま

すが、此室に貴方はお一人ですか、全くのお一人で「尼御は少しも躊躇せぬ「ハイ一人です」成ほど一人に違ひ無い、蛇兵太は當惑氣に室中を見廻して、次の間の暗にも目を注ぎ「實は今夜脱牢した者が有ますので、私共は搜索して居るのです、若しや貴方は其の者をお見受けには成ませんでしたか、其の者は我、瓦我ですが」尼御は「イ、エ」殆ど神聖な言葉を吐く如くに、續けて二度まで事實にあらぬ言葉を吐いた、噫此尼御は、世捨人と爲つて何十年、此の二言の偽りほど深い歸依の言葉が有るだらうか、此言葉こそは却て天國にも、尼御の功德として永く記録せらる、だらう、餘り確な言葉だから流石の蛇兵太も、其の上を問はずに退いた、燧爐の上には今吹消した許りの手燭が未だ煙を吐いて居るのに、彼れは其れをさへ怪しみ得なんだ。

此夜の眞夜中に、此土地から巴里へ行く街道を、風呂敷包を持つた職工風の男が、暗を潜つて急ぎ去つた、此男は即ち我、瓦我である、職工風の衣服は定めし自分の建てた工場の中に在つたのだらう、風呂敷包は兼て銀行に預けて有つた七十萬の大金であることが後で合點せられた、此翌日華子の死骸は教會の引受で井田墓地へ質素に葬られた、斯の如くにして華子の生涯は終つたが、其の恩人我、瓦我は未だ終らぬ、娘小雪も未だ終らぬ、是からが又新しい幕である。

四三 むかし話

茲で一回の昔話をして置かねばならぬ、時は千八百十五年六月の十八日、歴史を讀む人は知つて居やう、此日は千古の怪傑翁拿が最後の大敗北を遂げた汪多樓の激戦の日である、本篇の最初に記した我、瓦我の初めての出獄の日よりも猶ほ三月ほどの前である。

戦争の終つた汪多樓の野に早日は暮れて、夏の夜の月が屍の山、血の池を照してゐる、晝間打破つた銃砲の煙が猶ほ消えも終らず幾里四方を罩籠めてゐる中に、所々英獨聯合軍の戌兵の焚く篝火も見え、或所にはまだ燃えてゐる家なども有る、眞に無凄光景とは之である、昔の人は古戦場をば人間凄涼の極みとは言做してあるが、古戦場よりも、死骸のまだ片附かぬ新戦場の方が何れほど無惨に見ゆるかも知れぬ。

此無惨の光景の中をば、人目を忍び忍んで這つて歩いてゐる人が有るとは又不思議では無いか彼れは何をしてゐるのか、此處の死骸、彼處の死骸をと検め、時々番兵や憲兵の通る足音に耳を澄して、或は自分の身を横たへ、死骸の眞似をして足音の通り過ぐるを待ち、或は匍匐になつて行手を透かし見るなど其れは用心綿密である、果して何の爲だらう、若し敵情を探る爲な

らば餘ほど豪膽な軍事探偵である、若し亦其の他の使命の爲ならば天晴の勇士と云はねば成らぬ、所がさうでない、其様な褒むべく感すべきでない、彼れは泥棒だ、死骸の身に附いてゐる金品を盗むのだ。或國には火事場泥棒と云ふ横着な商賣も有る相だが、其上を越す戰場泥棒とは、何と驚いた職業ではないか、何の様な人間のする事か、孰れ兵士の古手か何かで有らうが其の顔を見て遣り度い。

彼れは今しも俯伏して、但有る死骸の指から金の指環を抜き取つて、兼て用意してゐる脇下の袋の中に收めた、さうして匍匐の儘で行く手を眺め、一足前に出やうとすると、背後から着物の端を捕へて引く者が有る様に感じた、流石の戰場泥棒も之にはソツとしたけれど、直ぐに氣を鎮め、靜かに背後を顧視すると、今しも指環を抜き取つた其の手が自分の袋の方に纏はつてゐる、彼れは呟いた「何だ憲兵かと思つて肝を冷したら幽霊だ、幽霊に捕へられるは先氣易い」此様な際にも此様な横着な言葉を吐くとは、成るほど此の氣でなければ此商賣は出来ぬ筈だ、彼れは振拂つて去らうとしたが、思ひ直した様に「待てよ、金の指環を箝めて居るからは士官以上だぞ、未だ稼ぎが有るかも知れぬ」と呟き更に振返つて、其の死骸を、他の死骸の下から引き出した、勿論血だらけの顔だから月の光りにも能くは分らぬが、肩に金の綬が掛つて居る所は確に佐官だ、

彼れは其の胸を探つて金時計を探り當た、喜んで之れを自分の袋へ轉居させた、次には死骸の衣囊を探つた、茲には軽く無い財布が有つた、之れをも同じく轉居させ「ア、思つたより有福だつたぞ」と云ひ再び這て去らんとすると、死骸の口に聲が有つた「有難う」と謝する言葉が明かに聞取られた、ア、此人は未だ死切つては居ないのだ、自分が盗まれるのを、半死半生の中で介抱を受けるのだと思ひ、謝する言葉を吐いて居る、泥棒は返辭も出ななだが、士官は更に蟲の息で「戦は何方が勝ちました」泥棒「英國方が勝ちました」士官は「エ、残念」と云つたが併し目は開かぬ、全く其れ丈けの氣力も無いのだ、而うして更に「オ、私の胸に金時計が有ります、衣囊の中に財布が有ります、其れを貴君に上げますから何うぞ取出して下さい」眞逆に「最う頂きました」とは答へぬ、唯だ柔順に「ハイ」と答へ、言葉の儘に胸と衣囊の中とを探り「最う有りませんよ」士官「では盗まれたのだ、私を蘇生らせて呉れたお禮に貴君へ差上げやうと思ひましたのに」果して此士官が眞に蘇生り果せるや否やは未だ分らぬ、折しも遠くの方から番兵の近づく様な足音が聞えたので泥棒は立たうとした、士官「ア、命の親、何うかお名前を聞かせて下さい」泥棒は當惑げだけれど小聲で「貴方と同じく佛國方です、最う番兵が來ますから話しては居られません、先づ貴方の命だけは助けて上げましたから、後は御自分で、逃られる丈けお逃げな

さい」身動きさへも出来ぬ者に逃よとは無理である、士官「貴方の階級は」泥棒「軍曹です」士官「お名前は」泥棒「手鳴田と申します」ア、是れが手鳴田軍曹か、後に華子の娘小雪を預つた軍曹旅館の主人手鳴田は、即ちこの戦場泥棒である。唯だ此一事で彼れが何の様な人間かと云ふ事は分つて居る、士官「有難い、手鳴田軍曹、此名は最う忘れません、私の名も云つて置きます、少佐本田と云ふのです」手鳴田軍曹「茲で若し目附ければ、私は敵の手で射殺されますから、是れで御免を蒙ります」と云ひ、獲物に膨れた袋を腋挟み、何所とも無く逃て了つた。

四四 再度の捕縛、再度の入獄

右の昔話に在る手鳴田軍曹は既に此篇に現はれて居るが、手鳴田の手に掛つた少佐本田と云ふは何の様な人だらう、多分は之れも後に至れば分る事にも成らうから、諸君は氣長く待たねば成らぬ。

斯くて話は我、瓦我の事に返る。

銀行に預けた大金を引出して、巴里を指して逃去つた我、瓦我は、僅に四日を経て、巴里で又

捕まつた、彼れは巴里からモント・ファメールへ行かうとして、馬車に乗る所を捕吏に見附けられたのだ、多分小雪の許へ行く積りであつたのだらう。

斯くて裁判所へ引出されたが、裁判所では無論に、彼れの大金を持つて居ることが分つて居るから、特に氣を注げて搜索したけれど、彼れの身には唯だ僅の小遣錢が有るのみで、銀行から引出した分は何所へ何う隠したか分らなんだ、其のまゝ彼れは宣告せられた、其の罪は八年前に兇器を以て追刺を働いたと云ふのが重なる箇條で、猶ほ檢事の言ひ立に依ると、此頃此國の南方に出沒して居る。最も危険な盜賊の團隊に加入して居るに違ないと、其の上十九年

も獄に居た前科者と云ふ事で、刑は極端の重い所へ持つて行かれ死刑に處せられた。

被告、我、瓦我は一言の言ひ聞きもせず、辯護もせず、死刑に處せられて上告もせなんだ、けれど死刑は總て國王に上申して後に執行するのだ、其の上申の時、國王から特別のお沙汰が有つて一等を減じ終身刑にす可きだとの命が下つた、察するに裁判所では罪の外に何事をも斟酌せなんだけれども、國王が此男が一地方の市長で有つた事を覚えて居られた爲めだらう、又其の地方に一方ならぬ繁昌を來して其れが爲め、屢内務大藏の兩大臣から、行政官の手本だと上奏した事などを覚えてゐられた爲めだらう、之だけは國王の德澤である、減じた罰は只一等とは言ふ者の死

刑と終身刑とは非常な違ひだ、終身刑ならば其の長く牢にゐる間に、又何の様な事が有つて此世に出られぬとも限らぬ。

斯て彼れは再びツローンに送られ、其の昔苦役した獄で再び苦役に服する事となつた。

暫しが間、世の疑問となつたのは我、瓦我の大金だ、何しろ五十萬圓以上ある事は確かだから、不景氣の世の中では誰も垂涎せずにはゐられぬ、何うしたとらう、何處へ隠して有るだらうと、誰も彼れも訝かつたけれど分らう筈がない、けれど只参考と爲る事柄を記して見れば

彼れはモントリウル市の獄を脱出し、蛇兵太の追跡を免れて、危き間に銀行の金を引出し、其の夜の中に巴里を指して逃げたのだつたが、逃げる道で彼の華子の娘小雪の養はれてゐるフアメルに立ち寄つたことは事實らしい、尤も小雪の許へも誰の處へも立寄りにはせなただけれど、其の筋の報告ではフアメル附近で一夜か二夜も徘徊してゐた形跡が有る、さすれば其の邊へ隠したとらうと、兎も角も隠した者とすれば、彼れは再び其の金を取出して使用する機會の有ることを信じてゐるに氣ひない、身は終身刑に服役してゐるけれど生涯を牢に終る積りでもないと思へる。

且又フアメルの貧しい労働者の一人が妙な事を見た、其の者は曾て牢にもゐた男で、出獄後職業がないが爲めに安い給金で道普請の番人に雇はれ、山と村との間を徘徊してゐるのだが、或る朝、山の叢の中に、鋤と鶴嘴との光つてゐるのを見た、多分は誰かゝ何かの目的を以て隠してゐるのだらうとは思つたが、深く氣には留めずに居た所、其夜の眞夜中過ぎに、長さ一尺も有らうかと思はれる箱を持つた職人が、其の山へ忍び入る様を見受けた、其の時にはさうも思はなんだが、十分間ほど経てふと氣が附いた、若しや今朝の鋤と鶴嘴とは此職人が隠して置いたのではなからうか、さうすると此職人は此山へ何か隠す積りに違ひない、ハテ何を隠すのだらう、今しも持つて行つた箱に極つてゐる、箱は何だ、棺だらうか、イヤ棺としては小さ過ぎる、縦しや生れ立の小兒を葬るとしても、モチツト大きな箱でなくば成らぬ、而うすれば寶だ、金銀であるか紙幣であるか、何にしても金目の物に違ひないと、斯う思つて彼れは直ぐに其の後を追つ掛けて山に入つたが、鋤も鶴嘴も其の人の影もない、一時間ほど山の中を捜して終に目的を達せずには歸つた、が其れから又二時間ほどすると右の職人風の男が山から出て來るを見た、今度は鋤と鶴嘴とを肩にして居るけれど、最前の箱を持つて居ぬ、確に何所へか埋めたに違ひない、斯う思つて彼れは其の男の姿を透かし見たけれど、夜の暗さに能くは分らず、唯だ頑丈らしい身體附に見へ

たから、若し鋤で擲り殺されては詰らぬと、暫しがほど躊躇したが、其の間に職人風の男は暗に隠れて居なくなつた。

彼の番人は翌日から誰にも云はずに獨りで山の中を、間が隙がな捜して見た、けれど物を埋めたりしい場所は遂に見當り得なんだ、餘り其の捜し方が熱心なので、何事をでも嗅いで知る此土地の軍曹旅館の主人手鳴田などは、其の番人を呼寄せて問詰むるほどで有つたが、餘り雲を掴む様な事柄なので何時とはなく噂も消えた、けれど或は此事が何か我、瓦我の大金に關係した事柄ではなからうか、深く疑へば箱を埋めた職人風の男が、我、瓦我自身ではなかつたやうか、自然と解ける時が来る迄は誰にも解けぬ問題である。

四五 獄中の苦役

何所へ大金を隠したかは、分る時の来るまでは分らぬ者として置いて、扱ても我、瓦我は再びツウロンの獄へ、今度は終身囚として入れられ、終身囚たる記に其の眞白な白髪頭へ、青い帽子を冠せられ、赤い着る物の襟には、九千四百三十號と云ふ番號札を縫附けられた、時は千八百二十三年の八月であつた。

序に茲で云つて置くが、此我、瓦我の捕縛と共に、さしも繁昌したモントルウル市は全く繁昌を失つた、丁度亞歴山の死と共に其の王國が瓦解した様な者だ、王の下に附いて居る大將達が銘々權威を争つた様に、斑井父老の使つて居た職長どもが、銘々に利益を争ひ、競争をして、高大な製造所も少しの間に閉場する事に成つた、我が斑井父老と云ひ斑井市長とまで云はれて居た頃は、製造の目的が唯だ良い品物を作るに在つたけれど、我が去つて後は其の目的が利益を得ると云ふ方へ傾いた、其れだから段々と品が悪くなつた、評判が落ちた、買手が減つた、注文が杜絶えた、最う繁昌する筈が無い、憐れ一時の榮華を極めたモントルウル市は元の通り海岸の淋しい驛場とは爲つて、大藏大臣が租税を取立るのに他の驛と同じ様に骨の折れるに立至つた是れで偉人の有る無しが何れほど社會の幸不幸に關するかと云ふ事が分る。

我がツウロンの獄に戻つてより三月の後則ち千八百二十三年の十月の末に、地中艦隊の軍艦オリオン號が修繕の爲にツウロンの港に入つたが、軍艦を見ると云ふ事は此土地の人々が最も好む所で、毎日波止場の邊へ人の黒山を築いた、紳士貴婦人までも出掛て行つた、或日の晝頃、大帆柱の頂邊へ上つて働いて居る一水兵が、猿も木から落ちると云ふ通り激しい風に吹飛ばされ、其

の頂邊から落ちて漸くに帆柱の綱に掴まつて空中に身を支へたとは云ふ者の、繩一筋の端を捉へて空中へブラ下つて居るのだから何時まで支へて居られる者ではない、手の力が疲れて来れば、直ぐに逆巻く波の中へ落ちて、身體が碎けて卷込まれるのだ、彼れは何うか其の繩を手繰り、帆桁の上まで攀ち登らうとするけれど、風が吹捲くつて綱が右左に、分銅の様に揺り動き、身體が或る時は海の上に行き、或る時は甲板の上に来りなどして、少しも定まらぬ程だから攀ち上ることが出来ぬ、其うちに段々と力盡き、必死に跪く苦しさ、下から見人の胸へ奔々と感ぜられた。

アレよくと叫ぶ聲が海岸の群衆からも起り、附近の船からも起つた「何うか助けて遣る工風は無いか」「誰か助けて遣る人は無いか」との聲が人々の口から出たけれど何うにも助け様が無い、斯うなると當人の辛さは勿論だけれど、見て居る人も實に辛い、代れる者なら代つて遣り度いと同情が誰の胸にも湧いて出る、けれど其實見殺しにする外は無いは、餘り情け無い次第である。

其中に當人の力が次第に盡きて行く事が能く分る、若し助けるなら此の咄嗟の間である、此儘で今五分と経れば縦しや助ける工夫が有つたにしても最う遅いのだ、實に危機一髪とは茲である

此の一髪の危機に當り、誰やら、一人、猿の如く身輕に、帆柱に上つた者がある、ア、勇士、彼の空中の人を助けに行くのだ、助けんとして却て其の人も共に死ぬるのかも知れぬ、連も一人の力で助けられる筈がない、けれど彼れは其の様な事に頓着せぬ容子である、人一人を見殺しにするよりも自分も共に死ぬるのが忍び易いと思つてゐるのだらう、彼れは危険を危険とも感ぜぬ、眞に勇士の本性である。

海陸兩側の人々から「危い、危い」との聲が殆ど泣き聲の様に湧き起つた、此の聲に送られて上つて行く彼れ勇士は抑も何者である、身には赤い服をつけ、頭に青い帽子を冠つて居る、ア、彼れは懲役人である、而も終身囚である、此様な者が軍艦の中に何うして居たか、彼れは同囚の幾人と共に、腰に鐵鎖をつけたまゝ、朝の程から此の軍艦へ、人足同様に手傳ひに雇はれて来て居たのだ、ツーロンの囚人は毎も港へ雇はれるのである、彼れは多くの人々と同じく、空中に懸れる人の苦しむ状を視るに忍びず、艦長が、誰か助けて遣る者は無いかと、咄くを聞いて直ぐに「私が助けます」と斷言した、爾して艦長の首點くを見るが否や、彼れは工手用の手斧を取るより早く自分の腰の鎖を叩き切つた、其の力の強い事は宛で腐れ繩でも切る様に見えたけれど此時は誰も氣が附かなんだ、實際其様な事などに氣を付けて居る場合でなかつた、けれど後では心附

て噂し合つたと云ふ事だ。

彼れは上り上つて帆桁の所に行き、其上に立つて四遺を見廻したは、善戦の老將が戰場に立つて先づ遠近高低を見る様な者でも有らうか、此とき又吹いて来る一陣の風が彼れの終身囚たる印とする青い帽子を吹き飛ばした、下から現はれたのは眞白な白髪頭である、見る人は皆驚いた「アレ老人だよ、若者ではないのだよ」と。

四六 老囚人の最後

白髪頭の老囚人は帆桁の上に立つて四邊を見廻し、頓て帆桁の一端まで歩いて行つた、實に危業である、観る人々には輕業の様に感ぜられた。

噫、彼れは人を九死の中より助けんが爲めに自ら同じ九死の地位に陥るのでは無からうか、助けを求めて居る其人と共に助けを呼ぶ事に成るのでは無からうか。

斯る間にも綱の先に垂れて居る水兵は一刻一刻に力が盡きて行く、最う此の老囚人が何の様な事をしたとて、間に合ふか合はぬか分らぬけれど、老囚人は些しも躊躇せぬ、彼れは帆の揚げ卸しに用ひる綱を取つて帆桁の先に結び着けた、而うして其の綱の一端を下に垂らし、自分が其の

綱を傳ふて下り初めた、暫くの間は彼れ自身も空中にブラ下る分銅の様な位置とは爲つた、全く一人の危険を救ふが爲に、同じ二人の危険を作り出した様な物だ、観る人々は或は「危い、危い」と連呼し、或は「大事を取らねば可いぬぞ」などと勵まし勇めもし、鳴りも止まぬ程の状で有つたが、頓て全く聲を鎮めた、實に餘りの心配に呼吸さへ固くなつて了つたのだ、老囚人は風に吹き捲くられて搖籃の如く空中に搖曳すること數秒時で有つたが、漸くにして不幸な水兵の掴まれる綱を捕へ得、最う既に疲れ果て居る水兵の胴の邊をば、自分の縫つてゐる綱の一端を以て結び留めた。

彼れの技は神の様である、片手は自分の身を支へる爲に自分の綱を握り、片手を持つて他の人の胴を結ぶとは、空中に於て殆ど出来ることで無い、其の間、観る人々は、爾なきだに吹ききつてゐる木枯しに自分の一呼吸を添へるをさへ恐るゝ如く、一言をも一句をも發せぬ、唯滿腔の心配を自分々々の眼に集めて老囚人のする事を見詰めてゐるのだ、是れだけの深い切ない同情が又と有らうか、唯此の同情のみの爲にも、天は此の老囚人をば過ちの無き様に守護す可き筈で有る纒に一二分の間だけけれど、観る人々は其の辛い心配の胸に、年の様に長く感じた、漸くにして老囚人は確と水兵の胴を繋ぎ、最早水兵が手を放したとて落ちはずまじきを認め、今度は二本の

網を手繰つて元の帆桁まで上り歸つた、其の身の軽さは人間の様では無い、斯て彼は徐々に網を手繰り、水兵を引上げ初めた、彼れは腕力に於ても人間の様で無い、殆ど怪力である、少しづつ静かに又静かに、重たげにもせず水兵を引上げて終に自分の手に抱き取つた。

此時の、観る人々の喜びは殆ど譬へ様が無い、風の音、波の音を壓して海陸一時に歡呼の聲が聞えた、聲の過半は「其の囚人を特赦せよ」とか「放免せよとか」云ふので有つた、眞に特赦する價値が有ると云つても好い。

帆桁の上まで上ると、最う水兵は大陸に上つた様な者だ、熱心に老囚人の手を握つて謝した上自分の職掌の場所へ歸つたが、後に老囚人は獨り帆桁の上を傳ひ元の所へ歸らうとした。

彼れは今までこそ氣が張り詰めて、何の危険をも感ぜずに居たけれど、救ふべき人を救ひ終り最う我が務めが済んだと思ふと俄に心が弛んだのか、或は餘り危険な仕事をした爲め眼でも眩めくことに成つたか、帆桁の上で搖々と踏踏いた「ア、危い」との聲が、我れ知らず觀る人の口を發し、彼れ自身も「苦」と叫んだ、是れが人々の彼れを見た終りである、彼れも亦人々を見た終りだらう、彼れの足は踏つた、彼れの身は帆桁の上から幾十尋の海に落ちた、噫、彼れは人を助けて自分が其の身代りに爲つたのだ、人を助ける力は有つて自分を助ける力はなかつた。

直に四艘の端艇が彼れの爲に卸された、若し彼れを援け得ずば、人に對して言譯のない落度だと、船長も水兵等一同も思ふて居る、端艇は逆巻く波を冒して縦横無盡に海を探したけれど、此邊には無数の大船が碇泊してゐる、彼れ或は何れかの船の底へ卷込まれたのか知らん、遂に浮上つて來ぬ。他の船舶も斯くと見て端艇を卸し、及ぶべき丈け搜索に力を添へたけれど、無益である、斯くて夜に入るまでも搜索を續けたけれど終に老囚人の死體を得なんだ。

此返の海底は、深い海藻が繁つてゐる、蟹さへも之に揃まつて死する事がある、死んで死骸の上らぬ事は稀ではない、多分彼の老囚人は海藻に揃まれたのだ、天の網に罹つてゐるのが更に海藻の網に罹つたのだ。

此翌日即ち千八百二十三年十一月十七日此土地の新聞に左の記事が出た、「昨日オリオン號にて人を救ふて却て自ら水死した義侠なる老囚人は遂に死骸だも浮び上がらず、彼れは當地の獄に第九千四百三十號として服役せし者にして、名を我、瓦我と云ふ云々」全く彼れは、讀者の察してゐた通り我、瓦我があつた、斯の如くして、我、瓦我は全く死人の數に入つた。

四七 X節の夜一

我、瓦我は死人の數に入つて以來、音沙汰が無い、勿論音沙汰がある筈が無い、多分は藻屑と爲つて海底に眠つてゐるのだらう。

彼れが海に落ちた年の暮である、一年に一度のX節の夜とは爲つた、X節が何の様に祝はれ全國に何の様に賑ふかは殊更記す迄も無い、常に彼れの氣に掛つてゐた少女小雪の預けられてゐる、モントフアメールの如き田舎の驛場さへ、見せ物や夜店が出て、相當に繁昌し、不斷は多く客の無い軍曹旅館も四五組の客を得た。

抑も此モントフアメールと云ふ市は山の半腹とも云ふ可き所に在つて、常に飲料水が乏しい、町を離れて二十町も行き、崖の下に在る泉を汲んで來るのだ、晝間は水を賣りに來る者が有つて軍曹旅館なども、其れを買つて使ふけれど夜に入れば水賣が來ぬ、桶が空になれば馬桶を提げて暗の中を二十町も汲みに行かねばならぬ、此水汲が當年僅八歳の少女小雪の役目であるとは、殆んど嘘の様だけれど嘘で無い。

讀者の既に知る通り、小雪は軍曹旅館の主人手鳴田夫婦に、全く下婢として使はれてゐる、取分けて母親華子からの仕送りの絶えて以來は使ひ方が一入劇しく、轉ど瘦せ細つた身が全く凋びた様になり、頬も落ち眼も凹み、美しかつた母の面影に似も附かぬ醜い容貌とはなつてゐる、此

様な少女が、肥え太つた逞しい主婦に追廻されてゐるのだから近所の人が、象に小鼠が使はれる様な者だなど噂するも無理は無い、此夜も小雪は、臺所に在る卓子の下へ身を縮めて跼がみ込み、一方から洩れて來る燈火に透かして靴編んでゐる、此靴下は主婦の娘疋子が穿く物で此の卓子の下が小雪の居所である、卓子の下ならば主婦の邪魔に成らぬ、叱られて鞭たるゝ時、幾等か鞭を避けることも出来る、其様な事から自然と茲が小雪の居間とは成つてゐるが、外の者は身體が支て此様な所へ這入つてゐる事は出来ぬ、是れで小雪の身が何れほど小さいかも分り、日頃何の様に扱はれてゐるかも推量せられる、全く小鼠の境遇である、犬猫ほどの待遇は決して受けてゐぬのだ。

靴下を編みつゝも小雪は時々何事かを考へ込む容子である、八歳の少女が、心に屈托を持つてゐるとは、餘り不思議な様だけれど、年は八歳でも艱難に老てゐるのだ、其の考へるは何事だらう、水桶に水の少いのが心配なんだ、毎も夜に入つて汲にやられるが辛いから、成可く晝間から水の切れぬ様に用心はして置くけれど、今日は餘計に客が有つて餘計に水を使つた、何うか今夜中足りて呉れよば好い、此上に若し水を要する事が有つては大變だと、獨り氣遣つて斷間なく主婦の舉動や店先の容子に目を配るは小さい心に何れほどの重荷だらう。